
魔法先生ネギま！～不死鳥の遊撃士～

メンデル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜不死鳥の遊撃士〜

【Nコード】

N8793R

【作者名】

メンデル

【あらすじ】

処女作です。自己満足な作品ですが、楽しんで頂けたら嬉しいです。

はじめに

（はじめに）

この作品には、

原作崩壊！？

作者の偏見と脳内設定垂れ流し

他作品分が過剰

主人公が完璧超人

更新が遅い

作者は厨二病予備軍

などの成分を含みます、これらが苦手な方は読むのをご遠慮された方がよろしいかもしれません、またそれらが大丈夫でも私は小説を書く機会が少ないため誤字・脱字、ピントがズレた設定、話の内容が薄い、などの至らない部分も多々あると思われませんが、それでも皆様から生暖かい目で見守って頂けたら幸いです。

第0話 く遊撃士とはく

突然だがこの世には二種類の世界が存在していることを知っているだろうか。

一つは機械文明が発達した今正に我々が生きている世界、中にはその世界を旧世界と呼ぶものもいるがここでは現代世界としよう。

もう一つは魔法を根幹とする現代世界と全く異質な文明が発達した世界、それをここでは魔法世界としよう。

この二つの世界はゲートと呼ばれる装置によって繋がっている。

しかし魔法世界および魔法、そして魔法を使役する者、つまりは魔法使いや魔女を知るものは現代世界にはごく少数しかない。

魔法を使えるものが無闇に魔法を知らない現代世界の人間に魔法のことを教えるのは禁忌であり、その禁忌を犯すものには厳罰が与えられる。

それほどまでに魔法とは現代世界の常識を根底から覆すことが可能な力なのである。

ところで、話は変わるが遊撃士協会フレイサーズギルトという組織をご存知だろうか。

遊撃士協会は主に魔法世界で活動している組織であり、表立ってはいないが現代世界でも活動している。

遊撃士協会に所属している者は遊撃士フレイサーと呼ばれ、遊撃士は物資の移送などから要人の警護や魔獣の討伐、時には国々の仲裁など多岐に渡り、民間だけでなく国からの依頼も受けるときもある。

勿論危険な依頼には相応の報酬金が必要である。

遊撃士協会は魔法世界の世界中の国々で活動している、何故遊撃士が世界中で活動できるのか、それは前途した国々の仲裁をしてくれること、軍や警察などでは対応しきれない民間の依頼をこなしてくれること、そして一番大きい要因としては遊撃士協会の規約にある、その規約とは、

「一、遊撃士は国の政治には直接干渉せず、常に民間の味方である。

」

とある。

この三つの要因があるからこそ遊撃士は世界中で活動できるのである。

次に遊撃士の中に存在するランク制度を説明しよう。

遊撃士は個々の技量によりランク分けされ、

- D
- C
- C +
- B
- B +
- A

の六つのランクに分けられ新人はDランクから始まり、Aランクともなると凄腕遊撃士などと呼ばれるようになる、しかしランクが上がるに連れて危険な依頼は増えていくのでランクを上げるのは楽ではなくなってくる。また遊撃士は依頼をこなし実績を積んでいくと、称号を受け取り、それを名乗ることができるようになる。

称号は全て現実に生きる生き物から架空や神話に出てくるような生き物の名前であり、実績や戦い方によって称号が与えられる。

そしてその遊撃士協会に所属する一人の遊撃士がいる。

類い希なる才能に恵まれ15才にしてB級遊撃士まで上り詰めた。

その烈火の如き戦い方と依頼の成功率の高さ、常に人命を最優先するその姿勢から少年に与えられた称号、それは……

フェニックス
不死鳥

これはそんな少年とそれを取り巻く人々の物語である……。

第1話 京都の夜にて

ここは京都、花の都とも呼ばれ大昔日本の都も置かれたこともある場所である。

そんな歴史ある場所でのその事件は起きた。

関西呪術協会の総本山近衛家、そこのお嬢様、近衛木乃香が誘拐されたのだ。

話はその事件の途中から始まる・・・

時刻は夜、空が漆黒の闇に包まれていた。

そんな京都の夜の空を一つの影が走っていた。

影の正体は黒いローブを身に纏った男だった。

ローブの男は木の上で止まりそこから遙か前方を見下ろす。

「ん、あれか・・・」

そこでは二人の少女と奇怪な者達が戦っていた、二人は背中合わせになり、

「修学旅行帰ったら剣道教えてよ、刹那さん。」

「えっ？いいですけど・・・。」

などと会話し、武器を構えて鬼達に向かっていった。

その時一匹の妖魔が素早く明日菜の懐に入り込み手にした剣を振るう、

「きゃ！」

明日菜は咄嗟に武器で受け流すが敵の攻撃は止まらない、

「なかなかやるなあ嬢ちゃん、しかし某は今までの奴等とはちと出来が違うぞ!？」

ついに防御が間に合わなくなり、攻撃を受けてしまう、

「む・・・烏族!?!明日菜さん!?!」

しかし刹那の方にも巨大な影が忍び寄り大きく振りかぶる。

「っ!」

鬼は力強く手にした金棒を振り下ろす、刹那は素早く手にした刀で受け流す。

「神鳴流の嬢ちゃんの相手はワシらや。」

(こいつらも別格か・・・マズいな・・・)

「む、そろそろ危険だな、時間も無い・・・行くか!」

そう言うと男は跳んだ。

「流石にやるのう、だがな!」

鬼は金棒を振るう、刹那はそれを受け流す、そして反撃を打つ、しかしそれを受け止められる、そうすると刹那は素早く間合いをとった。

すると子分鬼が大鬼の肩を叩き、

「なんか上から来やすぜ、オヤビン。」

「ぬっ……！」

「何！」

大鬼と刹那は上を見上げる、そこには月を隠す様にローブが漂っていた、そしてそのローブの男は戦いが起こっている場所の中央に降り立った。

「何奴！」

ローブの男は刹那と明日菜の方を向き、

「随分と苦戦してる様じゃないか、ここは俺が抑えてやる、行け。」
と言った。

「なっ！貴様何者だっ！」

「安心しろ、敵じゃあない、ともかく祭壇に行け！」

しかし、そんな答えに納得できる筈もなく、

「そんな答えで納得できるか、何者だ、言え！」

そう言った次の瞬間、祭壇に光の柱が立った。

「あ、あの光の柱は!？」

「ほっほー、こいつは見物やなあ。」

光の柱は祭壇で鬼神の復活儀式が完了した証だ。
それを見るとロープの男は

「もう時間が無い、早く行け!」

もう一度刹那に言った。

事の重大さを理解した刹那は明日菜に近づき、

「明日菜さん行きましょう・・・」

「え!ちょ、あのひとは?」

明日菜が言った後刹那は振り返り、

「任せていいんですね?」

するとロープの男は

「任せてもらおう、急げ!」

と言った。

刹那は頷いた後背中を向け

「明日菜さん、行きますよ!」

「え？ちょっと待って！」

と言うと祭壇へ向かい走って行った。

次の瞬間ローブの男は妖魔の大群に囲まれた。

「貴様のせいで獲物が逃げてしまったではないか。」

「貴様が代わりに相手してくれるんだろっな？」

「ああ、存分に相手をしてやる！」

瞬間、周りにいた下級の妖魔が吹き飛んだ。

「な、なんだと！？」

「気当たりか！？」

「どっした、こんなもんなのか？」

「生意気なっ！」

「食らえい！」

しかし、妖魔の攻撃は当たらず男はいつの間にか妖魔の後ろに回りこみ、

「遅い、はああ！」

拳に気を溜めて妖魔達に叩き込む、

「ぬう！」

「ぐおお！」

妖魔が二、三体同時に吹き飛ば、

「獲物無しで我等とこれほど戦える者がいようとは、貴様何者だ？」

「さあな、通りすがりの助っ人ってところかな。」

男は回りを見渡し、

「どうした？まさか、もう終わりではないよな？」

「ぬうん！」

烏族が切りかかる、その瞬間烏族の眉間を何かが貫いた、すると烏族の頭部が爆発した。

「ぐおおお！新手か！ぬかったわ！」

そして何発か弾が飛んできた。

「これは・・・術を施された弾丸！何奴！？」

「ッ！」

男が振り返る、すると

「あれは誰アルか？」

「知らんな……。」

そこには古菲と龍宮真名がいた。龍宮はローブの男を見て、

「……とりあえず撃つとくか。」

銃を向けた。

「ええ！ちよ、ちよっと待ったあ！いきなり撃つのかよ！俺は敵じゃあない。」

男は手をあげる。

「馬鹿め！隙ありい！」

その隙を見て妖魔が男に切りかかる、が

「ふん、甘い！」

男は咄嗟に身体を捻り回し蹴りを決める。

「おおー、なかなかやるアルねー。」

「敵じゃない……ならば何者だ？」

銃を構えたまま龍宮は問う。

「あー、さつきもそんなこと言われたな、とりあえず通りすがりの助っ人とも言うっておこうか。」

「・・・」

引金に掛けた指に力が入る。

「まあ待て、敵じゃないのは確かだ、でも助っ人も来たみたいだし俺はそろそろ失礼するか。」

「ッ！待て！」

「再び会うこともあるだろう、そのときにはちゃんと名乗ろう。」

頭を掻きながら男は言った、瞬間、男はその場から消えた。

「っ！どこへ!?!」

龍宮は周りを見渡したが男の姿はなかった。

「どこ行ったアルか？」

「・・・まあいい、古、お前は人間大の弱そうな奴だけ相手くれればいい。」

「あ、バカにしてるアルね！」

龍宮は目の前の敵に集中することにした。

そのしばらく後、全てが終わって・・・

男は祭壇の方を見つめていた、見つめる先には金髪の少女エヴァンジェリンがいた。

「なんだよ、闇の福音ダーク・エヴァンジェルがいるなら俺の手助けはいらなかったじゃねえか。」

男は次に刹那を見た。

「ま、久しぶりに顔を見られたからいいか、さあて、俺も帰るとしますか。」

そう言つて男は闇夜に消えた。

祭壇にいた刹那は夜空を見上げて

(あの男は一体？まさか……)

などと思考を巡らせていた。

夜空には月が、いつものように大地を照らしていた……。

次の日

修学旅行最終日ネギー一行はエヴァの京都観光に付き合った後ネギの父親、ナギ・スプリングフィールドの別荘へと来ていた。

そこで刹那は木乃香の父親、近衛詠春と話していた。

「長、少し話が……。」

「ん、何ですか刹那君？」

すると刹那は少しためらい気味に、

「実は昨日謎の者が助けに来たのですが、彼ということはありませんか？」

それを聞くと詠春は困ったような顔をした、

「彼……ですか、可能性はあるでしょう、しかし今彼が何処にいるのか私にも分からないので何とも言えませんが。」

「そう、ですか……。」

刹那は残念そうに言った、そして詠春はもう一言、

「なあに、彼なら心配いりませんよ。」

「そう……ですよね。」

青空を見上げて刹那は誰も聞こえないような小さな声でつぶやいた。

「義切……。」

と、一人の人を思い描きながら。

青空にはただ爽やかな風が吹く……。

第2話　く赤い閃光く

修学旅行が終わりヘルマン伯爵の襲撃よりしばらく後の話。

ここは学園都市麻帆良学園、幼稚園から大学まであるとても大きな学校である、学園の中心部には世界樹の木という樹齢何百歳の大木がある、さらに学校の他にもお店などが並ぶエリアがあり全体の大きさは正に都市である。

その麻帆良学園の中等部エリアにてここ最近事件が起こっていた。

それはここ数日夜になると妖怪のようなものが出没すると言うのだが、しかしこの事件では怪我人などは一切出ておらず目撃情報しかない、そのため生徒の間ではこの事件はもうただの噂話と化していた。

だが、この事件をただ事ではないと見た学園側は二人の生徒にこの事件の解決を依頼した。

二人の名は桜咲刹那、そして龍宮真名。

今二人は目撃情報のあった場所にいる。

「情報によれば出現時刻はきまって十時前後、今は九時五十分か。」

真名は時計を見る、両手には対魔用の術が施された弾丸の装填された銃を持っている。

「しかし、本当に現れるのか？」

刹那は半信半疑だった。

「分からん、出なかつたら出なかつたでそれが一番いいさ。」

途端、刹那は刀に手を掛ける。

「そういう訳にもいかないようだ。」

二人は構える、するとむこうから一つの影が歩いてきた。

「一体だけか？」

「ふん、簡単な仕事だな、さっさと終わらすぞ。」

二人は跳び刹那が刀を振るう、

「斬魔剣！」

しかしその攻撃は避けられた。

「何！」

「存外に速いようだ、だが！」

真名は狙いを定め銃の引き金を引く、弾丸が妖魔に向け数発飛んで行く、しかしそれも避けられた。

「ッ、避けるとは……。」

「上級の妖魔のようだ。」

二人は構え直す。

「貴様等、奴の仲間ではないな？」

意外な妖魔の発言に二人は驚いた、

「奴とは誰だ？」

「貴様等には関係に話だ。」

「そうか、ならば消えてもらう！」

「小娘があ！」

真名が銃を撃つ、しかし避けられる。

「そんなものでは当たらぬわ！」

しかし即座に刹那が妖魔の後ろに回りこむ。

「ぬっ、ぬかった！」

「神鳴龍奥義！百花繚乱！」

「グオオオオオオ！」

それで終わった、妖魔は消え去り、跡形も残らなかった。

「ふう、手強かったな。」

刹那は刀を鞘に収める。

「それにしても、こいつが言っていた、奴とはいっただい……。」

二人が帰ろうとしたときだった、複数の気配を察知し振り返る。

「まだ来るか。」

そこにはさっきの妖魔と同じタイプの妖魔が四体いた。

「くっ、流石に四体はきついかな？」

そのとき空から気の塊が落ちてきて妖魔を三体同時に消し去り、煙を巻き起こした。

「なっ!?!」

煙が去った後その中にいたのは修学旅行のときにも現れた黒い口―ブを纏った男だった。

男はいつの間にか刀を持っており、刀が炎を纏ったかと思うと一瞬で妖魔の懐に入り込み、一刀で妖魔を両断した。

「お、お前は!?!」

二人が驚いていた。

すると男は二人の方を向き、

「あの程度にてこずるとはまだまだだな。」

すると男は目の前から消えた。

「ちょ！待っ！」

刹那が言った頃には男は居なかった。

「何だったんだ、あいつは……。」

真名が空を見上げていた。

次の日にも妖魔が出たと言う報告を受け刹那と真名は再び現場へ行った。

しかし二人がその場に着いたとき、いたのは昨日の男とそれを囲んでいる複数妖魔だけだった。

「赤い閃光よ、今日この場所が貴様の死に場所だ！」

赤い閃光と呼ばれた男に妖魔が襲い掛かる、男の持つ刀に炎が纏われる、

そこからはあつという間だった、男は凄まじい速さで次々と妖魔を斬り伏せていった、その速さは正に閃光と言っても差し支えなかった。

「赤い閃光、これほどのものとは……、これでは、どちらが化物か、わからぬな……。」

消えかかった妖魔が言った、それに対し男は笑い気味に言い返した、

「やれやれ、それをお前が言うか？」

妖魔の体は燃えて消え去っていった。

そこに刹那達が到着する、二人に気づいた男は振り返り、

「よお、遅かったな、俺が全部やっちまったぜ。」

「なっ!？」

二人は啞然とした、しかし何かの違和感に気づき、真名が男に言った、

「貴様、修学旅行のときには気づかなかったが変声魔法を使っているな？」

「ほう、流石だな、できるだけ気づかれないようにしてたつもりなんだがな。」

男は二人の方を向き、

「そんなことより、今日の目当てはこいつらではない。」

そして、一呼吸置いて、

「その剣士、手合わせ願おうか？」

そう言い放った。

「何!？」

刹那は啞然とした、しかし真剣な顔をして

「いいだろう。」

「刹那!？」

驚く真名に振り返り言う

「私が奴の正体を探ってみる。」

「・・・わかった。」

真名はやれやれと溜め息いきをした、刹那が刀を抜く、

「準備はいいか？」

刹那と男が構える、そして、

「「いれー」「」

瞬間、男が消え目の前に出現した。

「っ！早い!！」

男が切りつける、刹那はそれを受け流し対を交わし隙だらけの脇腹へ一撃決める、はずだった。

「うおっ、危ねっ!！」

隙だらけの筈だったのをどうやったのか男は脇腹への一撃を受け、
切り返してきた。

「何だと！」

予想外の反撃に攻撃を防いだものの刹那は吹っ飛ばされた。

「ぐっ！」

刹那は立ち上がるうとするが、男はそれを見ているだけで切りかかる気配はない。

「意外に早いな、危うく喰らうところだったぜ。」

男は飄々としている、

「クッ！」

刹那は立ち上がり刀を構え直す。

「ま、まだまだ！」

刹那が切りかかる、

「それでこそだ。」

男は攻撃を受ける。

その後、攻防はしばらく続いた。

「どうした！それでも神鳴流の剣士か！？」

「なめるなっ！」

刹那が一撃を放つが受け流され、反撃がくる。

「くっ！」

ガードが弾かれ体勢が崩れる。

「これで終わりだ！」

男が刀を構える、

（今だ！）

刹那は崩れた体勢のまま刀を構え、

「神鳴流奥義・・・百烈桜華斬！」

奥義を放つ、

「何だと！あの体勢からか！？」

男は刹那の予想外の対応に驚くが、すぐさま刀の構えを変え、

「仕方ない・・・」

技の名を口にする、神鳴流の奥義の名を、

「百烈・・・桜華斬！」

「何！」

お互いの技がぶつかり合いとてつもない衝撃が双方を吹き飛ばす。

何とか着地するが膝をつく刹那。

「神鳴流の使い手だとは・・・。」

一方、男の方は軽やかに着地した、よく見るとフードの顔を覆っている辺りに切れ込みが入っている、

「ふ、ははははは！ここまで出来るとは予想外だ。」

すると、今まで黙っていた真名が言った。

「これ以上芝居は止めたらどうだ、変声魔法が切れてるぞ？」

その言葉に男は反応する。

「えっ？あつ！本当だ！」

男はあたふたしている、その声に刹那が反応する、

「その声、まさか・・・。」

男は諦め、

「まあいいか、そろそろバラす予定だったし。」

男は頭を覆うフードに手を掛けて外す、

その顔を見て刹那は驚愕した。

フードを被っていたのは赤い髪をした15、6の少年だった。

「よ、義切!？」

刹那が少年の名を叫ぶ。

「よお、久しぶりだな。」

意気揚揚と義切は刹那に言う、真名はそんな義切を見て大して驚いた様子もなく言う。

「漆川、何故ここにいる。」

すると義切は意外そうな顔をして、

「何故って、そりゃあ依頼に決まってるだろう。」

と言った、すると真名はもう一つ質問した、

「ならば、刹那を襲うのが今回の依頼か？」

義切は不満そうな顔をして答えた。

「んなわけねーだろ、刹那に勝負を挑んだのは、ちょっとした小手

調べだよ。」

「ならば、今回の任務は……」

「あー、そいつは話すと長くなるからなあ、明日学園長に依頼の中間報告しに行くから、詳しく聞きたかったらそんな。」

そう言うと義切は手を軽く上げじゃあなと挨拶すると、飛んでいった。

真名は呆れていたが、刹那はいまだに啞然としたままであった。

第3話 く約束く（前書き）

大変遅くなって申し訳ございません、

しかし待たせた分、話のボリュームは増やせたと思います、

感想や指摘などを感想に書いて頂けると幸いです。

第3話 約束

刹那と真名が義切に邂逅した次の日、

ネギは学園長に呼び出された、何でも紹介したい人が居るらしい。

「いったい誰なんだろうね、カモ君？」

ネギは肩のオコジョ、アルベール・カモミールに話しかける。

「いやあ、俺っちに言われても分かんねーな。」

学園長室の扉を開けて中に入る、すると室内には学園長、刹那、木乃香、そして赤い髪の少年義切がいた。

「おお、来たようじゃなネギ君、では紹介しようこちらが・・・」

「始めまして、漆川義切と言います以後お見知りおきを、ネギ・スプリングフィールド先生。」

そう言うと義切は頭を下げた、

「あ、こちらこそ。」

ネギも頭を下げる。

「さて義切君、依頼ことじゃが・・・」
「依頼？」

ネギはなんのことか分からず首を傾げる、

「それは俺から説明しましょう。」

義切はネギの正面に立ち、説明し始めた、

「まず、説明を始める前に俺の仕事の説明からしなければなら
ないんだが、遊撃士って知っていますか？」

「遊撃士、ですか？聞いたことはありません。」

ネギは知らない様子だったが、カモが遊撃士という単語に反応した、

「遊撃士ってあの遊撃士か！？」

「カモ君知ってるの？」

「ああ、遊撃士っていやあ……」

カモの言葉を遮るように義切が説明を続ける、

「そう、遊撃士は魔法世界を中心に活動する民間組織です。」

「魔法世界！？」

魔法世界という言葉に今度はネギが反応した、

「遊撃士の仕事は多岐に渡りますが一言で言うならば、『人助け』
ですね。」

「思い出した、漆川義切といやあ、15歳でB級遊撃士まで上り詰

めた注目度の高いルーキーじゃねえか！」

カモが興奮したように叫ぶが、義切は自嘲気味に笑う、

「ふっ、俺なんてまだまだ、世界には俺より強いやつなんてごまんといるぞ。」

「話が脱線したな、それで俺は遊撃士として二年前から詠春さんの依頼を受けています。」

義切が少し間を置いてから話を続けた、

「その依頼内容ですが、大まかに三つあります、まず一つ目は近衛木乃香様の護衛を秘密裏に補佐すること。」

「！」

刹那は少し驚いた様な顔で義切を見ていた、一方ネギは義切に疑問を問う、

「秘密裏というけれど、顔を見せてしまっていないんですか？」

「その答えが今日ここに来た理由なんです。」

義切は学園長の方に向き直り話し始める、

「修学旅行の一件の後、俺は詠春さんに追加の依頼を受けました、それが二つ目の依頼、ネギ・スプリングフィールド及び周辺人物の援助、しかも秘密裏ではなく直接顔を合わせて助けてやって欲しいと。」

ネギは義切の発言に対して質問する

「何故秘密裏ではなく、直接？」

「修学旅行の事件があつたことによつて、影から支援をしていたのではいつか敵に先手をとられてしまつと考えた詠春さんは影からではなく直接会つて支援した方が後々動きやすくなるだろうという結論になつた訳です。」

「敵つてそんな大袈裟な・・・」

ネギの言葉を遮り、義切が否定する、

「いや、修学旅行の事件の主犯格の一人、フェイトという奴が捕まつていない、それにこの間だつてヘルマン卿に襲撃された筈だ、敵はいないと安心はしきれない。」

義切の言葉を聞き、ネギは黙つてしまふ、

「そして最後、三つ目の依頼はここ麻帆良学園の防衛。」

「学園の防衛？」

「はい、もし学園に何か事件が起こつたとき、又起こりそうなとき、さらにその事件が解決されそうにないときに秘密裏に事件関する痕跡を何一つ残さず解決し学園を守る、もちろん、魔法生徒や魔法先生にはねずに・・・」

事実、義切がこの二年間学園において秘密裏に事件を解決していたこ

とはネギや刹那はおるか、魔法生徒や魔法先生達は知らない、たった一人を除いては……

「まあ、一人で学園に潜伏するだけならともかく、一生徒として生活してる上で魔法生徒はともかく魔法先生にバレないようにするなんてのは無理だ、知り合いもいるしな。」

義切の言葉は暗に協力者がいるということを示していた、さらに恐らくはこの場に居る全員が知っているであろう人物、

「そう、想像通り協力者がいるってことさ、誰だと思っ？」

義切が悪戯っぽく口の端を上げて全員に問う、だが誰も分からないように沈黙が続く

「じゃあヒントだ、一、まずは俺を知っている人物、二、情報を改竄できるということは学園内でも一定以上の地位のある人物、三、こんな質問をするということはここにいる全員が知っている人物。」

ヒントを聞きネギ、刹那、木乃香は答えを導き出す、

「まさか……協力者って」

「そう、わしじゃ。」学園長が口を開く、次に木乃香が口を開く、

「おじいちゃんもグルだったん？」

「すまぬのう木乃香、しかしこれもお主を危険な事に巻き込みたくないと思ったからじゃ、わかっておくれ。」

「うづん、別にウチ怒ってへんよ。」

「そうゆう訳で学園長の協力もあって俺は二年間誰にも気付かれることなく学園にいたってことさ。」

「まあ俺の仕事についてはこれくらいだ、これからよろしく。」

そう言っつて義切とネギは握手をして学園長室を後にした。

「これで義君も一緒やねー。」

「まさか二年も同じ学園内に居たのに気付かなかったとは。」

「三人は知り合いなんですか？」

「義君は幼馴染なんよ。」

そう、義切と刹那、木乃香は幼なじみで幼少期は共に京都にて育った、その後義切が10歳のとき彼は遊撃士になった、遊撃士はその性質上忙しい、ましてやランクの低い遊撃士には簡単な依頼が優先して回ってくるので当時の義切は多忙を極めた、次第に二人に会う機会は少なくなっていく、ランクが上がると移動することも多くなり一カ所に留まることが少なくなると連絡の回数も少なくなつて義切がどこにいるのか二人にもわからなくなつていった、実際には二年前から学園にいたのだが。

「そうだったんですか。」

そう言っつて各々が自分等の教室に向かおうとして別れようとしたとき刹那が義切に声を掛ける

「義切！」

「ん、なんだ？」

「さっき言っていた護衛の補佐、あれはどういうことだ？」

「どうということも何もそのまんまの意味だよ、まあ気にせずについて通りに過ごせばいいさ。」

「・・・そうか。」

刹那は何か納得いかない様な感じだった、

「何はともあれ、刹那も木乃香様もネギ先生も何か困ったことがあるれば連絡くれれば良心価格で力になるぜ？」

「えっ、お金取るんですか？」

「冗談だよ、知り合いから金取る程がめつくないさ。」

じゃあなと言い義切は三人と別れ、男子校舎に向かった。

数日後、ある日の昼休み・・・

義切は昼食をとるべく食堂に来ていた、

「ラーメン、醤油で。」

「昼間に誰からだ？」

携帯を開き受信メールを見る。

「な・・・に・・・？」

携帯の画面を見たまま固まっている義切を余所に一騎が画面を覗き込む、

そのメールは刹那からのものであり

仕事を手伝って欲しい、手伝ってもらえるならば返信してくれと書いてあった、

どこもおかしい所は無い、しかし義切は固まったままだった、

「どづかしたのか？」

義切の様子が変わるので一騎が声を掛ける、

「あいつ・・・メール使えたのか・・・」

「おいおい・・・」

バカにし過ぎである、

「特に今日は仕事は入って無いみたいだし手伝ってやるとするか、大丈夫だぞつと。」

返信して暫くするとまたメールが来た、

感謝する、今日の午後10時に世界樹のある広場まできてほしい。とのことだった、

「了解つと。」

返信して手早く残っていた昼食を食べて二人は教室に戻って行った。

六時限目も終わり、放課後。

「義切、じゃーなー。」

一人の男子生徒が義切に挨拶した。

「おう、じゃあな、また明日。」

軽く挨拶を返し帰路に着く、

義切は寮ではなくエヴァンジェリンの様なログハウスに一人で住んでいる為他の生徒とは帰り道が異なる。

家に着き玄関の扉を開ける。

「ただいま、つっても誰も居ないけど。」

暇を潰し夕飯を作り、食べ終わった頃には8時半になっていた。

服を着替えてハーフコートの内側にあるホルスターに対魔用の術の施された銃弾の装填されたハンドガンをしまう。

義切の着ているハーフコートは特別製のもので見た目やさわり心地は普通のハーフコートと変わりないが対魔術の効果がある素材で作られており、魔法障壁の代わりになる、さらにコートの内側と外側に武器や道具をしまえるポケットやホルスターなどが多めに作られている機能性が高いコートであり、仕事の際の義切の正装である。

そして部屋の壁に立て掛けてある群青色の刀、義切の愛刀である隴火という名のこの刀は普通の刀より刀身が長く、刹那の使っているような所謂野太刀である、この刀も特別製で義切の為に作られた専用の刀である、刀身はトラコニウムという魔法世界で採れる希少

な鉱物を使用している、この鉱物は魔力や気の伝導率が高く、刀身に魔力や気を纏わせた斬撃、所謂魔法剣と呼ばれる技の際に無駄な魔力を使わず刀身に力を纏わせることができる、さらにトラコニウムは純度が高くトラコニウムで出来た武器は高い切れ味を誇る。隴火を手に取り、靴を履く、この靴も特注品であり、つま先と踵の部分に溝の入った鉄製のプレートが付いている、このプレートは重心を安定させると同時に蹴りの威力を上げる効果があり、さらにはプレートの溝によって剣等を引つ掛けて斬撃もある程度受け止めることができる戦闘用の靴である。

用意が終わったとき、時刻は九時を過ぎている、義切は家を出た。

そして世界樹広場に着く、すでに刹那と真名がそこにいた、

「よお、二人共。」

手を上げて義切が二人に挨拶する、

「来たか、任務の手伝い感謝するよ。」

「いやいや、それより、敵はどれぐらいいるんだ?」

「昨日確認しただけでも約三十体位。」

「結構な数だな。」

時刻は午後九時五十分、

「そろそろ時間だ、場所は何処だ?」

「……ここだ。」

義切が後ろを振り返る、そこには妖魔の大群がいた。

「昨日より数が多いな。」

刹那が夕凧を構える。

「おーおー、いるいる、・・・見えるだけで四、五十はいるなあ、でも数が多いだけで下級だけじゃねえか。」

「二人共、準備はできてるか？」

義切と刹那は答える。

「いつでも。」

「いける。」

「では、行くぞ！」

三人が跳ぶ、真名は空中で二丁拳銃を取り出すと同時に妖魔に撃つ、その弾丸により妖魔が二体消滅した。

刹那が夕凧を振るい妖魔を切る。

「おっと、早く参加しないと来た意味がないな！」

義切は朧火を抜刀し構えて魔力を込める、すると朧火が炎に包まれる、義切が最も得意な技の一つ『紅蓮剣』である、義切は幼少期に刹那と共に神鳴流を学びそれと様々な技術を融合させ我流として発展させた、この紅蓮剣は神鳴流の雷鳴剣を元にした技で雷を刀身に

纏わせる雷鳴剣に対し、紅蓮剣はその名の通り刀身に炎を纏う、

「燃えろっ！」

朧火を振り下ろすと衝撃と共に纏っていた炎が妖魔に襲い掛かり何体かが燃えて消える、更に義切は妖魔に素早く接近し、左手でパンチを繰り出し妖魔を吹き飛ばす、すかさずハンドガンを取り出して妖魔を撃ち抜く。

「流石だな、こちらも負けてられない！」

刹那と真名も負けじと妖魔を次々と消し去る、

義切が妖魔に囲まれるが、義切は余裕の笑みを浮かべていた、

「わざと囲まれてやったのに気づいてないのか？」

義切が朧火を振るう、すると熱風が巻き起こり周囲の妖魔を一斉に燃やした、義切の得意とする技の二つ目『紅葉』である、こちらは百裂桜花斬を元にした技で、周囲の敵を斬ると同時に熱風で焼くことにより威力を上げた技である。

「これで終わりか。」

最後の妖魔を消し去り、刹那が夕風を鞘に収める。

「ふう、んじやお疲れ〜。」

朧火を収め、帰ろうとする義切に真名が声を掛ける、

「漆川、ちょっと待て、まだ話がある。」

「なんだ？」

「明日も手伝ってもらえるか？私は別の仕事があって出れないんだ。」

「別に構わないぜ、時間と場所は今日と同じでいいのか？」

「ああ、すまないな。」

「刹那一人じゃ心配だからなあ。」

義切が溜め息混じりに言うと、刹那は少し顔を赤くした、

「なっ」

「どうした？顔が赤くなってるぞ。」

意地の悪い笑いを浮かべ義切はふざけて言う、
勿論刹那は怒り心頭である、

「義切！」

「悪い悪い、冗談だ、半分はな。」

「え……？」

刹那が確認する間も無く義切は二人に挨拶すると帰ってしまった。

次の日

義切は昨日と同じ場所に向かう、

そこには昨日と同じように刹那がいた、勿論真名は居ない、

「よう、今日も早いな、待ったか？」

「いや、別に。」

時刻は九時半、昨日は指定された時間の少し前に着いた、刹那と真名が二人で来ていると思ったからだ、しかし今日は真名は居ない、いくら剣の達人でも女の子を夜中に一人待たせるといふのは男としてまずいだろうと思ったので昨日より早く出て余裕を持って30分前に着くようにしたのだが、刹那は義切の予想を上回っていた、

(早く来たつもりなんだがな、次はもうちょい早く……)

とっていると、刹那が声を掛けてきた、

「義切。」

「ん、何だ。」

「昨日言っていたこと、あれは……どういう意味だ？」

「昨日言っていたって、なんのことだ？」

「昨日最後に言っていただろう、半分は冗談だって。」

刹那が少し顔を赤くし顔を背けながら聞くのを見て、義切は少し笑った、

「ああ、そのことか、あれはな・・・」

言いかけるが二人は気配を察知して刀に手をかける、

「敵さん、随分タイミング悪いねえ、いや良いのか？」

「今日は気配が違う、上級が来るか？」

二人は背中合わせになり死角を補い合い、どこから来ても迎撃できるように構える、しかし気配はするものの、妖魔が現れることはない、

「っ！困まれたか、面倒だな。」

気付いた頃には二人は妖魔の大群に囲まれていた、

「数も多いし、上級の妖魔までいやがる、チャンスとばかりにこつちを潰しに来たな。」

「どつする？」

「時間を掛ければ人数が少ないこつちが不利だ、一気に上級の奴らを片付けたい、いけるか？」

「もちろんだ。」

「なら、行くぞ！」

二人は抜刀し構える、狙うは上級の妖魔が集中している所、飛び込むタイミングが重要となる、義切が集中してタイミングを計る、二人と妖魔は膠着状態になる、

「……今だっ！」

義切の合図と共に二人が跳ぶ、

「俺が合わせる、桜花斬だ！」

「ああ、わかった！」

突然のことに妖魔の群が怯む、その隙を逃さず刹那が妖魔の群れの中に降り立ち、技を繰り出そうとする、

「百烈……」

義切も降り立ち刹那の動きに合わせて技を繰り出す、

「紅蓮……」

風が巻き起こり周囲にいる妖魔を巻き込む、

「「桜華斬！」」

桜が舞い敵を切り裂き、熱風が桜の花びらと共に敵を燃やし尽くす、

「よし、強いのは片付いた、後は手分けして叩くぞ！」

「わかった！」

二人は別の方向へ跳ぶ。

その状況を観察しているものがいた、

「ガキどもめ、邪魔しおつて。」

そのロープの男は一昨日、昨日、そして今日現れた妖魔を操っていた術者であった、その男は気配を消して気付かれない距離まで近寄った、

「赤い閃光がいるなど想定外だ、ふん、俺が捕まるのも時間の問題か、ならば、あの小娘だけでも。」

男は刀を抜き一気に飛び出し刹那目掛けて突進する、

「何!」

最初に気付いたのは義切であったが、刹那と距離を離しすぎ、男の攻撃を妨害するのに間に合わない、

(あれは、対魔用の刀か!? まずい!)

刹那は人間と烏属のハーフである、勿論その体には魔属としての血も流れている、対魔用の武器による攻撃も純魔属とまではいかないが、十分に致命傷になりうる可能性がある、下手をすれば死に繋がる。

次に気付いた刹那だが妖魔を相手にしていたので反応が遅れた、

(駄目だ、回避が間に合わない!)

刹那は目を瞑った、

「刹那っ！」

「道連れにしてくれる！」

義切は刹那に駆け寄ろうとするが、それより早く刀が振り下ろされる、

（何だ、痛みを感じない？）

「なっ！？」

目を開けた瞬間、刹那は驚愕した、目の前では義切が身を挺して自分を庇い斬られていたのだ、

「ぐあ……。」

「何だと！」

男も驚愕している、義切は倒れそうになるが片足を前に出し、踏みとどまる、

そして男の刀を掴むとへし折り、男に渾身のパンチを打ち込む、

「じぶつ。」

男は吹っ飛び気絶した、

「後は学園側がなんとかしてくれるだろう。」

「義切！大丈夫か！？」

刹那が義切に駆け寄る、義切は背中に大きな切り傷を負いそこから血が流れて地面に滴り落ちていた、

「はっ、問題ない、これくらいで・・・ぐっ。」

義切が倒れこむ、それを刹那が抱えた、

「なんであんな無茶を！」

「知れたことだ、あんなもん烏属の血を引いてるお前が食らえば、タダではすまんぞ。」

「それなら義切だつて！」

そう、実は義切も人間と烏属、両方の血を引くハーフなのである、だからこそ刹那の弱点や苦悩などを一番よく理解できる、

「体使つて、お前を守れたんだ、言うことねえさ、それにな俺は人間の血の方が濃いんだ、こんなものただの切り傷だ。」

「くっ、とにかく治療を！」

刹那は義切の腕を掴み肩組みした、

「歩けるか？」

「あ、ああ。」

「とりあえず義切の家へ行こう。」

刹那は義切を半ば引きずり義切の家へ向かった。

義切の家に着き刹那は義切を床に座らせ、背中の傷を診る、

「酷い傷だな。」

上半身の服を脱がす、切り傷から結構な勢いで出血している、
血を拭き取り止血剤を傷に塗る、

「痛つ……。」

「我慢してくれ。」

止血剤をしまい包帯を取り出し体に巻く、

「あた、あいたたた、もうちょっと丁寧にできないか？」

「う、うるさい、贅沢言つな。」

包帯を巻き終わり、義切をベッドへ寝かす、

「悪いな。」

「いや、謝るのは私の方だ、もうちょっと早く気付いていれば……」

「気にするな、俺が勝手にやったことだし俺もお前も生きてる、それでOKだろ？」

「そう言ってもらえると……助かる。」

刹那は俯き黙ってしまふ、暫く沈黙が続いたが義切がその沈黙を破る、

「なあ、刹那。」

「ん、何だ？」

「昔の頃さ、俺はお前とある約束したの覚えてるか？」

「約束？」

「そう、約束。」

義切がゆっくりと語り出す、

今より約十年前

義切、刹那共に五歳の時、二人は詠春に拾われ共に神鳴流の道場にて日々修行に明け暮れていた、そんな中、二人は将来の夢について語り合っていた、語り合っていたといってもまだ小学生にもならない子供である、そんな仰々しいものではなかったが幼心の内に確かな夢があったのである、

「あんな義君、うちの夢があるんや。」

「へえ、どんな？」

「うちが大きくなって、もっともっと強くなったらお嬢様を守るん

や。」

そう言っただけで笑った、それを聞くと子供の義切も夢を語る、

「それなら僕が大きくなったらせつちゃんを守る、それが僕の夢だ。」

「うん、約束やで。」

そう言っただけで二人は笑い合った。

「まあ、十年も前に五歳の子供がしたどこにでもあるようなありふれた約束、だけど俺は鮮明に覚えてる。」

語り終えたとき、義切は目を閉じていた。

(そうか、護衛の補佐の本当の意味、お嬢様を守る私を守ること、私が必ずお嬢様を守ると信じて、そして十年前からその約束を守ってくれている……)

義切の言葉の真意を知り、刹那は微笑む、その頬には涙は伝っていった、

「……ありがとう、義切。」

しかし返事は返ってこない、

「寝てしまったか。」

次の日

部屋に朝日が差し込んでくる、

「うーん、朝か。」

義切は起き上がった、

「いたた、時間は・・・」

時計の針が八時半を指していた、

「やばっ、学校が・・・」

言いかけたがカレンダーを見て安心する、今日は土曜日だったのだ、ふと傍らを見る、そこでは寢息を立てて刹那が寝ていた、

「一晩ずっとここにいたのか。」

そんな刹那を見て義切は微笑む、

「ありがとな・・・」

「ふふ、どういたしまして。」

「うわぁ、起きてたのか!？」

刹那が笑いながら顔を上げる、

「い、いつから起きてた?」

義切が顔を真っ赤にして聞く、

「学校があると思って焦ったところから。」

「ほぼ、全部じゃねえか。」

「さすがに朝になったらお腹空いただろう、何か作ってくる。」

椅子から立とうとしたとき、床に置いてあった救急箱に足が引っかかり倒れかけたのを義切が受け止めるが体勢を崩した、

「っ!」

そのせいで二人の顔が近くなる、

「傷・・・大丈夫・・・か？」

刹那は顔を赤くして言った、

「ああ・・・だいぶ良く・・・なった。」

義切の顔も真っ赤になっている、

二人の心臓の鼓動が高鳴る、次の瞬間、
ガチャ、

「義君、だいじょーぶなん？ふえ？」

部屋のドアが開き最悪のタイミングに木乃香が入ってくる、

「え!？」

「げっ！」

驚愕する義切と刹那、木乃香は二人の状況を見て顔を真っ赤にした、

「う、ごめんな、う、うちはなんも見とらんよ、ごゆっくり！」

谷 ばりの勢いで木乃香は慌てて部屋を出て行った、

「え！？ちよ！お嬢様！」

「あ！おい！」

刹那が追いかける、それを義切が追う、

「明日菜、ネギ君、帰ろ、うちら邪魔みたいやし。」

木乃香はリビングにいた明日菜とネギに言って帰りを促す、すると後ろから刹那が出てきた、

「あれ、刹那さんなんでここにいるの？」

明日菜が理由を聞こうとするのを慌てて木乃香が制する、

「邪魔したらあかん明日菜！」

「ああ、そうゆうこと・・・」

瞬時に状況を理解（誤解）した明日菜は顔を赤くする、

「じ」、誤解です！」

刹那が弁解しようとするが、勘違いした二人は止まらない、一人状況が飲み込めないネギが不思議そうな顔をしてる、

「木乃香さん、どういことですか？」

「ネギ、邪魔しちゃ駄目よ、帰ろう。」

明日菜が帰ろうとすると、部屋から義切が出てきた、

「まってくれ、本当に誤解なんだ！」

「ほな、うち等帰るから、じゅっくり。」

「待ってください、木乃香様ー！」

「誤解です！お嬢様！」

「明日菜さん、どういことなんですか？」

「あなたにはまだ早いわよ！」

「「ちがぁーっ！」」

義切と刹那の声が虚しく木霊する……。

オリキャラプロフィール01（前書き）

希望者がいらっしやっただのでオリキャラのプロフを作ってみました、読まなくても本編に支障は出ないのでスルーして下さいませも構いません。

読んで下さった方は指摘や感想などがあれば感想として投稿して下さいありがとうございます。

オリキャラプロフィール01

漆川 義切 (15)

麻帆良学園男子中等部

3年C組 出席番号3番

好きなもの オレンジジュース、ラーメン、何も変哲の無い日常。

嫌いなもの 悪人、聞き分けのない人、偉そうにしてる人。

頭脳明晰、スポーツ万能、顔立ちも良く、そして人当たりも良い為老若男女問わず好かれる優等生、人の頼みは断りきれず、困っているひとはどんなに急いでいても見捨てない性格。

愛称は義切、義^{よし}、義君。

その正体は民間組織である遊撃士協会の一員であるB級遊撃士、10歳の頃に詠春の伝手にて入会、類い希なる才能と努力によりB級遊撃士にまで駆け上がった、最年少のB級遊撃士ということもあり魔法世界では軽いアイドル的扱いまで受けている、彼の遊撃士としての腕は確かな物で称号である『不死鳥^{フェニックス}』や異名の『赤い閃光』と聞けば裏の世界で悪事を働くものが聞けば怖れる程である、

物事の本質を見抜く才能があり、未経験の事でも説明を見聞きしたり人がやっているところを見れば一通りはできるようになる、

刹那と同じく人間と鳥属のハーフであるが、人間の血が濃かった為かハーフ特有の白髪ではなく翼も生えなかった、その為幼少期は差

別されることなく人間として育った。

しかし義切が5歳の頃その家族を悲劇が襲い、家族と離れ離れになりそれから義切は他人を強く拒絶するようになる、その後詠春に拾われ神鳴流を習い始める、そして詠春をはじめ、木乃香や刹那達と触れ合うことにより閉ざした心を開いていった、だから義切は彼女達を家族の様な存在として大切にしている。

ちなみにある人物と仮契約している。

風原 一騎 (15)

麻帆良学園男子中等部

3年C組 出席番号7番

好きなもの 剣道、道場、和食。

嫌いなもの 炭酸飲料、悪、甘さが強いもの。

義切のクラスメイトにて親友、剣道部に所属しているので刹那とも顔見知りである、義切と同じく容姿端麗で成績優秀、特に文系の教科においては義切を上回る、武士然とした物腰から寡黙な印象を持たれやすいが、実際はそうではなく義切のボケ等にツツコミをいれたりしている、愛称はカズ、一騎。

一騎も義切と同じく遊撃士にて『ワイバーン翼龍』の称号を持ち、『超闘士』の異名を取る、クラスは義切より一つ下のC+だがB級遊撃士にも劣らない強さを見せる。

麻帆良学園で寮生活をしていて、実家は京都にて計都流という流派の剣術道場を営んでいる。

この計都流は江戸時代初期に薩摩藩にて発祥した示現流が京都に伝わってくるると同時に様々な技術と融合し昇華したものである、祖となつた示現流が『式の太刀要らずの示現流』と言われていたように計都流も一太刀の威力を重視し、一撃必殺を目標とする流派の為、一騎も重い一撃を得意とする。

また、計都流には師範のみ持つことを許される秘剣が三本あり、次期師範になる者として一騎は一本だけ持つことを許されている、それが一騎の使う『参式秘剣 斬艦刀』である、この斬艦刀、魔法世界の技術にて作られた刀であり見た目は普通の刀と大差ないが、柄にある引き金を引き柄を捻ると柄が伸び、鍔が展開し刀身や柄の内側に注入されてある液体金属が刃の部分を覆うように両刃の大剣のような巨大な刃を形成し、魔力によって形を固定させる、そのとき刀身はゆうに2mを越える長さになり、斬艦刀の名が示す通り、戦艦さえ一刀両断することが可能となる。

オリキャラプロフィール01（後書き）

どうでしたか？

オリキャラは結構ゲームのキャラをモチーフにしてるところがあります（義切は完全に0から作り上げましたが）。
また、題名に01とある通りまたオリキャラが増えれば新しいプロ
フも書くつもりです。

第4話 〈影を映す鏡〉（前書き）

今回からOGキャラが出ますが、本格的な戦闘は次回からとなります。

それではどうぞ。

第4話 〈影を映す鏡〉

快晴の青空と爽やかな風、温かい陽気の五月のある日

学園の外れに建っているログハウス、そんな一人暮らしをするには大きい家で義切は一人で住んでいる。

義切は毎朝五時に起き、顔を洗って台所へ向い朝食と今日の昼食の弁当を作る。

一人暮らしの為食事は基本毎食自炊だ、朝食を食べ終わった後身支度を整えて家を出て学校へと向かう。

このとき時刻は六時半。

家から男子中等部まで歩いて約二十分程度掛かる、早朝のこの時間だと学校へ向かう途中で教員とよく会い、

「おはようございます。」

「おはよう漆川、今朝も早いな。」

などと挨拶を交わしながら学校へ向かう。

昇降口で靴を履き替えて教室へ入り自分の席に着くとき時刻は七時前後。

教室の中には誰もいない、この時間に登校している生徒のほとんどは部活動の朝練習が学校の図書館で勉強しているが大半は前者である。

義切はかばんから本を取り出し読み始める。

あっという間に時間は過ぎ、教室内に居る生徒も多くなってくる、教室が騒がしくなってきたので義切は本を読むのを止めた。

「おう、義切。」

「おっす、おはよう。」

入って来た生徒としばらく会話を交わしていると担任の先生が教室へ入って来る、

それを見た日直の生徒は号令を掛けて朝のホームルームが始まった、
「もうすぐ中間試験だが中間の後には学園祭があるのでうちのクラスの出し物ができるだけ早く決めておくこと、えーとあとは連絡事項は特にはないな、以上。」

出席を取り、連絡事項を言って朝のホームルームは終わった。

義切は一時限目の用意をして席に着いて友人と会話をしていた。

時は流れて六時限目も終わり帰りのホームルーム後……

クラスの委員長が黒板の前に立つ、

「それじゃあ、今年の麻帆良祭の出し物を決めたいと思う、もちろん部活等々の出し物がある場合はそちらを優先して構わないが、何か案はないか？」

途端に教室の中が騒がしく、パーラーと言う声から展示、お化け屋敷など、生徒の希望する案が入り混じる、

「えーと、とりあえず落ち着いてくれ、いま黒板に書くから。」

そして黒板に挙げられた案を書き多数決を行う、結果……

「じゃあ出し物はパーラーで決まりだな、明日はパーラーの名前を

決めるからなにかいい名前考えといてくれ。」

と言って委員長はそそくさと帰ってしまった。

「俺も帰るかな。」

と言って廊下に出ると後ろから声が聞こえてくる、

「よーしーぎーりー」

後ろを振り向くと友人の一人である男子生徒が泣きながら近づいてきた、

「課題手伝ってくれえ、終わらないんだあ。」

「手伝うのはいいが、見返りは？」

「ジュース一本。」

「二本だな。」

「仕方あるまい。」

「お前何様のつもりだ。」

義切は呆れながら手伝うことにした。

「どこやってける。」

「因数分解くらい自分でやれ!」

終わった頃には午後六時を過ぎていた、

「まったく、お前のせいでもうこんな時間じゃねえか。」

「悪い悪い、でも助かったよ、じゃあな。」

「ジュース二本、忘れんなよ？」

帰る方向が違うのでその友人とは昇降口で別れる、

「げっ、雨降ってんじゃん！」

「本当だ、俺は置き傘があつてよかったぜ。」

友人は鞆を傘代わりに頭に乗せ走って帰っていった。

義切は置き傘を手にとって差して帰路についた。

帰り道を歩いていると雨の中、木の下に人影が見えたが様子がおかしい、帰宅途中で傘を持っていないときに雨に降られて木の下に避難するのはおかしい事ではないが、その場合は木に背中を向けて空模様を覗いたりするのが普通だ、しかしそこにいる人は木の方を向き俯いていた。

誰だか気になったが雨が降っているせいでよく見えない、背丈と着ている制服から察するに女子のようだ、しかしここは女子寮から結構距離がある、女子が一人で居るなどますますおかしい、近づいてみるとその背中と髪型には見覚えがあつた、

「刹那……か？この雨の中、傘も持たず一人でこんな所で何してんだ？」

ゆっくり刹那が振り向く、

「義……切？」

「っ！お前……！」

刹那の目には涙が溜まっていた、そして義切を見た瞬間、涙腺が緩んだのか溜まっていた涙が零れる、

「うわああああ！」

「えっ、ど、どうした!？」

刹那は義切の胸に泣きついて来た、

「何があつたんだ？」

義切が聞いても刹那は答えず泣きじゃくっている、

こつゆうつ時女の子は凄く小さく感じる、刹那はあまり背が高くないので尚更だ、

「はあ、仕方ねえなあ。」

義切は困った顔をしながら濡れないように傘を刹那の方に傾けながらしばらくそのままだった。

（何があつたのかは分からんが何のことについてかは大体の予想は

つくな。」

「あー、とりあえずここじゃ濡れるし俺の家来るか？」

刹那は無言で頷いた、義切の家への道中刹那はずっと義切の腕を握っていた。

(こんなところを誰かに見られよう物なら終わりだな。)

ログハウスに着き中に入る、

「びしょびしょだな、シャワー入るか？」

「・・・ああ・・・。」

(大分落ち着いたな、さて・・・。)

刹那がシャワーに入っている間に義切は着替えてソファアームに座っていた、しばらくしてシャワーから刹那が出てきて義切の正面のソファアームに座った、

少し間が流れたが、義切が沈黙を破った、

「んで、一体何があったんだ？」

「……………」

「話したくないならいい、無理に聴こうとは思わないから。」

「……………実は……………」

ゆっくりと刹那が訳を話し始める、

それは今日の昼休みの事だった・・・

3-Aのクラスで占いの話が持ち上がった、

そこで占い研究部の木乃香がクラスの皆を占う事となった、

そして刹那が占ってもらうが出てきた結果は近いうちに刹那の大切なものに不幸が訪れるというものであった、

その結果に過敏に反応してしまった刹那はそれから半ば木乃香を付き纏うような形で木乃香の近くにいた、

そのあまりのしつこさに流石の木乃香も激怒してしまった。

「それで、木乃香様に拒絶されたと思ったのと自分の間違いに気がつきシヨックで寮を飛び出してあんな所で泣いてた訳か。」

刹那が頷く、

（あー、頭いてえ、よく占い一つでそこまで過敏に反応できるよなあ。）

片手で頭を抑える義切、

「まあ、そんなことだろうと思ってたけどな、それは早めに謝った方がいいだろ、そのときはフォローしてやる。」

義切は立ち上がって台所に向った、

「とりあえず腹減っただろ、今作るから待ってる。」

刹那は何も言わずに俯いている、

「ここに居るのは構わないが、同じ部屋の真名ぐらいには連絡しておいた方がいいぞ。」

「……ああ……わかった……。」

夕飯を食べ終わった後も刹那はしばらくリビングにいた、義切は変に声をかけることはしなかった。

次の日……

義切はいつも通り五時に起き、朝食を食べ、準備をして玄関に向かう、そこには義切の靴ともう一つ小さな靴があった。

その靴が目に入り、ふと刹那の事が心配になるが、すぐにその考えを頭の外へやる。

(あいつ自身の問題だ、あんまり俺が干渉しちゃいけないな。)

義切はいつもの通り学校に行きあつという間に六時限目が終わって帰りのホームルームになった。

今日はパーラーの名前を決める話し合いをしているが、義切は窓から空を見つめている、

「おーい、義？？」

「えっ？」

携帯を開いて相手を確認する、電話の相手はネギだった、

「はい、もしもし?」

「もしもし、義切さんですか?」

「どうしましたネギ先生?」

電話に出たまま玄関を開けて中に入る、

「今日刹那さんが休みだったのですが何か知りませんか?」

すると中から刹那が出てきた、義切は目を丸くして驚く。

「あー、目の前にいます。」

「えっ?」

義切と刹那はリビングのソファに向かい合って座っていた、

「別に、学校行かなかったからどうしたと言っつもりはないが、今日一日考えて答えは決まったか?」

「いや・・・まだ・・・。」

「そうか、じゃあゆっくり悩んだらいいさ、別にいつまでも居ても構わないからな。」

「いや、迷惑になるから・・・。」

「迷惑じゃないさ、いつも一人だからな、逆に人がいたほうがいい
と思ってるくらいさ。」

「すまない、ありがとう。」

「さて……。」

と言うと義切は立ち上がり台所へ向かう、

「朝食は作つといたけど、それから何も食べてないよつだから腹減
つただろ、今何か作るから待っていてくれ。」

そう言つて義切は台所へいく、

「あつ……。」

刹那が止めようとするがその前に義切は台所へ行つてしまつ、そし
て……

「なんじゃこりゃあ!?!」

そこにあつたのは生ゴミの山だった、

「いや、さっきお腹が空いたから何か作ろうとしたんだが失敗して
しまつて、その……。」

義切は頭を抑えた、刹那は顔を赤くして俯いている、

「すまない……。」

義切は電話はを切ると刹那が寄ってくる、

「今の話……」

「ああ、置手紙があったらしい、ちょっと待っていてくれ、すぐに着替えてくる！」

義切が戦闘の際の正装に着替えて朧火を持つと二人は走って寮の明日菜、木乃香、ネギの部屋に急いだ。

ネギと明日菜が机の上に置いてあった置手紙を見ていると部屋のドアが開いて義切と刹那が入って来た、

「義切さん！それに刹那さんも！」

「遅くなってすみません、例の置手紙は？」

「これです。」

ネギが置手紙を渡すそこには……

近衛木乃香嬢は預かった、

返して欲しくば漆川義切が西の並木の道に来るべし、

と書かれてあった、

「たまには外で夕食を食べようって部屋を出て、忘れ物したっていつて木乃香が部屋に戻ったんだけど、なかなか出てこないから部屋に入ったら木乃香がいなくなっていて、この手紙が……。」

明日菜が今までの状況を一通り説明する、すると義切は部屋を出て

行くところ、

「行くんですか!？」

「ええ、手掛かりがこれしかない、行くしかないでしょう。」

するとネギと明日菜が立ち上がる、

「僕も行きます!」

「私も行くわ!」

「わ、私も!」

ネギ、明日菜、刹那は一齐に答えた、しかし義切は首を振る、

「相手は俺を指名している、それに何があるか分からない。」

義切は手紙を手に取り話を続ける、

「普通の誘拐だっていうのならば、場所を指定したりしないし、お金などの要求を一緒に書くものだ、しかしこの手紙にはそれが無い、つまりただの誘拐ではない、恐らくは魔術師が絡んでいるんだぞ。」

ついて来ないように促すが三人は梃子でも動かないような顔をしていた、

「……やれやれ、仕方ないな。」

並木道には結局四人で行くこととなった。
道は義切一人で走り、ネギ達は物陰に隠れながら進む、
そして、並木道に着くと一人の赤髪の男がいた、

「貴様が木乃香様をさらった奴か、」

「正確には俺じゃない、もう一人の方だ、これがな。」

義切は冷静に男を睨み身構えた、

「・・・おまけが付いて来たようだな。」

男はネギ達が隠れている方向を見た、

ネギ達は驚いたが、ばれていることが分かると三人は構えながら出てきた、

男は軽く笑った、すると後ろからローブを纏った男が出てきた、

「あれの調整は終わったのか？」

「殆ど終わったところだ、それに奴等を一目見ておこうと思ってな。」

ローブの男は義切達を見た、

「ほう、いいサンプルになりそうだ、では飛ばすとするか、足止めは頼んだぞアクセル。」

アクセルと呼ばれた男は笑って任せると答えた、

ローブの男が手を義切達の方に向ける、すると手から光が発し周囲を包み込んでいった。

第5話 〈時の放浪者〉（前書き）

どもです、風邪をこじらせて書き上がるのが遅くなってしまいました。

さて今回はOGキャラとバトルです、OGキャラはちよくちよく出していこうと思うので、出して欲しいキャラがいたら言ってお下さい、極力出すように努力します。

第5話 時の放浪者

ロープの男が放った光に義切達は目を瞑った。次に目を開けるといつの間にか見知らぬ扉が2つある大きなホールのような場所にいた。

「これは・・・強制転移か!？」

義切は周りを見渡した、すると一つの扉が開き、中から人型の機械が数体出てきた、

「オーバーマペット機械人形だと!？」

「オーバーマペットってあれのことですか？」

「はい、戦闘用の機兵のことです、気を付けて下さい、戦闘能力は結構高いですから。」

四人は背を向け合いながらそれぞれ武器を構える。

「ここは私とネギに任せて、二人は行って!」

明日菜が言った

「え?だ、だが・・・。」

「こんな奴等二人もいれば十分よ、それにあの赤いワカメみたいなも倒さなきゃいけないんでしょ?」

「ワカメって……、本当に任せて大丈夫か？」

「はい、ですから二人は早く木乃香さんを！」

それを聞いた義切と刹那は頷きもう一つの扉に向かい走った、それを機械人形は阻もうとするが、

「邪魔だ！」

義切が機械人形を一刀両断して、扉に向かい走る、

「機械人形は魔力で機械を動かしているからハマノツルギなら楽に倒せるぞ！」

助言を残して義切が扉を開けて二人は通路を走る、

「義切、何故こっちなんだ？扉なら機械人形オーバーマベットの出てきたほうもあつたのに。」

「それはな……」

通路を抜けるとそこは先程のホールと同じ位の開けた場所に出た、

「奴が気配を隠そうとしていないからだ。」

義切の視線の先には先程アクセルと呼ばれた男がいた。

「ふっ、やはりこちらに来たか。」

刹那と義切はアクセルを睨み武器を構えようとするがアクセルが口

を開く、

「いい事を教えてやろう、お前らのお姫様はそっちの扉の奥の部屋にいる、早く助けに行つてやった方がいいんじゃないのか？」

アクセルは一つの扉を指差した、

「・・・刹那、お前が行け。」

「しかし・・・。」

義切はアクセルを睨んだまま言うが、刹那は動かない、下手に背中を見せれば、やられかねない。

「俺が奴を抑える、早くいけ！」

義切が強く促すと刹那は頷き扉へと走りホールを出た、その途中アクセルは義切を見たまま動かなかった。

「アクセル・アルマーって言ったな、何もしないで通してやるとは、どうゆうことだ？」

「俺の標的はお前一人だ、他の者については指示を受けてはいない、これがな。」

「そいつはまた随分な理由だな、もう一人の奴への言い訳か？」

「いや、奴は俺がこうするだろうと知っている、それに奴も戦闘データを取りたいと言っていたから気を使つたつもりだ、こいつがな。」

「

二人はお互いに構えて気を高める、

（奴は徒手か、しかし俺を知っていて呼び出したということは何かあるな。）

「フツ、お前の膨大な気が伝わってくるぞ、噂以上にできそうじゃないか！」

するとアクセルは両腕を前に突き出して叫ぶ、

「来い、ソウルゲイン！」

するとアクセルの両腕が青い機械の装甲の様な物で覆われていく、

「それは……パーソナルアーマー魔装機だと！？さっきの機械人形といい、とんでもない連中だな。」

「行くぞ、フェニックス不死鳥！」

アクセルが踏み込み、右アッパーを打ちソウルゲインの肘部分に付いた刃で攻撃する、

「っ、早い！」

体をずらして避ける、するとアクセルは左拳を上から落とすもう一度刃で切り掛かる、
後ろに跳びその一撃も避ける、

アクセルの攻撃は空振りしたが石で出来ているホールの床には刃の

跡がくつきり残っていた。

義切も隴火を抜き戦闘体勢に入る。

隴火で切りかかるが肘の刃で受けられる、次に回し蹴りを打つが足で止められる、

「チツ、そつちもかなりできるじゃないか、ならば！」

義切は懐より銃を取り出しアクセルへ向け、数発撃つが全てソウルゲインにより弾かれた、

「そんなもの！」

そしてアクセルは一気に踏み込み銃を刃で真つ二つにする、

「クソツ！」

「フン、まだまだあ！」

アクセルが踏み込んでくる、

(正面からまともによっても受けられるだけか・・・)

アクセルの二連撃を避け、がら空きの脇腹を狙う、「もらったあ！」

隴火を振り下ろす、しかしその瞬間、

「甘い！」

アクセルの膝蹴りが義切の腹に直撃し体が宙に浮く、それをアクセルは思い切り殴り飛ばし激しく壁に叩き付けた、

「がつ！」

義切は床に崩れ落ちた。

義切がアクセルと闘っている時、刹那は木乃香がいると言われた部屋に通じる廊下を走っていた、そして廊下が終わりを迎えた、出た先は先程のホールより一回り小さい部屋に出た、その部屋の奥には・
・

「お嬢様！」

木乃香が台の上に寝かされていてその台の前にはロープの男が立っていた。

「やはり一人来たか、アクセルの奴め、気が利くのか利かんのか分からんな。」

「貴様、お嬢様に何をした！」

イングラムは刹那を睨むと少し笑い答えた、

「なに、別に眠らせてあるだけで何もしてはいない、すこし彼女の魔力を分けて貰っただけだ、」

「なに？」

「この空間を作っている魔力も機械人形を動かしている魔力も全て

彼女のものだ、しかしこれほどの魔力を使ってもなお彼女は内に秘めた魔力を半分も使っていない、まったく大した魔力量だ。」

「くっ、貴様、お嬢様を返してもらおう！」

「いいだろう、もともと貴様等を誘き出すついでだったのだからな、しかし……」

ローブの男が光に包まれた、

「その前にこれの戦闘データを取らせてもらおう！」

ローブの男もアクセルの様に装甲に包まれていた、

「なっ、何!?!」

刹那は初めて見る魔装機に驚いた、

「イングラム・ブリスケン、ビルドシュバイン、いくぞ、準備はいいか？」

イングラムがそう言うのと左腕に付いている円形状の装備が魔力を収束して、魔力の刃を作る。

刹那は夕風を抜刀し構える、イングラムは空中に跳び左腕を振り落とす、刹那は危険を察知し回避する、すると刹那がいた所の床が粉々になっていた、

「くっ、なんて威力だ。」

イングラムは避けられたのが分かると蹴りを打ってくる、刹那はそ

れを受けそのまま夕風を振り下ろす、しかし、

「何っ、刃が通らない!？」

「伊達で付けている魔装機ではない!」

もう一発飛んでくる蹴りをガードするが、後退してしまう。

「っ、強い。」

その一方・・・

崩れ落ちた義切を見てアクセルが言った、

「フン、その程度か？ 過大評価したか。」

「クソ、少し油断したぜ、こんなにできると思ってなかった。」

義切が立ち上がるのをアクセルは睨んでいる、

「ただの強がりか？」

「そう聞こえるかもな、だが、これで俺も本気を出さないといけないことが分かった。」

義切は臙火を鞘に納め後ろに投げ、構えた、

「お前みたいな早くて懐に入りこむ奴に野太刀では戦にくい、俺

も徒手でいかせてもらおう。」

「ククク、いいだろう、面白くなりそうだ！」

アクセルは手に気を溜めて両手で球を包むような形を作り右腰に持つてきて、左肩を前にだす、所謂かめはめ波の溜めのポーズである、

「受ける！青龍鱗！」

かめはめ波の要領で開きながら突き出されたアクセルの手のひらから発射された気の塊は義切へ飛んでゆく、

「なんだとっ！」

間一髪で避けた義切、よけられた青龍鱗はホールの壁の一部を吹き飛ばす、アクセルは余裕の笑みを浮かべていた、

「あれを避けるとは、見事だ。」

「くっ！」

義切は腕に気を溜めてアクセルに突っ込む、アクセルも腕に気を溜める、そしてお互いラッシュが始まる。お互いに相手の拳を拳で相殺し、二人の技がぶつかり合う、

「双気掌！」

「白虎咬！」

拳の先より放出された気がぶつかり合い衝撃が走る、二人は後方に

跳び間合いを取り合う、今度はお互いに右手に気を溜め、パンチの様の前に突き出す、

「飛燕掌！」

「玄武剛弾！」

すると収束された気が弾丸の如き勢いで飛び相手の気とぶつかる。義切はアクセルの目の前から消え一瞬で懷まで踏み込んでいた、

「何っ！」

「さっきの返しだ、食らえ！」

アクセルの腹に紅蓮拳を打ち込む、アクセルは勢いよく後ろに吹き飛び炎に包まれるがそれを振り払う、すると目の前に義切はいなかった、

「っ、上かつ！？」

気配を感じ、視界を上に移す、すると今正に義切が蹴りを放つ瞬間だった、

「食らえっ、雷迅脚！」

義切の脚に魔力が回り雷を纏う、アクセルは即座に腕を組み防御の体勢を取る、

「クッ！」

ギリギリ防御が間に合い蹴りは防げたが、魔力により多少のダメージは入る、しかしアクセルは嬉々としている、

「ククク、こうこなくてはな、少し出力を上げさせてもらおう！」

アクセルは気を溜めてソウルゲインの出力を上げようとする、ソウルゲインは装着者の気を動力源とし、気を高めると腕部にある半球状のクリスタルが輝く、しかしソウルゲインのクリスタルは輝く様子はない、そして・・・

「ぬっ、何だ!？」

ソウルゲインの出力は上がるどころか逆に落ちていき、付いている球の光が消え火花が散り始めた、

「ショートした!?!こんな時にだと!」

義切は何が起こったのか分からなかったが、アクセルは酷く焦っていた、しかししばらくすると名残惜しそうな顔で義切の方を向いた、

「まあいい、戦闘データは取れた、惜しいが引くとしよう、」

アクセルは懐から転移魔法符を出した、

「おい!貴様逃げる気か!?!」

「その言葉を聞いて黙ってはいられんがこちらの目的は達した、ソウルゲインもこの調子だ、焦る必要はない、貴様との決着は必ず着ける、これがな。」

義切は止めようとするが間に合わずアクセルは光に包まれた、

「また会おう、不死鳥！」
フェニックス

そしてアクセルは光と共に消えていった。

(アクセル・アルマー・・・、魔装機を使いさらに拳法もあれほどとは・・・。)

「俺ももつと強くなんねえとな。」

義切は隼火を回収し、刹那が入っていった扉に向かう、

「無事でいろよ！」

義切は急いでホールの扉を開け走った、

その頃・・・

「どうした、先程から防戦一方だが？」

「くっ。」

サークルザンバーの威力により迂闊に近寄れず、魔装機の装甲により生半可な攻撃が効かないので刹那は先程から防戦するしかなかった、

(くっ、どうする、どうすればいい？速さで勝っていてもあの鎧を

通せないなら意味はない。」

刹那はイングラムの攻撃を避けながら必死に打開策を考えるが、浮かんでこない、仕方ないといった様子で覚悟を決める刹那、

（ならば・・・！）

刹那は一度大きく距離を取り夕凧を構えた、

「ほう、単純に威力で勝負か、いいだろうその姿勢に敬意を評しこちらも出力全開でいかせてもらう、サークルザンバー、出力全開！」

イングラムはサークルザンバーの出力を全開にすると構えた、刹那も構え深呼吸し心を落ち着かせる、

（落ち着け、勝負は一瞬、この一撃にすべての力を注ぐ！）

刀身にありつたけの気を込める、

「いくぞ！」

二人は同時に踏み込む、

「フフフ・・・、デッド・エンドだ！」

「はあああああつ、雷鳴剣！」

出力全開のサークルザンバーと渾身の力を込めた雷鳴剣がぶつかり合う、

そして、一閃、軌跡が走った。

刹那は肩に切り傷が走り血が垂る、しかし平然とした顔でいる、一方のイングラムも平然とした顔である、しかし・・・次の瞬間サークルザンバーと肩の装甲の一部にヒビが入り音を立てて割れる、そしてイングラムは笑いはじめた、

「ククク・・・ハハハハ！よもやこれほどとはな、このビルトシュバインの装甲を割るとは、素晴らしい、良い戦闘データがとれる！」
その部屋に義切が入ってくる、

「刹那、無事か！？」

「ああ、なんとか。」

イングラムと義切は睨み合っ、

「ここに来たということはアクセルは引いたか、ならば私も引かせてもらおう。」

イングラムの足元から光が発生する、

「貴様も逃げるか！」

「フツ、もともと貴様等を殺しに来たのではない、戦闘データを取りに来ただけだ、フェニックス、貴様との戦闘データが取れなかったのが残念だが、それでも良質なものが取ることが出来た。」

イングラムが光に包まれる、

「私がいなくなればこの空間は消えて先程の並木道に戻るだろう、

機械人形も機能を停止し、この空間と共に消える。」

「待て！貴様等は何なんだ！？」

「影を映す鏡、シャドウミラーと言っておこう、ではさらばだ！」

イングラムが消える、するとイングラムが言ったようにホールも消えて並木道に戻っていた、明日菜とネギも近くにいた、

「あれ？戻った？」

「お嬢様！」

刹那は一目散に木乃香に駆け寄る、木乃香はそつと目を開けた、

「せつちゃん、助けに来てくれたん？」

すると刹那は泣いて謝り始めた、

「ああ、無事でよかった、すみませんお嬢様、私が不甲斐無いばかりにお嬢様にこの様な危険にさらしてしまいました。」

「ええよ、こうして助けに来てくれたんやし、ありがとくな。」

「お嬢様……。」

それを見た義切は安心し、肩の力を抜いた、

「一件落着だな。」

木乃香は義切にも礼を言う、

「義君も助けてくれてありがとう。」

「いえ、当然のことをしたままでですから。」

「そうよ、友達を助けるのは当然よ。」

「はい。」

「明日菜とネギ君もホンマにありがとう。」

それを見て義切は帰路に着こうとする、

「じゃあ帰るとするか。」

四人に背を向け歩き出す義切にネギが改めて礼を言う、

「義切さん、有り難うございました。」

義切は歩きながら手を軽く振り一言、

「言ったでしょう？俺は当然のことをしたままでっつね。」

（シャドウミラーか、調べてみる必要があるな……。）

その頃某所……

そこにはアクセルとイングラム、そして赤髪の女性と緑の髪をした男がいた、

「ヴィンデル、今戻った。」

アクセルが帰還の報告をする、するとヴィンデルと呼ばれた緑髪の男はそれに応えた、

「うむ、ご苦労だったアクセル、首尾はどうだ？」

「上々だ、俺もイングラムもいいデータを取れた。」

「ふむ、それは何よりだ、不死鳥・・・奴はどうだ？」

「予想以上だな最大の障害になるかもしれん。」

「障害になるかどうかは奴次第だな。」

するとアクセルは不服そうな顔をした、

「不満か？」

ヴィンデルはアクセルの顔を見て言う、

「不死鳥とは俺の手で決着を着けたい、奴と同じくな・・・。」

「奴か。」

「奴のお陰で計画がここまで遅れた、それに個人的に借りも返さなくてならん。」

「あまり拘りすぎるな、身を滅ぼすぞ。」

「フツ、覚えておこつ。」

アクセルがそう言つたとその場は解散となった。廊下にてアクセルは赤髪の女性と話していた、

「レモン、ソウルゲインが途中ショートしたんだが、どうゆつことだ？」

「あなた、途中で出力を上げたでしょう？」

「ああ、それがどうかしたか？」

「今のソウルゲインの完成度はだいたい20%ぐらいなの、それで下手に出力を上げると未完成の回路が耐え切れなくなってショートしちゃったのよ。」

「何故それを言わなかった？」

それを聞いたレモンは呆れ声で言った

「言ったわよ、そしたらあなた気を付けるって言っていたじゃない。」

「……………」

アクセルは黙ってしまった、

「まあいい、次の計画までに完成度を上げといてくれ。」

「そうね、次の計画までだと大体50%前後つてところかしら？」

「構わん、奴らと闘うわけではない。」

アクセルは任せたとすると、研究室を出る。

謎の組織・・・シャドーミラー、彼らの計画が水面下にて進んでいくのであった。

第6話 く猫とロボットと神様とく（前書き）

遅くなってしまいました。第6話が書き上がりました。今回はバト
ルはなく会話文多めになっております。

第6話　く猫とロボットと神様とく

シャドウミラーの襲撃から数日たった。

普段と変わらない学校からの帰り道、義切は悩んでいた。

（あの時、互角に戦っていたが、そのまま続けていたら勝てる自信はなかった、魔装機が本調子じゃなかったため助かったが、次戦う時は確実に強くなっている筈だ、修行したいが、一人では限界がある、カズも部活があるから毎日付き合ってもらわねにもいかない。）

そう、アクセルと戦闘した後危機感を感じていた、決して劣っていない訳ではない、しかしそれは魔装機が完璧ではなく相手が本気を出せなかったからであり、もし本気を出されていたら殺されていたもおかしくなかった、アクセルはそれ程の使い手だったのだ。アクセルに対する対策を考えているうちに家に着く、鍵を開けようとして異変に気付く、

（鍵が・・・開いてる？）

確かに出るとき鍵は閉めたはずだ、しかし今家の鍵は開いている、そうなるかと答えは限られてくる、

（こんな昼間から空き巣か？）

警戒して物音を立てないように家に入りゆっくりリビングに向かおうとする、そこでさらにおかしいことに気付く、TVがついているのだ、空き巣ならばTVをつけたりしないはず、ならば誰が？

リビングに入ってその疑問は解消された、リビングのソファには少

し薄い色の赤髪のストレートロングの髪型をした女性が座ってTVを見ていた、義切はその女性を知っていた、

「なんだ、帰ってたのか、レイ。」

「ん？ああ義、昼頃帰ってきたんだ。」

レイと呼ばれた女性は義切の方を向きそれだけ言っとTVに視線を戻す。

「楽しかったか？箱根は。」

「まあ、お土産はそこに置いてあるぞ。」

「へいへい。」

レイは義切の同居人で仕事の相棒である、今日まで箱根へ旅行に行っていたのだ。

義切はお土産と思われる袋を一つ取って中身を確認する、

「山葵チップスって、お前……。」

「そーいえば、麻帆良に帰ってきたら用事が有ったんだ、付き合ってくれ。」

「別に良いけど。」

そういつて二人は街に出た。

レイに連れられてやってきたのはケータイショップだった、

「そろそろ機種変したかったんだ〜？」

義切は呆れていたが、すぐに気を取り直す、

「時間掛かるだろ？俺は夕飯の買い物してくるぞ。」

人の話を聞いているのかいないのか、わかったと言いながら携帯に目を奪われていたレイを見て義切はため息をつきつつケータイショップを後にした。

買い物を終えてスーパーを出ると一匹の猫がうろついていて、義切と目が合うと足下までやってきて鳴きながら義切の足にすり寄ってきた、義切はしゃがんでその猫をなでる、

「なんだお前、首輪着けてないようだし野良か？」

それに答えるかのように一鳴きすると背を向け走り出す、途中で一旦止まり振り向いてもう一回鳴く、

「ついて来いってことか？」

猫を追いかけて建物の間や裏路地を通っているうちに空き地に着いた、そこには猫達に餌をやっている黄緑色の髪をした少女がいた、義切を案内した猫はさっさと少女の下へ走って行き餌を貰っていた、義切は少女へ近づいていくと少しおかしなことに気づいた、少女の耳が異様に大きい、いや大きいのではなくカバーというかヘッドフォンというかとにかく機械的なものがついていた、義切が近づくと少女の方も気づいたのか顔を上げる、義切は少女の顔に見覚えがあったがどこで見たか思い出せず必死に頭を捻り記憶を呼び起こす、

「え〜と、絡繰・・・茶々丸さんだっけ？」

「私を知っているのですか？」

「ああ、まあ少し有名だからな。」

義切はネギの支援という依頼を受けている為一応3年A組のクラスメイトの名前と顔を覚えていて、さらにロボットで闇の福音の従者となればおのずと耳に入ってくる。

「そうですか、あなたの名前は？」

「俺は漆川 義切だ、よろしく。」

義切の名前を聞いた茶々丸は少し考える様な仕草をした後口を開く、

「検索完了しました、漆川 義切、麻帆良学園男子中等部3年C組の出席番号3番。」

「おっ、流石だな俺の名前も覚えているのか。」

「はい、私には学園の関係者全員の名前がインプットされてますから、それで漆川さんは何故ここへ？」

「義切でいいよ、俺はそいつに連れられて来たんだ。」

義切はここに案内した猫を軽く指差して言った、茶々丸はそうですかと言うと再び猫に餌をやり始めた、

「この猫達には毎日絡繰さんが餌をあげてるのか？」

「はい、それと茶々丸でいいです。」

「えっ？」

予想外の言葉に義切は聞き返す、

「ですから私のことは茶々丸とお呼び頂いて結構です、苗字で呼ばれるのは慣れていません、それに・・・」

茶々丸が視線を義切の足下に移す、それにあわせて義切も足下を見ると義切を案内した猫がすり寄っていた、

「あなたは信用に値する人のようですから。」

「そ、そうか。」

義切は照れるのを隠すように頭を掻く、すると携帯電話の着信音が聞こえてきた、

「ちよつと失礼する。」

義切はポケットから携帯を取り出して電話に出る、

「もしもし。」

「あつ、義、こっちは終わったぞ。」

「そうか、じゃあすぐ行くからショップで待っていてくれ。」

レイからの電話を切ってポケットにしまつて茶々丸に向き直る、

「じゃあ俺は帰るけど、俺もたまに来て構わないかな？」

「はい、構いません。」

「ありがとう茶々丸さん、じゃあ。」

「はい、さようなら。」

挨拶を交わした義切はレイの待っているケータイショップへ向かい、レイと落ち合うと空き地の猫のことを話した、

「へえ、そんなことがあったのか、面白そうじゃから明日私も連れてつてくれ。」

「ああ、いいぞ。」

次の日

昨日の約束通り義切はレイを連れて猫のいる空き地へ向かった、やはりそこには先客として茶々丸が来ていたが少し様子がおかしい、焦っているようでオロオロしている、何があったのかと義切りは声をかける、

「やあ、茶々丸さん、どうかしたのか？」

「あ、義切さん、そちらは？」

「ああ、こいつはレイ、俺の仕事仲間ってとこだ。」

「はじめましてのう、茶々丸。」

「んで、茶々丸さん、なんか焦ってたみたいだけど、なにかあったのか？」

「そうでした、実は猫が・・・」

茶々丸は明らかに困った顔をしながら猫を抱いていた、猫は義切を見て一鳴きしたがあまり元気が無いようだ、よく見ると血が滴り落ちていいる、猫の前足には少し大きめの切り傷があった、

「怪我をしてるのが、何かに引っ掛けて切っちゃったみたいだな。」

「そうなんです、どうしましょう。」

茶々丸は不測の事態なのかかなり狼狽していた、対して義切は冷静にどうするか考える、

「本当は獣医に連れて行った方がいいんだろうが飼っているわけじゃないし・・・、仕方ないか、頼むレイ。」

「いいのか？こんな所で、茶々丸もおるし。」

「見られても大丈夫な人しかいないから頼んだんだ。」

「何をするんですか？」

「まあ、見てなつて。」

レイが目を閉じ集中して茶々丸の抱いている猫の切り傷の部分にてをかざす、そしてレイが何かをしようとするその瞬間……

「げっ、雨降ってきやがった！」

いつの間にか空一面に暗く雲がかかっており雨が降ってきたのである、レイは集中が途切れたのか義切に文句を言う、

「あー！お主が大声出すから集中が途切れたじゃろうが！」

「雨降つてるとお前の力弱くなるだろ！しかし困ったな、猫を濡らすわけにはいかないし、一旦どっかで雨宿りするか。」

「ここからでしたらマスターの家の方が近いのでそちらに行きましよう。」

「いいのか？つていうか初対面の人間を入れてくれるのか？」

「私が説明すれば特に問題は無いかと思われませう。」

「大丈夫ならいいんだが……」

「では急ぎましよう。」

そうして茶々丸の案内により、義切とレイの二人はエヴァンジェリン宅に雨宿りすることとなった、

「只今帰りました、マスター。」

「遅いぞ茶々丸、まったく何をやって・・・ん？」

「ど、どうも。」

茶々丸の後ろから気まずそうにおずおずと入ってくる義切とレイ、エヴァンジェリンはそんな二人を怪訝そうに睨んでいる、

「なんだ貴様等は。」

「マスター、実は・・・」

茶々丸は昨日と今日あったことをエヴァンジェリンに説明した、しかし説明を聞いてもエヴァンジェリンは怪訝そうな顔を崩すことはなかった、

「そうか、しかし私が初対面の、しかも男を家に入れるわけあるまい、出ていってもらおう。」

（やっぱりそうなるよなあ。）

「わかった、だけど猫の治療だけさせてくれ。」

「・・・好きにしる。」

義切が目で合図するとレイは頷き茶々丸の前いき先程と同じ様に猫の前足の切り傷のある場所に手をかざすと目を閉じ集中する、

「・・・はっ。」

「!?!?」

猫の傷がみるみるうちに治っていった、それを見ていたエヴァンジェリンは驚愕していた、

「んじゃ、失礼しました。」

「ちょっと待て！」

そそくさと帰ろうとする義切とレイを呼び止めるエヴァンジェリン、

「なんだ？」

「魔法でも気でもない、今は一体なんだ？」

「何って、神通力だけど？」

「神通力だと？」

「その調子だと神のことも知らないっばいな。」

「神、話は聞いたことはあるが本当に実在するとは……」

「神……？」

エヴァンジェリンは物珍しそうに、茶々丸は不思議そうにレイを見つめていた、

「二人とも詳しく知らないようだから説明しておこう、ここで言う神とは全知全能で世界を作ったなんていうものじゃなくて、妖精みたいなものだと思ってくれていい。」

「妖精・・・」

「この場合の神は龍脈とか霊峰とかの魔力や気が集中する場所にそれらの力が長い年月を掛けて木等の自然物に蓄積していき、蓄積量が一定量まで溜まったときそこに人々の意識とか願いが流れ込むと蓄積された力は形を持ち、神と呼ばれる存在と成る。」

感心したように頷くエヴァンジェリンだがある疑問を口にする、

「なる程な、しかし力が蓄積されるのはいいとして人間の意識が流れ込むなんて都合の良いことが簡単にあるのか？」

「日本は他国に比べて狭いうえに力が溜まりやすい山が多い、それに昔から日本人はそういう山々に集落を作ってきた、稲作の為に山から来る川の近くに村を作ったり、山中に城を作ったりな、そういう地理的、文化的要因から神が生まれるには事欠かなかった、だから日本は八百万の神の国なんて呼ばれている。」

茶々丸は啞然としており、エヴァンジェリンは話に聞き入っており、さらに疑問を口にした、

「しかし私は神なぞ一度も会ったことが無いぞ。」

「それは神の性質に原因がある、さっき言った通り神は土地に集まった力に人の強い想いが合わさって誕生する、だからその土地と縁で繋がっている為その土地の外に出ると形を維持出来なくなるから神は生まれた土地から動けない、だから神は目撃例が極端に少ない、しかし絶対的な力を持つものとしてそこに存在している、だから人々は山に神社を作り神を崇め、祀るようになった、人々の想いが強

くなればそれだけ神の力も増すから神にとっても好都合なんだ。」

「しかしレイさんも神ならばここにいるのはおかしくないですか？」

「普通ならな、神を形をもってこの世に繋ぎとめているのは縁だ、ならば神を生まれた土地から外に連れていきたいのなら新しい縁を作ってしまえばいい。」

「それなら貴様等は……」

「そう、バクティオー仮契約している。」

暫くの沈黙が続くが考え込んでいたエヴァンジェリンが笑い始める、

「ククク……アーハツハツハ！神に博識の坊主か、貴様等気に入ったよ、名前は？」

「漆川 義切。」

「不死鳥の神、レイじゃ。」

「義切にレイか、いいだろう我が家に入ることを許そう。」

「そりゃ有り難い。」

「ただし、私の暇つぶしに付き合ってもらおう。」

そういつて茶々丸に合図すると碁盤と碁石が運ばれてきた、

「困碁か……」

「どうせ雨が上がるまで暇なんだ、構わんだろう?。」

「私はできんが、義はできるかの?。」

「ああ、カズに付き合わされて何度かやったことがある、退屈させない程度には出来るだろう。」

そうやって碁盤を挟んでエヴァンジェリンの対面に座る義切、エヴァンジェリンは黒、義切は白の碁石を使い対局するのであった、

20分後・・・

「なん・・・だと・・・。」

「俺の勝ちだな。」

義切が勝っていた、エヴァンジェリンと茶々丸は啞然としていて、レイは何が起こったのか理解していなかった、

「クツ、もう一局だ!。」

「構わんぜ。」

更に二十分後・・・

「負け、か・・・。」

「フツ、私が本気を出せばこの程度。」

次はエヴァンジェリンが勝っていた、これで一対一、普通ならもう一回やって勝敗を決めるが、義切は立ち上がる、

「雨が上がったし、これで失礼させてもらう。」

「ちょっと待て、こんな中途半端な所で終わらせはせんぞ。」

「こついう事は次を残しておくのが面白いと思うんだが?」

義切の言葉を聞き、エヴァンジェリンは少し考え込むがすぐに口を開いた、

「ふむ、それも一理あるな、いいだろう決着は次の機会に取っておこつ。」

「それじゃあ夕飯の支度もあるし、失礼する。」

「うむ、またいつでも来るがいい、貴様は特別に許可してやる。」

「そいつは重畳だ。」

そう言って別れの挨拶をして帰ろうとする二人を茶々丸が見送る、

「今日は色々ありがとうございました、あんな楽しそうなマスターは久しぶりです。」

「いいってことさ、こつちもエヴァンジェリンさん宅に入れるようになったしな。」

「はい、それにレイさん、猫を治療してくださってありがとうございます。ありがとうございました。」

「当然のことをしたまでじゃ、生きとし生けるものを救うのが神の務めじゃからの。」

「んじゃ、さよなら、茶々丸さん。」

「はい、さようなら。」

（漆川 義切か、調べてみる価値はありそうだな。）

手を振る義切とレイ、二人にお辞儀をして見送る茶々丸、そして窓からその様子を見ながら思考にふけるエヴァンジェリンであった。

第7話 く休日く（前書き）

ようやくと7話が書き上がりました、最近では身内関係で少し忙しかったので投稿が遅れてしまいました。

第7話　〜休日〜

ある土曜日の昼下がり、義切は部活動には所属していないので土曜日は実質的に休みであった。

義切とレイはお茶を飲みながらテレビを見ていた、二人が観ているのはお笑い番組である、これはレイたつての望みであり、レイ曰くお笑い以外の物は大昔レイが生まれた時からあるもので、ニュースは瓦版、ドラマは詩や俳句がそれにあたるらしい、お笑いは落語があるのだが、レイが活動できた範囲は生まれた山と精々山の近くの村が限界だった、勿論小さな村に落語の文化など入って来ることはない、故に今まで触れたことのないお笑いという文化に興味津津なのである。

義切もお笑いは嫌いではないので休日は二人でテレビを見ることが多い。

ふと時計を見た後に義切は立ち上がる、

「俺はそろそろ出掛けるがお前はどつする？」

「私はいい、留守番しとるよ。」

レイの言葉にそうかと返事すると軽い支度をして義切は街に出た。

街をしばらく歩き回った後裏路地へ入って行く、進んでいくと暗いが少し開けた場所に出る、そこに一軒の建物が建っており義切は中へ入った、建物の中は飲み屋のようにカウンター席とテーブル席があるが今は誰も居ない、カウンターの向こうには男性が座りながら新聞を読んでいたが、義切が入ってきたのが分かると新聞を読むの

を止めて挨拶する、

「いらつしゃい、義切君。」

「ああマスター、例の奴は届いてるか？」

マスターと呼ばれた男性は頷くとカウンターの裏から直方体の箱を取り出してカウンターテーブルの上に置く。

実はこの店は魔法に関する情報屋であり、表向きは飲み屋として営業している、更に普通的手段では運べない物品の受け取り所としての側面も持つており利用客は多い、また犯罪に協力することがないことでも有名で信頼の置ける店である。

そしてそんな所に持ち込まれた物もやはり普通ではなかった。

義切が箱を開けると中には一通の手紙と山吹色の拳銃が入っていた、手紙を開けると人の姿が映る、その人、白衣を着て眼鏡を掛けたいかにも研究者のような女性、名前はテトラ・カトリといい遊撃士協会の兵器部門の技術者であり、この拳銃を造った人物である、

「この手紙が開かれていますということは無事に届いたようですね、今回はあなたの要望通りに作らせてもらいました、今からざっと説明させていただきます、まずは外装全てにトラコニウムを使わせてもらいました、これにより生半可な刃では傷一つ付かないでしょう、次に出来る限り銃身を詰めて取り回しの良さと連射性を上げました、またハンマーやマガジン投入口などを磨き上げ弾詰まり防止やスムーズなりロードも期待できます、トリガーの横のレバーは安全装置の他に実弾と魔法弾を使い分けるスイッチにもなっているのので気をつけて下さい。」

説明はこれくらいです、あなた専用の銃ですから使いこなせるでしょう。」

そう言うと映像は消えた、よく見ると下に何か書いてある、

追伸、もう一つの銃はもうしばらく掛かります。

義切は手紙を箱にしまつと代わりに銃を取り出して壁に向かって構える、

「かなりいい感じに出来上がってるな・・・」

その様子を見てマスターが口を開く、

「その銃、名前はなんて言つんだ？」

義切はもう一回手紙を手取るがそこには書いていない、箱を見るがそこにもそれらしき文字は書いていない、ふと銃を見るとグリッ
プに文字が彫つてあつた、

「ゴールド・・・？」

「ゴールドか、シンプルだがいい名前じゃないか。」

義切は銃を箱に戻した後懐から一枚の紙を取り出しテーブルの上に置いた、

「あとこれを博士へ届けて欲しい。」

「これは？」

その紙にはトンファアのような物がいくつか描かれていて、またそのいくつかにはトンファアに刃が付いている様なものだった、

「俺が描いた武器の設計図、博士に送ってくれば後はやってくれるだろうから。」

「いいけど、あんまり武器作らせて怒られたりしないのかい？」

「小言なら慣れてるし、なんだかんだ言ってやってくれるからな。」

肩をすくめて笑う義切、代金を払い挨拶すると箱を持って店を出た。

時間は少し早い。夕飯の買い物をするに、商店街へ向かう、そして商店街にある行き着けの肉屋に寄る、

「おう義切、いい肉仕入れてるよ！」

「じゃあ買っていこうかな。」

ステーキ用の肉を今日の夕飯と平日の弁当の分とたっぷり五人分買っていく、更にスーパーに寄り野菜と果物を買って帰宅することにした。

「ただいま〜っと。」

「ああ、おかえり〜。」

帰ってきてまだテレビを見ているレイに挨拶をし、台所へ行き夕飯の下準備し始める。

下準備があらかた終わった後、持って帰ってきた箱を持って家の中にある扉の一つを開ける、そこには階段が地下へ続いていた、階段の

先にはもう一つ扉がありその扉は少し広い部屋に繋がっていた、部屋に入り電気を点けると薄暗い部屋の全景が見える、部屋は長方形の形をしており、カウンターテーブルのようなものがあり、扉から机を挟んではあるか向こうに人の形をした的がある、この部屋は射撃訓練場であった。

なぜそんなものがあるかという義切はもしもの場合自分の家を拠点として使えるように最初から計算してこの家を作っていて、この様な部屋がいくつかあり、人が寝泊まりする部屋も二人で住むには有り余る程の量がある。

机に箱を置き、ゴールドを取り出し、目をガードするゴーグルと耳をガードするヘッドホンを装着してゴールドのグリップを右手で持ち、それを支えるように左手を添える、そして的を見据えた。

しばらく射撃訓練した後ゴールドを置いてヘッドホンを取る、室内にある時計は7時を指していた。

「ふう、確かに連射性と取り回しは良いが銃身を切り詰めてあつから反動が強いな、慣れるまで暫くかかるか。」

すると狙いすましたかのように射撃訓練場の出入口の横にある、インターホンが鳴り始める、義切はインターホンに近づいて通信にでる、

「あいよ、どうしたレイ？」

「珍しく来客だぞ。」

それを聞いた義切はゴーグルを置き、急いで階段を上がっていった。来客があつた場合は基本義切が出る、家主であるし学校の敷地内で

ある為義切の知り合いが来る可能性がある、そんなときに義切の家から義切でない人、しかも女性が出てきたとなればややこしい事態になりかねないからである。

「はいはいっと・・・」

玄関を開けるとそこには見知った顔があった、

「よし。」

「くんばんは。」

「は・・・？」

目の前には金髪の背の低い少女と緑色の髪をした少女・・・
エヴァンジェリンと茶々丸であった。

「・・・で、こういうこと聞くのはアレなんだが、一体何しに来たんだ？」

机を挟んで義切とレイの対面のソファに座りお茶を飲むエヴァンジェリン、茶々丸は後ろに立っている、

「いやなに、少し暇だったので遊びに来たというわけだ。」

「遊びにつて・・・、てかよく俺の家がわかったな？」

「そちらは私が調べました。」

「そ、そうか。」

茶々丸の言葉を聞いて引きつった笑いを浮かべる義切、レイは我関せずといった感じでお茶を飲んでいる、少し会話を交わした後義切は立ち上がる、

「まあとりあえずこんな時間だ、夕飯作るから食ってくか？」

「うむ、そうしよう。」

その返事を聞くと台所へ向かった義切、レイはエヴァンジェリンと談笑している、長く生きてる者同士で気が合うのだろう、

・・・

「あれ？そっぴや茶々丸さんはご飯って食べるのか？」

「いえ、私は食べる必要が無いので結構です。」

・・・

「そっぴやニンニク駄目っぴいな、仕方ないから玉ねぎと酒で風味付けるか。」

料理は義切の趣味であり特技の一つである、ほぼ一人暮らしの生活なので身に付くべくして身に付いたスキルといえるのだが、『自分

が食べるものなのだから思いっきりこだわってみよう』の考えに至りいつの間にか趣味になり、その腕は高級レストランの料理と比べても遜色ないものとなった。

テーブルの上には3人分のステーキとサラダ、副菜にライスが置かれ、食事が始まる。

ステーキをナイフで切り、口へ運んだエヴァンジェリンは暫く味わった後感心するように頷いてみせた、

「ふむ、美味しいじゃないか。」

「そうか、口に合ってたなによりだ。」

エヴァンジェリンの感想を聞き安堵する、料理を作る者にとって他人の口に合うように作れたか否かはかなり気になるものだ、勿論自信はあったが、やはりそれが上手く作れたとなると嬉しくなって少し笑う義切だった。

食事が終わり、食器を片付けてお茶を飲む3人、エヴァンジェリンが話を切り出す、

「そろそろここへ来た本当の目的を果たすでしょう、義切、貴様明日は暇か？」

「?、まあ、用事は入ってないなあ。」

「ならば明日、私の家に来い。」

「………はい?」

「だから明日、私の家に来いと言っているんだ。」

「なんで？」

「ネギ・スプリングフィールドが私の家で修業しているのだが貴様にそれを手伝ってもらいたい。」

その言葉を聞き怪訝な顔になる義切

「・・・怪しい、そんな殊勝な態度をするのはなんか企んでんじゃないか？」

その場から少し目をそらすレイ、義切は気づいていないようだ、

「それに修業を手伝うってあんたがいれば全部事足りるじゃないか。」

「確かに私がいれば普通修業の手伝いなどいらぬ、しかし私だけではなく色々な者を相手にすれば効率が良いと思っただけ。」

少し笑いをこらえているレイ、エヴァンジェリンとの会話に集中していて、やはり義切は気づいていない、

「まあ一理あるが、大体俺は魔法は使えるが只の中学生だぞ？そんな・・・。」

その発言を聞いてエヴァンジェリンは口の端を上げる、

「そんなはずはあるまい、遊撃士 フェニックス 不死鳥？」

「ハア……耳が早いな、まあ隠しきれるとも思っていないかったがな。」

エヴァンジェリンの言葉を聞いて諦めたようにため息をつく義切、

「その名前が出てきたってことは断れそうもないな、仕方ない、ネギの修業とやらを手伝おうか。」

「ククク、そう言ってくれて嬉しいよ。」

話がまとまった後詳しい時間を言ってエヴァンジェリンは帰っていた。

義切は臙火の手入れをしていた、レイがその様子を見ている、

「随分本格的に準備してるな。」

「まあ、修業手伝っただけだからたいしたことはしないだろうが一応な。」

「そうだな、用心するに越したことはないからな、ククク……」

「ん？どうしたレイ？」

急に笑い出したレイに声を掛けるがなんでもないとって首を横に振る、しかし顔はまだ笑っている、その笑顔に一抹の不安を感じる義切であった。

第8話 ～Double Action～（前書き）

なんかもう毎回ながらお待たせしました。

戦闘描写って難しいですね、書き上げるのに苦労しました。

それではどうぞ。

第8話 ｛ Double Action ｝

エヴァンジェリンが義切家に来た次の日、仕事の際にいつも着ている服装に着替え、懐にゴールドをしまい竹刀や木刀を入れるような袋に入れた朧火を持って準備完了だ。

「よし……。」

ズボンの腰部に鎖で繋がっている懐中時計を見る、この懐中時計は遊撃士に支給される物で遊撃士のエンブレムが刻まれている、さらに称号を持つ者の時計は特別仕様であり懐中時計の蓋の内側に称号の動物のエンブレムが彫つてあるという代物だ。

約束の時刻の一時間前、まだ早いと思い、リビングのソファに腰掛ける。

「今日は私も行くぞ、面白そうだしな。」

「ああ、こつちもそのつもりだったからちようどいい。」

後ろから話し掛けてきたレイに振り向きながら返す、レイも準備万端といった感じで笑っている、しかしやはりその笑顔に不安を拭い切れない義切であった。

約束の30分前になると二人は家を出た、エヴァンジェリン宅まで普通に歩いても20分くらいで着くので少し余裕を持つての行動だった。

エヴァンジェリン宅に着きインターホンを鳴らす、すると玄関が開かれ中から茶々丸が二人を出迎える、

「お待ちしてりました。」

中に通される義切とレイ、相変わらずリビングにはファンシーな人形が置いてある。

ふと義切はあることに気づく、静かなのだ、修行をしているなら多少なりとも騒がしい筈だ、ましてや魔法使いの修行なら静かな訳がない、

「修行をやってるのはここじゃないのか？」

「いえ、ここでやっています、・・・ですが厳密にはここではありません。」

「・・・？」

茶々丸の要領を得ない答えに首を傾げる二人、茶々丸に案内され家の地下室に入るとその部屋には大きなフラスコのようなものを横に置いたものがあり、その中には塔のミニチュアのようなものが入っていた、

「これは？」

「マスターの別荘です、この中で修行を行っています。」

「別荘って言ったってどこから入る・・・」

レイがそう言おうとした瞬間、三人が地下室から消える。

気づくと今まで見ていた塔のミニチュアの端っこに立っていた、

「ほう、これはこれは。」

「は、凄いなあ。」

「こちらです。」

驚いている二人を誘導する茶々丸、促されるように塔の中央部に進んで行くと、段々と騒がしいのが分かるようになってくる。

中央部に着くとエヴァンジェリンとネギが修行を、刹那と明日菜が剣術の稽古をしているのを見ている木乃香がいた。

「お連れしました、マスター。」

「ご苦労茶々丸。」

義切を連れてきたことをエヴァンジェリンに報告する茶々丸、

「少し待っている義切、坊やの修行をきりの良いところまで終わらせる。」

そう言って一旦止めていた修行を再開するエヴァンジェリン、義切は稽古をしている刹那達に近づいていった、

「よっ、頑張ってるな。」

「あっ、義君や〜。」

「義切！？何故ここに？」

呑気に挨拶する木乃香、驚く刹那と明日菜にここに来るまでの経緯を説明する義切、そしてエヴァンジェリンの別荘の説明を聞く、

「ここでの1日が外での一時間ねえ、まるで 神と時の部屋だな。」

「悲しきかなそのネタが判る人はいない様だがな。」

義切の後ろからレイが出てきて会話に加わる、レイを見て一同は驚いた顔をしている、

「よ、義切・・・その人は？」

「ん？ああ、初対面だったな。」

義切はレイの事を一通り説明した、

「神ってなんか話がなんか大きくなって・・・」

「神って言ってもそんな大したもんじゃないさ、魔力量の桁違いな妖精みたいなもんだと思ってくればいい。」

そんな話をしているうちにネギの修行が一段落したのかエヴァンジェリンがやって来る、

「待たせたな義切。」

「ああ、で、俺は何を手伝えればいいんだ？」

「何だ、レイから聞いてないのか？ 貴様には私と戦ってもらおう。」

「・・・は？」

啞然としている義切の後ろでレイがしたり顔をしている、エヴァンジェリンそんな二人を尻目にネギに話しかける、

「坊や、今日は特別に実習はこれで終わりだが、見取り稽古も立派な修行だ。」

「はい、^{マスター}師匠！」

「え？ ちよつ、おまつ・・・」

どンドン前に進んでいく話に頭が追いつかない義切、レイがそんな義切の肩に手を置く、

「まあ、そうゆうことだ、頑張れ。」

「レイ・・・お前・・・」

義切は絶望と憤怒が混ざった眼でレイを睨む、

「事前に言っていたらお前は断っていただろう？」

「当たり前だ！ 相手は最凶の魔法使いなんて呼ばれてるんだぞ！？」

「私だつておもしろ半分やったわけじゃない、義が強さについて悩んでいる様だったからお膳立てをしたんだ。」

「!?なんでそれを・・・」

「分かるさ、神に隠し事などおこがましい、それに相手が最凶の魔法使いなんて呼ばれてるならお前も赤い閃光なんて異名を持つてるじゃないか。」

「・・・・・・・・」

黙って話を聞く義切にレイは真剣な眼差しで話を続ける、

「しっかりしろ不死鳥^{フェニックス}、そんな腑抜けと契約した覚えは無いぞ。」

「わーったよ、やってやるさ。」

「義・・・」

「強さつてのは失敗しようが挫けようが前に進む奴に与えられる、そんなことも忘れて楽しく強くなるうなんて甘ったれた考えにいつの間になつてたみたいだ、サンキュー、レイ。」

覚悟を決め、臙火をレイに持ってもらいエヴァンジェリンの正面に立つ、そんな義切をエヴァンジェリンは見据える、

(目つきが変わったか、こいつは手強いな。)

「よく見ておけ坊や、この中では確実に最強同士の戦いをな。」

エヴァンジェリンと義切は構え、ネギ、茶々丸、刹那、木乃香、明日菜はそんな二人を緊張した顔つきで見つめている、

「刀は使わんのか？」

「焦るなよ、ウォーミングアップだろ？」

「フ、そうゆうことならば・・・」

瞬間、エヴァンジェリンの姿が消えて目の前に現れる、

「うおっ!？」

「付き合ってやる!」

かろうじて攻撃を避けるが完全に後手に回ってしまったので防戦一方になってしまふ義切、しかし大振りな攻撃が来るとしゃがんで攻撃を避け、下段の回し蹴りで足下を浮かせてそのまま追撃をかけようとしますが体勢を立て直され追撃がいなされて反撃がくる、そんな調子で攻守が逆転することが暫く続く。

「す、凄い・・・」

エヴァンジェリンと義切の一進一退の激しい攻防にネギ達は驚きの声を漏らした。

不意に二人が同時に後ろに飛び退き、距離を開く、

「さて、そろそろウォーミングアップは終わりにするか。」

そう言って手で合図すると、レイが持っていた隼火を投げる、義切はそれを受け取ると鞘から抜き、構える、

「さあ、行くぞ！」

義切が素早く踏み込み横なぎの一閃を放つが、エヴァンジェリンは大きく後方へ跳び、空中にて魔法の射手を撃ち出す、義切は咄嗟に懐からゴールドを抜き、安全装置のレバーを操作し魔法弾に設定し引き金を引くと、義切の身体からゴールドへ魔力が流れ込み、銃口の前に魔法陣が現れ、その周りに光の球が形成され、その光の球が魔力の弾となって撃ち出されて魔法の射手を相殺する。

義切は素早く飛び上がり間合いを詰めて切りかかるが、エヴァンジェリンは腕から魔力によって形成された光刃で攻撃を受け止める、更にエヴァンジェリンの蹴りが入り吹き飛ばされる義切、なんとか空中で受身を取り地面に叩きつけられるのを回避して着地する、

「どうした、その程度ではあるまい？」

「クッ、やはり強い！」

「義、出し惜しみしてる余裕は無いだろ、あれをやるぞ！」

戦いを見ていたレイの言葉に頷いて応えようと義切は叫ぶ、

「よっしゃ！来い、レイ！！！」

「何をするつもりかは知らんが隙だらけだぞ！」

レイが赤い光の球となり義切と重なる、構わずエヴァンジェリンは空中で魔法の射手を義切へ撃ち出す、しかし義切とレイが重なった瞬間、炎が義切を包み込み、壁となって魔法の射手を遮る、

「なん・・・だと!？」

「ハッ!！」

中にいた義切が腕を払い、炎を払う、払われた炎は背中に収束していき翼を形作っていく、

「翼が・・・!」

刹那が驚く、それもそのはず、本来義切は鳥族と人間のハーフだが人間の血が濃く出た為翼を持たない、しかしレイと一体になった義切の背中には翼があった、本来のハーフが持つ白いそれではなく炎によって出来た真つ赤な翼が、

「さあ、こつからは逸神同体だ!！」
ダブル・アクション

義切とレイの声が重なって聞こえる。

逸神同体

義切の身体に霊態化したレイが憑依することによってこの状態となる、憑依すると言っても意識を乗っ取る訳ではなく、ちゃんと義切とレイの意識がそれぞれ存在し、一種の二重人格だと言える、それにより二人分の思考力と反射力が発揮でき、レイの魔力がそのままダイレクトに使用できるので戦闘力が著しく上昇する、更に元々鳥族と人間のハーフである義切はこの状態になると身体から身体能力を上げる為魔力を発散させ、その副産物として背中にその魔力が収束し、翼を形成することが出来る。

「ククク、やはりお前らは面白い、そんな隠し技を持っていたとはな!」

「ここまで来たら本当に出し惜しみは無しだ、フルチャージ神力全開だ！」

「了解した、五分で決めろよ。」

神力全開

逸神同体中に使用できる技で身体中を巡る魔力を一気に解き放ち一時的に身体能力を爆発的に上昇させる技であるが、消費が激しく、一定時間経つと魔力を使い切り、逸神同体が強制解除されてしまうという諸刃の剣である。

魔力を解き放った義切が消えてエヴァンジェリンの後ろに現れる、

「なっ!？」

防御する暇もなく攻撃を受け吹き飛ばされたエヴァンジェリン、

(とんでもない速さ、そしてパワーだ、これが奴の本気か！)

再び義切が消え、次はエヴァンジェリンの落下先に現れ飛んできたエヴァンジェリンに蹴りを見舞う、

「なん・・・だと・・・ここまで速いとは!？」

「はあああああ!!！」

速さで翻弄しとめどなく攻撃を放ち反撃の隙を与えないように戦う義切、高速で動く事により炎の翼が赤い軌跡を描く、その様は正に『赤い閃光』であった、一方完璧に意表を突かれ何発か攻撃を食らってしまったエヴァンジェリンだが、義切が攻撃しようとしたとこ

るので腕を掴み、そのまま地面に向かい投げる、

「あまり調子に、乗るな!!!」

地面に叩きつけられる瞬間に受身を取り素早く立ち上がる義切、追撃に備えようとエヴァンジェリンを見るが、エヴァンジェリンは魔法詠唱をしていた、

「リク・ラクラ・ラックライラック・・・」

「エル・ダージャ・アル・ラグナス・・・」

義切も魔法詠唱をしてお互いに上位魔法を撃つ、

「これでどうだ、>闇の吹雪<!!!」

「行け、>憤怒する爆炎<!!!」

二人の魔法がぶつかり合いとてつもない衝撃が起きる、

「クツ、魔法もここまで使えるとはな、だがっ!」

「やはり魔法については相手に一日の長があるか!？」

(・・・まずい!義、右だ!!)

「!？」

急にエヴァンジェリンは魔法を放つのを止め、義切の右側に素早く移動する、魔法について少し押され気味だった反応出来なかった、気づいたらエヴァンジェリンの腕が目の前にあった。

エヴァンジェリンの攻撃が当たり、吹き飛ばされ、受身を取れずに壁に叩きつけられる、

「がつ!!」

口から少量の血を吐いてしまいが、すぐに思考を切り替え距離を詰めて隴火に魔力を込めて技を放つ、

「火群ほむら!!」

エヴァンジェリンは迫り来る隴火を受け止めようと光刃を構えるが、魔力の込められた隴火は光刃を叩き割り、そのままエヴァンジェリンを吹き飛ばした、今度はエヴァンジェリンが壁に叩きつけられる。エヴァンジェリンは立ち上がり義切を見て笑う、

「フフ、次で最後だ義切。」

「望むところだ、レイ、魔力を全部回してくれ。」

「了解、ちゃんと決めるよ?」

再び魔法詠唱を始める二人だが、さっきと違い、お互いの最強の魔法を撃とうとしているのでとてつもない魔力が渦巻く、先ほどから勝負を観ているネギ達も固唾を飲んで勝負の行方を見守っていた。

「リク・ラクラ・ラックライラック・・・」

「エル・ダージャ・アル・ラグナス・・・」

(レイ、限界まであとどれくらいだ?)

(・・・保って一分だな。)

(・・・わかった、魔力を少し残しておいてくれ。)

そして二人が渾身の魔法を放つ、

「これで最後だ、>死滅の大寒波<!!!!」

「頼む、届いてくれ、>天駆ける鳳凰<!!!!」

エヴァンジェリンの放った魔力は巨大な氷塊と寒波となって義切に迫る、一方義切の放った魔力は大きな炎の鳥、鳳凰となって熱風と共に氷塊と衝突する、最上位魔法がぶつかり合い先程より強い衝撃がエヴァンジェリンと義切、さらにはネギ達までにも襲いかかる、

「ひゃ〜ん。」

「す、凄い衝撃、飛んでいったっちゃんそう。」

騒いでいる明日菜達をよそに、魔法はまだぶつかり合っている心なしか義切が押している様に見える、

(クツ、氷と炎では相性が悪い。)

いや、実際義切が少し押していた、威力に関してはやはりエヴァンジェリンの方が高いのだが、相性が悪かった、氷属性の魔法は火属性の魔法に弱い、エヴァンジェリンもそれは計算づくだったが一つ予想外のことがあった、義切の魔力量が桁外れだったのである、その魔力量の違いが押され気味という結果を導いた、

「だが、押し切ってやる!!!」

しかし、エヴァンジェリンは魔力を継ぎ足し、魔法の威力を強化する、それによって今度は義切が押されてくる、だがそれは義切の思惑通りだった、

（よし、今だ！）

義切は魔法を放つのを止めてエヴァンジェリンの左側に回り込んだ、そう、自分がされた様に、

「本当にこれで最後だ、鳳閃火あ！！」

鳳閃火、義切が自分の技の中で一番得意な技である、炎を身体全体に纏い、突きを放ちながら相手に突撃する威力も最高クラスの技である、しかし・・・

「そう来ると思ってたよ、義切！」

エヴァンジェリンにとっては想定内の範囲内だった、魔力で出来た鳳凰を打ち破り、氷塊が義切に向かい迫り来る、義切は構わず氷塊に技を放つ、

「だったらその氷ごとぶち抜く！！」

朧火の先が氷塊とぶつかる、氷塊にヒビが入っていく、

「とんでもない底力だ、しかし！」

「いいいいいけええええ！！」

氷塊が割れて義切がエヴァンジェリンに突っ込む、

「な……に!?!」

一閃が走り義切とエヴァンジェリンは地面に着地する、一定時間が経過したことによって逸神同体が解除され、隣にレイが実体化すると義切はその場に座り込んだ、

「あゝ負けだ負けだ! くっそ〜!」

そういつと仰向けに寝転がった、そこにエヴァンジェリンが近寄り、

「素晴らしい戦いだったぞ義切、引き分けと言っても良いくらいだ。」

そう言うエヴァンジェリンの右頬に切り傷があり血が出てきていた、

「いや、逸神同体中に倒せなかったから俺の負けだよ。」

起き上がりエヴァンジェリンに言葉を返す義切、そんな二人を見ながら観戦していたネギ達はまだ啞然としていた、

「……凄かったわね、ネギ……」

「……ハイ、明日菜さん……」

「凄い凄い、義君強いな〜。」

目を丸くして会話する明日菜とネギ、一人呑気に義切を誉める木乃香、なにか考え込む刹那、エヴァンジェリンと義切はまだ会話をし

ている、

「これで貴様に借りが2つできたな。」

「2つ?」

「今回と食事を食べさせてもらった件だ。」

「あゝ、食事の事はいいさ、好きでやったことだ、今回ののはそうだな、俺もここに出入りできるようにしてくれればいいや、それで貸し借り無しだろ?」

「それでいいのか、後悔するなよ?」

「しないさ、それに今回は俺も少し感謝したくらいだからな。」

「そうか、立てるか?」

エヴァンジェリンが手を差し伸べる、義切はその手を取り立ち上がる、

「悪いいな、・・・あれ、レイは?」

いつの間にか居なくなつたレイを探して回りを見渡して捜す、すると何処からかレイの声が聞こえる、

「私は魔力を使いすぎて疲れたから先に休むぞ。」

どうやら霊態化していたようだ、義切はわかつた、と返事すると臍火を鞘にしまい、ネギ達の元へ歩いていった。

「す、凄かったです、義切さん、師匠とあそこまで戦えるなんて！」

「ホント凄かったわね。」

「義君、格好よかったです。」

「お見事でした、義切さん。」

「ハハ、いやいや、それ程でも無いですよ。」

ネギ達に誉められ照れているのか頭を掻いている、そこに刹那が話しかけてくる、

「あの・・・義切！」

「ん、なんだ刹那？」

「私に剣術を教えてください！」

「えっ？」

あまりに唐突なことで変な声が出てしまう義切、刹那は続けて話す、

「私はまだまだ未熟だ、だから少しでも強くなりたい、だから剣術を教えてくださいませんか？」

義切は少し考えた後こう言った、

「まあ、教えるのは別にいいんだけどさ、もうすぐ中間試験だけどそっちはいいのか？」

「……………え？」

「……………あっ!？」

義切の言葉にその場にいた約二名が凍りついたのであった。

第8話 ｛Double Action｝（後書き）

始動キー以外の魔法詠唱は判らないので割愛させて頂きました（笑）

魔法の名前はオリジナルが多かったですね、それでも名前でどんな魔法か判るような名前を頑張って作っていいことと思います！

第9話 〽誕生、六人目!?!〽 (前書き)

ちよつと色々あつて更新遅くなつてしまいました。

それではどうぞ。

第9話　く誕生、六人目！？く

中間試験

それはその学期に学んだ事をどの程度身に付けているのかを確認する試験であり、中間と名に冠するようにならば大体学期の中頃に実施される。

あるものは結果を残し

あるものは無難に乗り越え

あるものは補習という名の絶望に到達する・・・

そしてその学生が苦悩する試練の一つがここ麻帆良学園でも行われようとしていた。

ここは麻帆良学園女子中等部3 - Aの教室、放課後の教室には殆ど人は居らず8人の生徒と1人の教師が居るだけだった。

教師は3 - Aの担任であるネギ、生徒はバカレンジャーと呼ばれる明日菜、楓、古、まき絵、夕映の五人、木乃香と刹那、そして義切であった。

バカレンジャーの五人は試験前のテストにて点数が良くなかったので補習という形で残っていた。

と言うわけで義切が勉強を教えることになったのだった・・・

「どうゆうわけだよっ！！」

「義君どうしたん？」

「あ、いや何でも無いです。」

本文にすかさず突っ込む義切だったが、本文が見えない他の人々は何事かという顔をしていた。

義切が何故こんな状況になってしまったのか、それは前日の夜の事・

「うう……」

明日菜が部屋にてノートに向かいながら唸っていた、

「どうしたん、明日菜？」

「この問題が解らない……」

心配して声を掛ける木乃香だが何のことはない、問題が解らないだけである、本人にとっては大問題だが……

明日菜は大体全ての教科においてこんな調子なのである、英語だけならばネギがいるのだが、他の教科は木乃香に教えてもらうにも限度があり何度も教えてもらうのも悪い、なので一人で頑張るのだが手も足もでないのであった。

そんなとき木乃香が妙案を思いつく、

「そつや明日菜、義君に教えてもらおう。」

この一言が始まりだった、

「えっ、義切君に？」

「うん、義君頭良いからきつと解りやすく教えてくれると思うぞ。」

「でも義切君に悪いよ、あっちにも試験あるだろうし……。」

「うーん、取りあえずウチ頼んでみるぞ。」

そう言つて木乃香は携帯を手に取つた、

「別にいいですよ。」

すんなりOKが出た、

「明日菜、大丈夫やてぞ。」

「じゃあ明日補習があるからバカレンジャー五人で教えてもらえる？」

「えっ、ちよつ……五人！？」

「やっぱり駄目なん？」

明日菜一人なら特に問題ないが流石に五人一緒に面倒見るとなると辛いのか難色をしめす義切、しかし木乃香からのお願いでもあるので断るのは好ましくない、そこで逃げ道を見いだした、

「あ、いや・・・、そうだ！そうになると俺は男子だから女子校入れませんよ？」

「あ、じゃあ僕が許可取ってきましようか？」

「・・・・・・・・・・」

ネギの一言でその逃げ道さえも封じられた。

そんな訳でバカレンジャーに勉強を教える事になったのであった。

英語はネギが教える事になっているので、義切が教えるのは他の教科ということになっている、

「えーと、それじゃあ取りあえず簡単なテスト作って来たのでちょっとやってみて下さい。」

と言うと昨日の夜問題集から適当に抜粋して40分位で作ったテストをバカレンジャー、そして刹那と木乃香にも配る、

「義君本格的やな。」

「私とお嬢様もやるのか？」

「一応だ、もうここまで来れば六人だろうと七人だろうと変わらな
いからな。」

不思議そうな顔をしている刹那に義切は答えた。

義切は五人を相手にすることになったならばもう一人や二人増える事はあまり変わらないのでまとめてやってしまおうという魂胆だった。

そして30分後返ってきたテストを採点するため、一旦ネギと交代して空いている机で採点する義切だが、採点が進んでいくのに比例して義切の顔がひきつっていく、

テスト結果、100点満点中

明日菜	22点
楓	26点
古	24点
まき絵	23点
夕映	30点
刹那	32点
木乃香	84点

「なん・・・だと・・・。」

正直バカレンジャーの実力を侮っていた、適当といっても問題集の基本と標準の問題で作っており、発展問題などは入っていないから最低でも皆五割は取ってくれると思っていたが、木乃香以外は豪快に点数が低かった。

英語の補習が一通り終わり再び義切が教卓に立った、

「しかし、予想以上だよ、逆の意味で。」

「「「いやあ。「」「」」

「いや、褒めてないから。」

夕映以外の四人が照れたように頭を掻くのに突っ込む義切、次に刹那の方を向く、

「あと刹那。」

「えっ?」

「お前は今日からバカホワイトな。」

「は・・・?」

突然の宣言に唖然とする刹那だが、すぐに正気に戻り抗議する、

「どつゆつことだ!?!」

「どつゆつこともなにも点数酷いからさ。」

皆に見えるようにテストを広げる、確かに刹那の点数は他のバカレンジャーのそれに比べてあまり遜色なかった、

「刹那さんって以外と勉強できなかったんだ・・・」

「ついに六人目が加わったアル。」

「・・・くっ。」

抗議したいが点数が低いのは事実なので返す言葉が無く黙ってしまった
う刹那、そんな刹那に義切は近寄り耳の近くで小さい声で囁く、

「あんまり勉強出来ないと下手すれば木乃香様と同じ学校行けなくなるかも知れないんだぞ。」

「!?!」

その言葉を聞いた瞬間刹那の目の色が変わる、

「それが嫌なら勉強することだな、俺が教えてやる。」

麻帆良学園は高校までエレベーター式なので最低限の成績を取っていればそんなことはないのだが、義切はワザと刹那に発破をかけた、しかし大学となるとそうではないので義切の言うことは100%嘘というわけでもなかった。

さらにバカレンジャーの五人を発奮させる為にこんなことを言った、

「え、次の中間試験にて点数のノルマを設けてノルマ以上の点数を取った人はネギ先生が何でも一つ言うこと聞いてくれるらしいぞ
!(笑)」

「?????!」「」「」

「ええ!?!」

これに一番驚いたのは言うまでもなくネギだった自分はそんなこと一言も言っていないので当たり前だろう、義切はそんなネギの両肩に手を置いて小声で説得する、

「お願いしますよ先生、皆のやる気を上げる為です、それにノルマの点数をある程度高めに設定すれば恐らく皆の願いを聞くなんてことありませんから。」

「う、うう・・・わかりました。」

渋々納得させられたネギ、しかしその条件に明日菜だけ乗り気ではなかった、

「あの、私は別にネギに頼むことなんてないんですけど・・・」

「そうか？高畑先生に何か頼みたい時にネギ先生を中継すればなにかと便利・・・」

「頑張ろう！」

しかし瞬時に丸め込まれた、そしてまた刹那の方を向く義切、

「あー、あと刹那の場合はノルマ越えられなかったら剣の稽古の話も無しだからな。」

「なっ！？」

成績を上げなきゃいけない理由が一つ増えた刹那だった。
補習を再開する義切、

「えーと現代文の範囲は・・・、ことわざって小学生かよ、まあいいや簡単なのから行こう。」

問題を黒板に書いていく

石橋を叩いて

小学生低学年でも答えられる問題である。

「これ分かる人。」

聞いてみると夕映と刹那が二人何を聞いているんだと言いたそうな顔をしているが手は挙げていない、残りのバカレンジャー4人が手を挙げていた、嫌な予感を感じながらも古に聞いてみる、

「はい、古さん。」

「ハイ、石橋を叩いて砕くアル！」

「……………??」

予想の斜め上に行く答えに石橋ではなく義切の思考が砕かれしばらく停止した、

「違うわよ、割るよ。」

「いやいや、崩すでいじわるよ。」

「えっ、壊すじゃないの?」

「やっぱり砕くアルヨ！」

四者四様の答えが飛び交う、段々と正気に戻った義切は間髪入れず突っ込む、

「破壊するなああ！橋崩すなよ！壊したら渡れないだろ！！」

突っ込まれて笑う四人、必死に突っ込んで肩で息をする一人、呆れる二人、お先が真っ暗であった。

そんなグダグダな雰囲気のままその日は終わってしまった。

次の日、

中間試験前となり試験範囲が終わった男子中等部の社会科の授業は自習の時間だった、静かに自習していたり密かに友達と話したり遊んだりする生徒が居る中、義切が頭を抱えていた、それを見て一騎が声をかける。

「どうした義？」

「ああ、いやテスト形式の問題作るのは結構難しいなって。」

「そういえば勉強教えてるんだったな。」

「ああ、それ用に作ってるんだが、意外と難しいんだ。」

話し合っている二人をよそに一人の生徒が教卓で資料を整理している社会科担当の教師に質問しようと近づくと、

「照井先生、質問いいつすか？」

「俺に質問をするな！」

「じゃあどうしろってんだよ……。」

そんなやり取りに小声で突っ込むことも忘れない義切であった。

その日の授業が全て終わり、学校が帰宅の波に包まれる、義切もまた作ったテストを鞆にしまって補習に向かう準備していた、

「さて、行く前に印刷して行かなきゃな。」

「義切。」

後ろから声を掛けられ振り返ると一人の生徒がこちらを見ていた、

「優人……。」

彼の名前は中村 優人、運動神経や成績が良く、一方的に義切をライバル視している生徒で無視していればいいのだが義切も負けず嫌いな所があるのでつい張り合ってしまうのである、

「聞くところによると女子に勉強を教えているそうじゃないか。」

「ああ、それがどうした？」

「いやなに、人に教えるのは結構だがお前自身が勉強できているのか気になってな。」

「心配するな、ちゃんとやってるぞ。」

「ならばいい、本調子でないお前に勝った所で何も面白くないから

な。」

そう言うと優人は教室に戻っていった、義切も学校を出てコンビニにてテストをコピーして補習へ向かった。

そろからの補習も問題は色々あったが特に何もなく終わり、試験前日の日曜日、義切は黙々と机に向かっていた。

補習は金曜日までに大体終わらせて試験前の土日は各自で自習ということになった。

「ふう、少しやすむか。」

とお茶でも淹れて休憩しようとした時だった、

ピンポン

インターホンが来客を知らせる、玄関に向かう義切、早朝からレイはどっか出掛けて行ってしまったので今この家には義切一人である、

「はいはいっと。」

玄関を開けるとそこには教科書類を持った刹那がいた、

「おう、どうした？」

「いや、その、数学で解らないところがあったから・・・」

「そうか、まあ取り敢えず上がんな。」

リビングの机を挟み対面に座る二人、義切は刹那の解らない問題を教えている、要領を得ないようで唸る刹那、

「うーん……」

「頑張れホワイト。」

刹那が不機嫌そうな顔で義切を見る、

「そのホワイトって言うの止めてくれないか？」

「ホワイトが嫌ならシルバーだな、シルバー良いじゃないか高級感があつて。」

刹那の眼に僅かに殺気が籠もる、それを察知した義切が笑う、

「冗談だよ、人を殺気の籠もった眼で見るな、んでどこが解んないんだ？」

「あ、ああ、ここなんだが……」

そんなこんなで結局夕方まで勉強を教えていた、

「すまなかつたな、夕方まで邪魔して。」

「気にすんな、それより教えたんだから結果出せよホワイト。」

「くっ、試験終わったらホワイトって言わせないからな！」

「お、その意気だ。」

そう言って帰って行く刹那を見送ると義切は勉強の続きに取り掛かった。

そして各人がそれぞれの目的を持ち、試験に向かっていったのであった。

第9話 〽誕生、六人目!?!〽 (後書き)

なんか締まりのない終わり方になってしまった？

一応話は次回に続きます。

オリキャラプロフィール02（前書き）

オリキャラのプロフィール第二段です。

オリキャラプロフィール02

レイ（？）

鳳凰の神、義切の相棒、

好きなもの お笑い、温泉、義切の手料理。

嫌いなもの 特に無し。

龍脈の流れる土地に魔力や気が溜まり、そこに鳳凰という架空の生物を想像した人の思いが流れ込み誕生した。

年齢は不明、本人の話によると戦国時代には誕生していたらしいが200から歳を数えるのを止めたらしい。

昔は山に登ってくる人々と話したり遭難した人を助けるなどしていたが、時が流れ人々が山に登るのが稀になり退屈を感じていた時に義切と出会い、外の世界が見られるということで嬉々として仮契約した。

普段は飄々としていて義切を茶化していたりするが、時には義切を気遣ったり、的確な助言を与える。基本的には人間態に実体化していて普通の人にも見たり触ったり出来るが、魔力を激しく消耗した際には霊態化して消費を抑えて魔力を回復する、この時は契約者である義切のみ意志の疎通が可能、さらには鳳凰の名に恥じず鳥になることも可能。

中村 優人（15）

麻帆良学園男子中等部

3年B組 出席番号18番

好きなもの 両親、優れたもの、努力する人。

嫌いなもの 怠惰、批判されること。

成績優秀でスポーツも万能、両親を心から尊敬しており両親から名付けられた自分の名前「誰よりも優れた人間」を実行すべく並々ならぬ努力で他者を蹴落としてきた、それ故自分と同じように何でもできる義切をライバル視している。

努力してきた絶対的自信から少し尊大な態度を取ることがあるが、努力している人には一定の評価や敬意を払うので好き嫌いがはっきり分かれている。

照井先生 (2?)

麻帆良学園男子中・高等部社会科教諭

好きなもの ?

嫌いなもの 質問されること。

麻帆良学園の社会科の先生、自他に厳しい人で特に質問されることを嫌うが結局は教える面倒見のいい先生で、授業も分かり易いと評判。

オリキャラプロフィール02（後書き）

個人的には照井先生がお気に入りですねWWW

またオリキャラ出てきたら第三弾やります。

第10話 くデート？く（前書き）

今回は基本は義切の一人称の視点で書いてみました、今まで三人称視点ばかりだったので上手く書けてるか不安です。

でも楽しみたいだけなら幸いです。

第10話 くデート？

私、漆川 義切は只今街中の待ち合わせ場所によく使われる広場のベンチにて一人座ってる。

なんで座ってるかって？

待ち合わせの為に決まってるだろう。

待ち合わせの時間は11時、まだ一時間もある、9時からずっとこっうやって座っている、なにを血迷って二時間前に出たんだろっ俺・・・。

なぜ待ち合わせてるかって？

それを考えると溜め息が出る、いや別に嫌なことがあるんじゃないくて緊張と不安からくる溜め息だ、理由は少し長くなる。

「どうしてこうなった・・・」

それは試験が終わり、結果が返ってきた日のことだった。

木乃香から補習のお礼の電話がきたので電話越しに二人で話していた。

「義君、今回はホンマありがとな。」

「いえいえ、大したことはしてませんよ、それより5人の成績はどうでしたか？」

「それがなく、5人とも赤点ではなかったんやけどノルマは達成できなかつたみたいなん。」

「あー、そうですか。」

(そりゃそうだ、わざと高めに設定したからな。)

「あとせつちゃんはノルマ達成できたみたいやで。」

ほんわかと結構重要なことを口にした木乃香、

「マジですか!?!」

ノルマは決して取れないような点数ではないがそれでも高めに設定してあるのでかなり難易度は高い筈である、そのことから刹那の努力の程が伺える、

「あいつ、すごいな。」

ノルマを達成しないと剣術は教えないと言ったのは刹那に発破をかけるためについた嘘であるが、その嘘とバカホワイトの汚名返上という執念に素直に感心する義切に木乃香が話を続ける、

「ほんでな、ウチもノルマをクリアしたんやで。」

「えっ?」

ノルマはバカレンジャーにやる気を出させる為に言ったことであるが、確かに木乃香も補習に(刹那や明日菜の付き添いという形で)出ていた為ノルマの話は知ってた。

しかしそれはあくまでバカレンジャー基準で高めに設定したもので、木乃香のような成績優秀者には普通位のランクになってしま
う、まあそれでもお願いを聞くのはネギであってこちらではないの
で、義切は会話を続けた、

「まあ木乃香様には簡単だったでしょう。」

「せやけど、ウチはネギくんに頼みごとなんて、ないから義君にお
願いしてもええかな？」

なんだか凄い嫌な予感がしてきたが、まあ木乃香様なら無理難題は
言わないだろうと思いを承した、

「・・・いいですよ、何ですか？」

すると木乃香が言ったお願いとは義切の予想外の内容だった。

「一緒に買い物に行こう・・・か。」

そう、木乃香様の言ったお願いとは一緒に買い物しようというもの
だった。

そこで俺は緊張しちゃって二時間も早く家出ちゃったわけですよ。

ん？ちよつと待てよ、これってひよつとするとデートってやつなん
じゃ？

そうなると木乃香様は・・・ん？んん？？

「まさかなあ。」

こんなどつばにハマリそんなことを考え始めたら一回思考をリセットした方がいいな、自販機あるし飲み物でも買うか、

「オレンジがない・・・だと・・・?」

大体どの自販機にもオレンジジュースくらいあるだろ、
アンタでもいいんだが・・・、

よく見るとその自販機には際物のような飲み物しか置いてなかった。

抹茶コーラとか何だよ、だれが飲むんだよ。

しかし『抹茶コーラ』、なんか開拓者魂をくすぐるネーミングだな、
興味が湧いてきた、自販機にはもうお金は入ってる為ボタンを押せば『抹茶コーラ』が出てくる、

しかし本当にそれでいいのか?

他に探せばオレンジジュースなんてすぐ見つかる筈だ、こんな所で
冒険する必要なんて無い、

しかし、どうする?

探求心を満たす為に確実性を捨てるのか?

どうする・・・???

ピッ、ガコン

「・・・以外といけるなコレ。」

結局抹茶コーラを買ってしまったが悪くなかった。

そんなことしてたら時間十分前、やばいな、また緊張してきた・・・

「あつ、義君。」

なんと、十分前なのに木乃香様が現れた！

誘った相手を持たせない為に十分前に来るとは流石だ、

「待った〜？」

「いや、今来たところですよ。」

そんなテンプレな会話をしつつ木乃香様を改めて見てみた。

見なきゃよかった、幼なじみの鼻眞目抜きでも可愛いんだよ、また緊張してきた。

こんな可愛いなら女子校通ってたって男子がほっとかないだろ。
あ、そんな男子を刹那がほっとかないのか。

そんな俺の心中を知ってか知らずか、木乃香様は首を傾げた、

「どうしたん？」

「あ、いや、な、なんでもないですよ、木乃香様。」

やばい、顔が赤くなるのが自分でもわかる。
俺ってこんなヘタレだったか？平常心だ俺。

「むゝ、今日はその木乃香様とか敬語とか禁止やで。」

珍しくむくれてみる木乃香様、やっぱり可愛いなあ。
じゃなくて！今なんか重要なこと言ったな。

「えっ!？」

「だから、今日一緒にいる間は敬語は禁止や。」

「ウエツ!？」

予想外の言葉に声がうわずって本当に裏切られた人みたいな声が出てしまった。

「ちっちゃい頃は普通に話してたやん。」

「しかしですね……」

「義君」

「う、わかり……、わかった。」

結構頑固なところあるんだなあ、しかし喜ばしいことに更なる要望を言ってくれた、

「じゃあ名前で呼んでみて、様はなしやで。」

マジですか？様無しで呼ぶのなんていつぶりだろうか、

「早く、早く。」

そんな期待に満ちた目をされたら応えないわけにもいかないだろう、

「じ、じゃあ……このちゃん？」

「うん！行こう義君。」

ああ、なんか目眩がするいい笑顔、てかこんなじゃ刹那のこと言えねえな俺。

木乃香様、おっと今日はこのちゃん、が俺の手を引つ張る、それに引きずられ気味についていく俺だった。

ついで行く間『この娘って意外と腹が黒いんじゃないか？』とか思っただのは内緒だ。

……それからは何もなかった、普通に買い物してただけだし、例えば……

「見て見て義君、これ似合うかな？」

「おお、似合う似合う。」

「じゃあ「うち」は？」

「うん、ん？」「うちの帽子と合わせれば・・・」

とか、街に知ってる顔がいたから見つからないように変装したり・・・

「・・・！？」

「義君どうしたん？」

「いや、ちょっと待ってて。」

・・・

「ありがとうございます。」

「ふう、サングラス掛けてれば大丈夫だろう。」

「でも髪型とかも変えないとバレたりせーへん？」

「あっ・・・」

とか、ちよつと目を離したらこのちゃんが不良に絡まれるし・・・

「なあいいだろお、彼女お？」

「いやあ、今日は人と来てるんで？」

「いいだろお、そんな奴ほつといて。」

「あんた何やってんだ？」

「あ？なんだてめえ？」

「義君！」

「なに？この子のツレ？残念、彼氏がいるなら引くしかないわ。」

「・・・」

「・・・なんて言うわけねえだろおが！！！」

ガッ！

「がはっ・・・」

「相手の実力も見れないで喧嘩するなんて下の下だな。」

「く、くそっ、覚えてやがれよ！」

ダッ！

「義君、ありがとう！」

「いやいや、当然のことをしたまでさ。」

その後その不良の悲鳴が聞こえた気がするが多分気のせいだろう。
一日中監視なんかされていてたまるか。

・・・あれ？何だかんだで満喫してんじゃん俺！？

てな感じで一日遊んだ俺たちは日も傾いてきた最初の待ち合わせ場所に戻って来た、

「あゝ、今日は楽しかった。」

「それは何よりだ。」

今はベンチに二人で座ってる、やばいなさっきまで平気だったのにまた緊張してきやがった。

「あ、さっき義君にプレゼント買ったんや！」

「へ、俺に？」

「うん、気に入ってくれるといいんやけど・・・」

そう言いつつ長細い箱を渡された、開けていいかと目配せすると「

のちゃんは頷いたので開けてみる、するとそこには派手すぎない銀色のネックレスが入っていた。

「これを、俺に？」

「うん、どうかな？」

なんか色々と言葉にならない、今すごく感動してる、涙腺が崩壊しそう。

「ありがとう、大切にする。」

だから笑顔で返してあげた、

「よかった〜。」

不意にこのちゃんが顔を近づけてきた、え？何、何すんの？

瞬間柔らかい何かが頬に当たった、それが唇だと理解するのにかなしの時間がかかった、そんな予想外のこと呆けている俺から顔を離れたこのちゃんの顔は夕陽に照らされているからか赤かった。

「えへへ、それは今回のお礼、じゃあ義君、今日は楽しかったで！」

まくし立てる様に言うところのちゃんは荷物を持って帰ってしまった。

俺はまだ状況が理解できず呆けていた。

この後、正気に戻って帰る頃には辺りは暗くなっていて、帰ったら
レイにたらく文句をいわれたが一切頭に入って来なかった。

第10話 くデート？く（後書き）

あれ？なんか最近刹那が空気な気がするなあ、
まずいなあ。
もっと出番増やしてあげなければ！

第11話 く 殲滅の射手く (前書き)

作者は受験生なため中々時間が取れず、塾への電車の中でコツコツ
少しずつ書いていたので遅くなってしまうました。

今回は久しぶりにOGキャラとのバトルです。

戦闘描写は苦手ですが、それでも楽しんでいただければ幸いです。

第11話 く殲滅の射手く

パチン、パチン……

碁石がに碁盤上に置かれる音が響く、

片方の小柄で金髪の少女、エヴァンジェリンが口を開く

「で、今日はなんだ？」

その言葉に向かいに座っている赤髪の少年、義切は答える

「なんだって何が？」

「なにか用があつたから来たのではないのか？」
すると義切は何か思い出したかのように頷く、

「ああ、用事ね、……暇だったから来ただけだ……」

「……貴様……」

エヴァンジェリンの視線が鋭くなる、

「いいじゃないか、こうやってこの前の続きを打てるだからさ。」

「まあ貴様はいい、しかし……」

エヴァンジェリンは義切の後ろに立っている少年、風原 一騎に視線を移す、それに気付く義切、

「こいつは俺の親友の風原 一騎だ。」

そついうと一騎は一礼する、

「そういうことを聞いているんじゃない、何故そいつがいるのかと聞いているんだ。」

「ここに来る途中で会ったから連れてきたんだ、こいつは囲碁上手いな。」

パチン、・・・パチン・・・

会話をしながらも手は休めない二人、そして・・・

「ぬっ、これは・・・」

その局の決着が着く、結果は義切の負けだった。

「ハハ、これで2勝1敗で私の勝ち越したな。」

「ありやく、どこを間違えたかね。」

「三手前だな、あそこはな・・・」

勝利し、笑っているエヴァンジェリンと对象的に悔しがっている義切に助言を与える一騎、

「貴様、風原 一騎と言ったな、一局どうだ、上手いんだろう?」

「嗜む程度には……。」

義切に勝って上機嫌なエヴァンジェリンは一騎に勝負を挑み、一騎も承諾する。

義切は席を立ち、一騎がそこに座りエヴァンジェリンと対局する。

……

「ありがとうございました。」

「なん……だと……。」

一騎の圧勝であった結果にエヴァンジェリンは愕然としている、

「相変わらず強いな。」

感心する義切がふとエヴァンジェリンを見ると齒軋りしていた、

「クッ、もう一回だ！」

「わかりました。」

「おいおい、俺にもやらせてくれよ。」

「もうこんな時間か。」

「結局一度も勝てなかった……だと……」

義切が時計を見ると、もう6時を回る頃だった。

あの後相手を変えながら対戦していた結果、一騎は全勝、義切とエヴァンジェリンは同じくらいの成績であった、

「ん、帰るのか。」

帰り支度をしている義切と一騎、

「ああ、夕飯の支度しなきゃならないしな。」

「そうか、また来い、暇な時は囲碁くらい付き合ってやる。」

「機会があれば。」

「またお越してください。」

茶々丸に見送られ、エヴァンジェリン宅を後にする二人。

義切と一騎が帰った後、エヴァンジェリン宅……

ピクリ……

「ん？」

「どうしました、マスター？」

何かを感知したエヴァンジェリン、

「侵入者か・・・、まああいつらに任せておけば大丈夫だろう。」

そんなことはつゆ知らず義切と一騎は帰路を急いでいた。

結構遅くなったな、あたりはもうだいぶ暗くなってきてる。

時計を見てみるともうすぐ7時を回ろうかという時間だ、早く帰って夕飯作らないとレイのやつ五月蠅いからな。

「カズ、スーパー寄るか？」

「ああ。」

「それなら、そこまで一緒だな。」

カズに確認を取ると、進路をスーパーへ向ける、暫く走っていると少しの違和感を感じた、急ぎ足の足音に混じって金属が何かに当たる音が聞こえる。

あたりを少し見回して違和感の元凶を見つけると直接聞いてみることにした、

「なあカズ、ちょっといいか？」

「なんだ？」

「剣道部だから竹刀入れを持つてるのはわかるんだが、なんで竹刀と一緒に真剣まで持ち歩いてるんだ？」

「ああ、それはな……」

そこで新たな違和感を感じる、周りに人が見当たらない、いくら買い物時から外れているにしてもまばらに人が通る道だ、全く人が居ないとなると可能性が絞られる。
カズも不審に思ったのか二人で背中を向けあい周りを警戒する。

「……こういう事があるからだ。」

「……なるほど。」

しくじったな、人払いの結界が張ってあるのに二人して気付かないとはな、カズと違って俺は何も持ってないから雑魚なら問題ないが・

そんなことを考えているといつの間にか囲まれていた、しかも囲んでいるのは見覚えのある人型の機械、

「こいつらは!?!」

「知っているのか？」

「シャドー……ミラー」

「こいつらが……」

木乃香様誘拐事件の後、カズには犯人、つまりシャドーミラーについて話していたのですぐに話が通じた。

シャドーミラーとなると臙火を持っていないのは非常にまずいな、通じるかどうかかわからないがレイに連絡して持ってきてもらうか。携帯を取り出してレイの携帯へ電話を掛ける、

p r r r r r r

よし、つながった！

後はレイが出てくれればいい、電話を掛けている途中も周りへの警戒は怠らない。

p r r r r r r

なかなか繋がらないな、まさか . . .

その頃、義切家 . . .

p r r r r r r

レイの携帯電話の着信音が鳴り響き義切からの着信を知らせるが、当の持ち主は . . .

「 Z z z」

熟睡していた。

そのうち携帯の着信音が止るが、それに気づく様子もなくレイはまだ夢の中だった . . .

携帯を掛けるのを止め、握りしめる、

「駄目だったか。」

「レイのやつ、寝てやがるな？」

仕方ない、今日はカズもいるし何とかなるだろう。

覚悟を決めて徒手空拳で構えると同時にカズも竹刀入れから刀を取り出して鞘から抜いて構える。

「雑魚だけっていうのは考えにくい、どっか近くから様子を観てるはずだ、用心しろよ。」

「フ、徒手のお前こそな。」

そう言うと二人で別方向の機械人形へ攻撃を仕掛ける。

機械人形の主な攻撃方法は腕から発射される魔力砲が主だ、格闘も行うことができるが魔力砲に比べると脅威は大分下がる、よって一気に近づいて必殺の一撃を叩き込むのが一番手っ取り早い。接近するのを阻止しようと打ち出された魔力弾を避けながら至近距離まで踏み込み、練った気力を集中させた右手を叩き付ける！

「念動集中、破っ！」

ガッ！

拳が命中し、攻撃の衝撃は機械人形の装甲を貫いた。

「……なーんてな。」

数m吹き飛んだ機械人形は地面に叩きつけられて動かなくなった。

「はあっ！」

カズが刀を一閃すると機械人形は真つ二つになる、向こうはまあ心配無いな。

などと少し余所見していると残りの機械人形が攻撃してきたので、それを避けてカウンター攻撃で仕留める。

「てりゃ！」

「ふんっ！」

お互いに最後の一機を撃破し、周囲を確認するが増援が出てくる気配はない。

「終わったか・・・っ!？」

そう言っつて近づいてくるカズだったが、何かを察知して足が止まる、俺も感じたその気配、気配の方へ視線を移すと、そこには青髪の男が立っていた。

「フッフ・・・」

「貴様・・・イングラム!？」

カズと俺は咄嗟に構え直す、イングラムは不敵に笑っていた。

「上出来だ、不死鳥に翼籠、良いサンプルが手に入りそうだ。」

「貴様、何を言って・・・何!？」

気付くと二人の足元に魔法陣が描かれていた、抜け出そうとした時にはもう足が動かなくなっていた。

「くそつ、拘束魔法か!？」

「気づかぬとは、不覚!」

くそつ、こんな所でアクセルなんかが出てきたら・・・その焦りが伝わったのかイングラムは笑う、

「安心しろ、今日は私一人だ、しかし・・・」

イングラムが指を鳴らすと後ろから機械人形が出現し二人の首筋に針の様なものを刺してきた。

「っ!?!?何をするつもりだ!」

「なに、貴様等の血を少し分けてもらっただけだ。」

暫くした後、針が抜かれ、イングラムが再び指を鳴らすと跳躍魔法でも使ったのか、機械人形は消えた。

「俺達の血を使って何をするつもりだ!？」

「死にゆく人間が知る必要は無い。」

イングラムはそう言って手を前方にかざした。

「出でよ、R・GUN!」

「あ、あれは!？」

光に包まれたイングラムを見て驚くカズ、俺は見たことある光、あれは・・・魔装機だ!

光が収まるとそこには白と紫色の装甲を着けたイングラムがいた。

「フフフ・・・」

「くっ、絶体絶命か？」

動けない上に相手は魔装機、なんとか切り抜けようと拘束魔法の魔法陣を破壊できないかとカズに目で言うが渋い顔をされる。

(魔法陣を破壊するには暫くかかる、それまでに奴が攻撃しないはずがない。)

カズの目がそう言っていた、そうしているとイングラムが右手に持った銃をこちらにむけた。

「アクセルには悪いが貴様等にはここで消えてもらおう。」

すると、R・GUNの両肩の装甲の一部が外れた、空中で一つに合わさり大きな銃のバレルの様になったそれらはイングラムの持っている銃と合体した。

「メタルジェノサイダー高濃度圧縮魔力殲滅砲モード起動・・・」

メタルジェノサイダーと呼ばれた大型銃の銃口は確実に俺を捉えている。

肌がピリピリするほどの量の魔力がアレに集まっているのがわかる、あんなもの食らったら塵も残らねえ！

何か、何かないのか！？

「フッフ・・・、デッドエンド・シユート！」

打開策を必死に捻り出しているとポケットにあるものがあつたのを感じ出した、もう引き金は引かれている、向かってくる膨大な魔力を前に俺はそれを取り出して叫ぶ。

「来たれ」（アデアット）！！」

間に合え！

発射された魔力が義切に衝突し、爆発を巻き起こす、

「義！！」

一騎が叫ぶが爆発による煙で視界が悪く現状を把握出来なかった。

「フツ、あとは翼龍のみ・・・何！？」

勝利を確信したイングラム、だが徐々に煙が晴れて、何も無いはずの義切のいた場所には大きな盾の様なものがあつた。

実際あの高濃度圧縮された魔力を受けきった時点でそれはまさしく盾であつた。

「危ねえ危ねえ、間に合って良かったぜ。」

盾の陰から義切が現れる、

「心配を掛けさせてくれる！」

一騎は安堵の表情をしたが直ぐに真剣な顔に戻った。

「カズ、魔法陣を！」

「はぁあっ！」

一騎が溜めていた気を足から一気に放出し、魔法陣と地面を崩した、足が動くようになった二人は各々の武器を構え、改めてイングラムと対峙する

「大盾、それが不死鳥のアーティファクトか、それが見られただけでも収穫だが、R - GUNの戦闘データも取らせてもらう。」

「おし、こっから反撃だ、行くぜカズ！」

「応!!！」

そう言って二人はイングラムへ向かっていった。

第11話 く殲滅の射手く（後書き）

原作でのメタルジェノサイダーはR-GUNが大型銃に変形しますが、人があんな変形したら骨が粉々になりそうなので肩装甲と銃が合わさり大型銃になるという感じに変えさせてもらいました。

次回は早めに上げる予定です。

第12話 く斬艦刀く (前書き)

異例の早い更新です。

本気出せば結構早く書き上がるものですねWWW

第12話 く斬艦刀く

「うおおおー！」

メタルジェノサイダーモードを解除したイングラムの銃撃を避けつつ、一騎が一気に接近する。

「近づいてしまえば！」

それに対してイングラムは別段焦った様子もなく、R・GUNの背中に装着された厚い羽の様なものに左手を伸ばす、すると羽は背中を離れ、腕の装甲に装着されて魔力の刃を形成し、カタールのシルエットとなったそれで一騎の攻撃を受け止めた。

「何！？」

「R・GUNの闘いに距離は関係ない、ただ敵の屍が近いか遠いかの違いだけだ！」

次の瞬間、一騎のわき腹にイングラムの蹴りが直撃し、吹き飛ばされる。

ただの蹴りでも魔装機の装甲で必然的に威力も上がるので結構なダメージだろう。

「まだまだあー！」

「！？」

続いて義切が踏み込み、アーティファクトの盾を叩き付ける様に攻撃する、守る為の道具である盾による攻撃方法、俗に言うシールド

バツシュである。

「くっ。」

シールドバツシュは打撃攻撃の為、魔装機ではなく、中のイングラムに多少なりともダメージを与えることに成功し、イングラムは少しよるけながら後ずさりする。

「よし！・・・って、あら？」

「フ、今のは少し効いたぞ、だが！」

しかし実際のダメージは大したこと無かったようで、直ぐに体勢を立て直し、切りかかってくるのを防御する義切。

「くう、そちらさん随分装甲が硬いようぞ。」

「当たり前だ、前回の戦闘データを考慮してある、刀は通さん。」
空いていた右手の銃で義切の頭を狙った銃口が目の前に来る、

「うおわっ！」

身を翻し、何とか銃撃を避けると間合いを取り、一騎と合流する義切、

「カズ、いけるか？」

「問題無い。」

「何度来ても同じことだ。」

「そいつは……」

「どうかな!」

まずはカズが仕掛ける、今回は倒すことが目的ではない為、少し鏝
迫り合いをした後自分から飛び退く、

「何!？」

「義!」

前回の戦闘データを反映したから刀は通さねえだと？

「……ならよお!」

「その攻撃は効かん!」

イングラムはまたシールドバッシュが来ると思ったのか特に防御す
る気配は無い、俺は飛び上がり盾の持ち手を両手で持つとアーティ
ファクトの力を発動した。

持ち手の根元は盾の上側に付いている、それは蝶番が開く様に展開
し、完全に盾の上部まで来ると固定され、持ち手自体が伸びて柄と
なり、攻撃を受け止めていた逆五角形の本体は側面が鋭く敵を切り
裂く刃になり、盾だったそれは一瞬で大剣になった。

俺のアーティファクト、名をアンスウエラー、その能力は盾と大剣
の二形態に変形する。

「これなら、どおだあ!」

「大剣に変形しただと！？・・・クッ。」

イングラムは咄嗟に攻撃をカタールで受けるが、俺の全体重を乗せた渾身の一撃はカタールを真つ二つにする、

「なん・・・だと・・・」

「カズ！」

追撃はせずに後ろに飛び退く、そこに間髪入れずに攻撃を仕掛けるカズ、その手には刀ではなく大剣が握られていた。

一騎は一回目の攻撃の後、飛び退き、義切が攻撃する間に一騎の持つ刀、計都流参式秘剣斬艦刀、の柄に付いている引き金を引きながら捻る、すると柄が伸び、鍔が真ん中から二つに分かれる様に展開する、そこから液体化した金属が流れ出して刀身を包み込む様に両刃の大剣を形作る。

2mはあるつかというその刀身を作っている液体金属を魔力で固着させ完成する、斬艦刀の真の姿、それが一騎が持っている大剣の正体であった。

「チエエストオオオ！」

カズの一閃がイングラムに入る、斬艦刀の強力な一撃にR-GUNの装甲も耐えられなかったらしく、一部が碎けて火花が散っている。

「ぐああ！」

カズの地面のコンクリートを砕く一撃はイングラムをぶっ飛ばした。

吹っ飛ばされたイングラムはすぐに体勢を立て直すと追撃しようとした俺達を迎撃しようとして銃を撃つが、ダメージの影響で標準が定まらないのか大した脅威にはならない、

「クツ、ガン・スレイヴ！」

イングラムが叫んだ途端、イングラムから、正確にはR・GUNの腰部から六つの小さな鳥の様なものが飛び出した。

「何だ？」

ガン・スレイヴ、『従（銃）者』と呼ばれたそれは二人の近くまで飛んでくると魔力弾を撃ち出した。

「何！？」

間一髪で避ける俺達だがガン・スレイヴは細かく動き回りながら魔力弾を打ち出す。

「自律誘導兵器・・・ファンルか！？」

「隙だらけだ！」

ガン・スレイヴの攻撃を避けているところにイングラムからの銃撃が来る、それをアンスウェラーを盾形態にして防御するがその隙にガン・スレイヴが側面に回り込み直接魔力弾を撃ち込んでくる、

「ぐあ！」

一撃は大したこと無いが数を当ててくるので俺もカズも少しずつ消

耗していく。

「はぁ・・・はぁ。」

「クソツ、ちょこまかと！」

攻撃を受け続けて膝を着いてしまった俺達に見下すように笑うイングラム。

「不死鳥のアーティファクトと翼龍の一撃には不覚を取ったが・・・ガン・スレイヴの前ではこの結果か。」

「くっ、この・・・！」

「感謝するよ、貴様達のお陰で最高のデータを採ることが出来た、並みの相手ならばこうはいかん、その力に敬意を表してこの一撃で葬ってやるっ。」

そう言うとイングラムはメタルジェノサイダーを起動させてこちらに銃口を向けた、
あれは強力だが結構な隙ができる、なんとかピンチをチャンスに変えねえとな、
頭をフル回転させて策を練ってなんとか策を絞り出すのが成功するかはカズ次第だ・・・

「カズ、動けるか？」

「ああ、少し辛いかな・・・」

「そんなら・・・」

カズに咄嗟に閃いた逆転策を耳打ちすると、カズは頷いて斬艦刀を握る手に力を込めた、

「わかった、その策に乗ろう。」

「よっしゃ、じゃあ頼むぜ！」

そういつて俺はイングラムに向かって駆けだした、

「最後の悪あがきか、ガン・スレイヴ！」

ガン・スレイヴが向かってくるが予想通りである、

「去れ」（アベアット）」

直ぐにアーティファクトを引っ込めて上着の内側からゴールドを取り出してなんとかガン・スレイヴを二機撃ち墜とせた。

「ぬ、銃を持っていたとはな、しかしガン・スレイヴはまだある！」

残りのガン・スレイヴが一斉にこちらを向くが、これも予想通りだ、

「ハアア！」

こちらを向いてるうちにカズが攻撃し、一気に二機を墜とす、

「な・・・！？」

カズの攻撃に反応して残り二機がカズの方に向くが今度はまた俺が

残りの二機を撃ち墜とした、

「ククク、大した奴らだ、しかしチャージには間に合わなかった様だな！」

しかしメタルジェノサイダーのチャージ完了までには間に合わず、充填された魔力が撃ち出されようとしていた。さて、ここが正念場だ！

俺はイングラムに向かって走る、

「消え去れ、デッドエンド・シュート！！！」

”来たれ”（アデアット）！！」

アンスウェラー盾形態でメタルジェノサイダーの一撃を至近距離で受け止める、

「その負傷した体で受けきることはできまい！」

確かにこいつはきついな、けどなあ、こっちは最後の締めが残ってるんだ！持ってくれよ！

「うおおおおお！カズツ！！！」

「応っ！！！」

俺が攻撃を受けている影からカズが飛び出す。

「何、懐に！？」

これが策の締め、俺が囷になつて攻撃を受ける、その隙にその後ろからカズが飛び出し必殺の一撃を叩き込む。

「斬艦刀！一刀！両断！」

カズが斬艦刀を振りかぶりありつたけの気力を込めた一撃を放つ。

「チエエエストオオオ！！」

一閃、振り下ろされた斬艦刀はメタルジェノサイダーを真っ二つに破壊し、制御を失つた魔力が爆発を起こした。

「うわっ！」

「ぐ、ぬう！」

爆風により三者は別々に吹き飛ばされる。

メタルジェノサイダーはカズが破壊した、R・GUNは、イングラムはどうした？

そうして周りを見回すとR・GUNがヨロヨロと立ち上がった。

「まさか・・・これほどとはな、アクセルが拘るのも頷ける。」

相手も相当なダメージなのか足下がおぼつかない様子だ、畳み掛けるなら今しかない！

足腰に気合を入れて立ち上がる、カズも同じ事を思ったのかイングラムを見据えている。

「想像以上の力だな不死鳥、翼龍、まさかここまで追い込まれると

はな・・・、お互い満身創痍、ここは退くとしよう、元々戦闘デュータを採るだけのつもりだったからな。」

「クツ、待て！」

「逃がさん！」

「フフフ・・・ではまた会おう！」

イングラムは懐から出した魔法札を掲げると跳躍魔法によって消えた。

緊張感が抜けて傷の痛みが回ってきたのか義切と一騎は道の脇の木を背もたれにして座り込んだ。

「大丈夫か、カズ？」

「俺は大丈夫だ、お前の方が傷は酷いだろう。」

確かに傷ついた体で最後のメタルジェノサイダーの一撃を盾で受けたのは正直辛かった。

「しばらく動けねえな。」

「・・・ああ。」

p r r r r r

そんな時に俺の携帯に電話が掛かってきた。

誰だよこんなときに・・・ってレイかよ、ちょうど良い文句言ってるやらあ。

「あい、もしも・・・」

「なにをやつとるか！早く帰ってこんかい！」

文句を言う前に向こうから問答無用の先制攻撃、啞然としたが次の瞬間には怒りが湧いてきた。

「レイ、お前、帰ったら覚えてるよ？」

某所、シャドウ・ミラー拠点・・・

色々な機械が雑多に置かれてある研究室にて一人の女性、レモンが研究用の機材であろう端末を操作していた。

そこへ赤髪の男、アクセル・アルマーが入ってきた。

「レモン、イングラムから例のサンプルが届いたらしいな。」

「ええ、今はまだ準備段階だけど、じきに試験できるようにはなるわ。」

「成功するのか？」

アクセルのその言葉に目は画面から一旦離してアクセルを見るレモン、

「あら、どうしたの、この計画には反対してたのに成否を心配する

なんて。」

「フン、俺に決定を覆すことはできん、受け入れるだけだ、それに使える物は多いに越したことはない。」

「そうね、確率で言ったら75%位かしら……って何これ……」
「どうした？」

レモンの只ならぬ様子にアクセルも端末の画面を覗き込む、

「これを見て、こっちが翼龍のDNA、それでこっちが不死鳥のDNA……」
映し出された二つの図には明らかな違いがあった、

「これは……」

「不死鳥のDNAは複雑過ぎるわ、DNAの複雑さは個体差があって、稀に複雑な人もいるけれど……こんなの見たことないわ。」

「これが奴の強さの秘密だとも言うのか。」

「秘密の一つである事は間違いないでしょうね、ここまで複雑だと試験には使えない。」

「ならば翼龍だけでやればいいだろう？」

アクセルが背を向け研究室から出ようとするがレモンが声を掛ける、

「嬉しそうね。」

「当たり前だ、闘う相手は強いほど闘いがいがある。」

そう言うとアクセルは研究室を後にした。

第13話 〱麻帆良祭・準備編〱（前書き）

異例の高速更新その2です。

この話から麻帆良祭編に入ります。

第13話 〱麻帆良祭・準備編〱

ある多数のパソコンが陳列された部屋、その部屋は暗く、明かりは一台のパソコンが点いているだけだった。パソコンの前には一人の少女が座りキーボードを叩いている、それを見守るように少年が後ろに立っていた。

「本気でやるのか、超……」

超と呼ばれた少女は手を休めずに言葉を返す。

「無論ネ、そのためにこれまで準備してきたネ。」

「多くの人を……救うため……」

「そう、そのために君もこの時代に来たのではないの力ネ？」

「それは……そうだが……」

「やはり、協力はしてくれないか？」

「すまないが協力は出来ない、しかし、妨害もしない。」

「見届け役、ということかネ？」

「ただの傍観者さ、だからどちらに転んでも結果は受け入れるつもりだ。」

「わかたネ、今まで協力してくれて感謝するヨ。」

少年は踵を返し超と背中を迎え合わせにする、

「同志だからな、いや、だった、か・・・」

「無条件で協力してくれるのが同志ではないヨ、君は今でも私の同志ネ。」

「そう言ってくれるとありがたい。」

少年は出口へ向かうが、何かを思い出したように立ち止まった、

「・・・それと、俺は君の考えには大いに賛同してる、ただ、やり方に同調できなかったただけだ・・・恐らく、あの人も同じだと思う、・・・じゃあ。」

そう言うと、少年は部屋から出て行った。

部屋には超が一人だけとなりキーを叩く音が響く、超は少年に言われたことを思い出し、ふと手を止めた。

・君の考えには大いに賛同してる、ただ、やり方に同調できなかっただけだ・・・恐らく、あの人も同じだと思う・

超が口の端を少し釣り上げる、

「それはどうかナ・・・漆川クン？」

中間試験が終わると直ぐに麻帆良祭の準備に追われるようになり、学園内も比例して活気に溢れ出す。我が3年C組も例に漏れず右に左にの大騒ぎだ。勿論、俺も馬車馬の様に働いていた。

「義切、これはどこにやればいい？」

「ああ、それはこっちだ。」

俺は主に厨房周りの班だ、パーラーの一番重要な所でもあるので一番忙しいが、男子だけのこのクラスで料理が得意な奴が少ない為、俺が配置された。

ちなみにカズは力仕事系の班で、テーブルや看板にする板などをせつせと運んでいた。

そんな俺とカズの二人は顔や腕などに傷跡や絆創膏が目立っていた、勿論この間イングラムにやられた傷だ、最初はクラスの皆も心配してか物珍しさか傷について触れてきたが、準備が始まるとそっちに集中して触れなくなった。

レイや刹那等、俺達の仕事を知ってる人達はまだ心配してくれるが、気にするなと言ってあるからやはり触れることは少なくなった。

しかしあの後帰ったときのレイの反応は面白かったな・・・

傷だらけの身体を必死に動かして我が家に着く。

そこまで酷い傷はないが身体中に傷を負っていたため、動くだけで結構響く。

やっと着いたと玄関を開けると同居人の怒号がお出迎えしてくれた。

「義！今までどこをほつつき歩いてた・・・んだ・・・？」

怒りを湛えた表情をしながら玄関で仁王立ちして小学生が夜まで遊んで帰ってきた時の母親みたいなことを言っているレイだったが、ボロボロの俺を見るとみるみる顔色が変わっていった。

「な、なにがあつたんだ、傷だらけじゃないか!？」

「説明は後です、それより疲れた。」

家に帰ってきた安心感が疲れがどっと出てきたのでリビングのソファの上に寝転がるうとするのを止められる、

「手当てをしてくれるから寝るのはその後にしてくれ。」

とレイが傷の手当てしてくれるのだが、疲れが勝っている俺は寝ることしか考えていなかった。

「・・・寝かせてくれ・・・」

なんてことがあった、さらにあの後傷だらけの理由を話すと必死に謝ってたな。

刹那や木乃香様には下手に心配させないように仕事だと告げてシャドウ・ミラーの名前を伏せたがそれでも必要以上に心配してくれた。

何だか思ってる以上に俺は幸せ者なんじゃないか？
などと考えているとクラスメイトが声を掛けてきた、

「義、食材はどうする？」

「ん、ああ、食材なら必要な物をリストアップしてきてくれ、全部俺が選んでくる。」

「わかった。」

まあ何はともあれシャドウ・ミラーの事は遊撃士協会の日本支部に調査を依頼しておいたし、奴らは少数精鋭の組織みだから、イングラムを退けた事で麻帆良祭が終わるまでは大人しくしていくれるだろう、あまり楽観視はできないがな。

しかしあんまり気を張ってるのも疲れるから今は麻帆良祭の準備に集中しようか。

準備は滞りなく進み、遂に麻帆良祭前日となった、皆が効率よく動いてくれたお陰で内装、外装共に出来上がっているため、やり残したことはないかチェックしてる段階だ。

料理班は店を出す料理の仕込みという一番重要なところが残っている、しかし他の料理班の連中は部活などの出し物の方へ回ってしまいい、実質俺一人で作ってるようなものだった。

そこへ仕事が全て片付いたのかカズが入ってきた。

「義、学園長が読んでいるぞ。」

「学園長が、なんで？」

厨房には俺達、所謂魔法生徒以外の生徒もいたためヒソヒソ話にな

るがほかの奴らは気にしてない様子だった、

「なんでも麻帆良祭中の注意事項があるから、魔法先生や魔法生徒を集めているらしい。」

「それは絶対行かなきゃ駄目か？」

「できるだけ来て欲しいと言っていたが・・・」

学園長の呼び出しなら重要な話を話すのだろうが、今ここを離れると仕込みが十分に出来なくて下手をすれば明日に支障が出るかもしれない、それは好ましくない、参加が自由なら今回は悪いがカズに行ってもらおうか。

「・・・カズ、悪いんだが代わりに行ってきてもらえるか？」

「そう言うと思った、まあ料理の仕込みがあるならしょうがないか。」

「悪いな、話の内容は後で教えてくれればいいから。」

「わかった。」

そう言うとかズは厨房が出て行った。

さて、俺は仕込みを頑張りますか。

まあその後すぐに他の料理班が帰ってきたので行くところと思えば行けたのは秘密だ。

仕込みが終わったので休憩していると携帯電話にメールが入ってる

ことに気付いた、カズか？レイか？
取り敢えず新着メールを見てみると、知らないアドレスからのメールだった、何かの手違いでこっちに来たのか？
しかし本文を見ると手違い等ではないことがわかった。

遊撃士協会 B 級遊撃士

漆川 義切殿

話があるので今夜 6 時に麻帆良祭実行委員会の飛行船に乗って頂きたい。

そう書いてあった、イタズラかと思ったが、学園内で俺が遊撃士であることを知っている人間は少ない。

次に罫かと疑ったが麻帆良祭実行委員会の飛行船と書かれていたから恐らく学園の関係者だろう。ならば学園内で俺を遊撃士だと知っている人間が俺の知らない所に居るってことだ、ならばそいつを確かめるという意味でも行った方がいいかも知れない、話というのにも興味が出てきたしな。

そうと決まれば善は急げだ、クラスメイトを捕まえて用事ができたので少し居なくなると告げると家に戻り、万が一の為最低限の武器を持つと飛行船の発着場へ向かった。

飛行船に乗るってところでカズから電話が掛かってくる。

「義、今どこにいるんだ？」

「あー、ちょっと用事ができてな、外にいるんだ。」

「前夜祭が始まるぞ、早く帰ってこい。」

「ああ、用事が終わったらすぐ戻る。」

「そうだ、さっきの会議の事をついでに話しておこう。」

「頼む。」

そしてカズから会議の内容を聞いた。

22年に一度、世界樹の魔力が高まり、願い事（特に告白など）が叶ってしまう為、魔法先生及び魔法生徒は麻帆良祭中の世界樹前広場にて一般生徒の告白を阻止しなければならないこと。

「まためんどくさい事になってるな。」

「まあ世界樹前広場以外での告白は大丈夫らしいからどうにかしてエリアの外に誘導すればいいらしい。」

「ふーん。」

告白の阻止とか本当に面倒だなと思っているとカズが思い出したように話を付け加えてくる、

「ああ、それと女子中等部3-Aの超鈴音という生徒は問題児生徒で良からぬ事を企んでるそうだから注意するようにとのことだ。」

「ん、わかった。」

「話はそれだけだ、早く終わらせて戻って来いよ。」

そう言つと電話は切れた、携帯電話をしまい、話について考える。

超鈴音か・・・確か大学の機械工学部にも入ってる天才って話だが、良からぬ事ねえ・・・

そんなことを考えていると後ろから誰かが近づいて来る、前夜祭をやっている今飛行船に乗っている人は少ない、それに気配が一般人のそれではない、ならば後ろにいるのが呼び出した人間で間違いないだろう。

「あんたが俺を呼び出したのかい？」

振り返らずに後ろの人に問う、

「フッフ、いかにもネ。」

特徴的な話し方が気になり振り向くとそこにいたのは……

「超……鈴音！」

そう、先程問題児生徒と言われていた超 鈴音であった。

「あんなメールでよく来てくれたネ、漆川 義切クン。」

そう言いながら超は不敵に笑っていた。

第13話 〱麻帆良祭・準備編〱（後書き）

いやあ、麻帆良祭編はかなり長くなりそうです。

どうぞ生暖かい目で見守ってやって下さい。

〱 〱 〱

第14話 く計画と葛藤とく（前書き）

はい、宣言通りに描き上げることができました。

では、ごんごん。

第14話 く計画と葛藤と

「・・・ただいま。」

「おかえりい。」

玄関から家上がり帰宅を報告すると、気のない返事が返ってくる。いつもならばここでレイと少し話してから部屋に戻るのだが、今はそんな気さえ起きなかった。

俺のいつもと違う様子を心配したのかレイが声を掛けてくる、

「義、どうかしたのか・・・？」

「・・・あ、いや、少し疲れただけだ。」

咄嗟に嘘をついてしまった、確かに少しは疲れているがそれが原因ではない。

部屋に戻り、机の脇に鞆を置いて椅子に座り込む、あの時、超鈴音の話聞いた後からたった一つのことしか頭に浮かばなくなっていた。

「あんなメールでよく来てくれたネ、漆川 義切くん。」

超鈴音の様子から敵意は感じられない、だからこそ警戒を強めた、なんせ学園側から問題児なんて言われてる生徒だ、腹の底でなに考えてるかわかったもんじゃない。

「まあ話つてのが気になつたし・・・」

「なぜ遊撃士のことを知ってるのか・・・力？」

「・・・ああ。」

遊撃士は魔法世界が主な活動場所であり、こちらの世界では表立って動くことはない、勿論ここ、麻帆良学園のように魔法に関係する場所ならば活動する場所があるがあくまで秘密裏であり、やはり一般人で知っている人はほとんど居ないだろう。

「なに、チヨット調べたら出てきたネ。」

「そのチヨットが普通の人のチヨットじゃないんだよなあ。」

目を細め超を睨む様に見る、だが超の様子は変わらない、

「簡単な話ネ、私が魔法を知っている、それで説明にならないかな？」

「なんだと？」

仕事の関係上俺は学園長から全魔法先生・生徒のデータをもらつてるし、頭に入ってる、その中に超 鈴音の名前はなかった、しかし遊撃士・魔法、この二つの単語を知ってるならば超の話は事実である可能性が高いな。

さらに魔法を知ってる、又は使える生徒が何やら企んでいるならば問題児視されるのも頷ける、

「その話が真実だとして、それで話つていうのはそれに関連した

「ことか？」

「疑わないの力ネ？」

「疑うより受け入れた方が楽だからな。」

「話が早くて助かるネ。」

それでもまだ警戒を解くことはできない。

超は笑顔を崩すことなく話を続けた、

「私の計画に協力して欲しいネ。」

やはり何か企んでいたらしい、その計画とやらの内容如何によつてはここで捕らえるべきか？

「計画だと？おいおい、俺はあんたから見れば対抗するべき相手だぜ、そんな相手に協力を申し込むっていつのか？」

「重々承知してるネ、むしろ相手だからこそネ。」

そう言う超の目は本気だ、面白い、どうやって俺を引き込もうとするのか聞くのも悪くない、

「それに内容や理由を聞かずに協力する気にはなれないな。」

「・・・内容くらいは教えてもイイネ、それは・・・魔法の存在を世界中にバラすことネ。」

「な・・・に？」

何を言い出すかと思っただらとんでもないことを言い出した。

魔法の存在を世界中にバラすだと？

確かにとんでもない企みをしていたようだが、あまりに現実味の無いことなので呆気に取られた。

もし仮に本気で魔法をバラすつもりでも、世の魔法使い達もバカじゃない、それに対する対策なんていくつもあ

「何を言い出すかと思えば魔法をバラすなんて、そんなことできるわけ・・・」

そこでカズからの電話の内容を思い出す、22年に一度、世界樹に魔力が満ちて外に放出される、その魔力によって願い事、特に告白の成功率が100%になるから告白を阻止するように言われたんだっけか。

願い事は即物的なものは駄目らしい、ならば告白によって好きでもない人を好きだと思わせるのは、強制認識系の魔法だと考えられる、超が何かしらの手段を講じて世界樹の魔力、魔法を拡散できるとすれば・・・

「まさか・・・!？」

超は笑っていた、俺の考えが当たっているようだ、

「フッフ・・・、本当に話が早くて助かるネ。」

「まったく、とんでもねえことを考えるな。」

例えば只の一般人が一人だけ魔法は実在すると本気で信じていたと

しても、その意見は少数意見として多数意見に握りつぶされる。またある程度の規模までならば魔法使いも対応できる、しかし世界中の人々全員が一斉に魔法は実在する、いや世界中ならば実在するかもと思わせるだけでも人々は真相に辿り着くだろう、しかし

「だが、そんなことをすれば世界中が混乱するぞ。」

そう、魔法が認知されることにより世界中が混乱することは必至、更に魔法を使える人、使えない人の間にも軋轢が生まれるだろう、そのことから魔法をおいそれとバラさせる訳には行かない。

「それに対する対策もちゃんと考えてあるヨ。」

計算に計算を重ねた計画なのだろう、たしかにその場しのぎの嘘っ
て感じではない、ならば根本的な部分を聞こう、

「それに、何故そんなことを企む？」

今までに魔法を公表しようとした人は少ない、理由は前述したこと
と何より魔法を使えるという優越感があるからだ。
超が何故魔法を公表しようとするのか、それが一番気になるところ
だ。

するて超はこれまでで一番真面目な表情を作った、

「それは・・・多くの人々を救うためネ。」

「多くの人々を救うためだと？」

「そうネ、遊撃士の義切君ならわかると思うネ、魔法を使えること
によってより多くの人々が救えるダロウ。」

「っ、それは!？」

遊撃士は基本的に魔法世界が活動場所だが、こちらの世界でも秘密裏に活動はしている、なぜ秘密裏かというと遊撃士達は基本魔法使いや魔法を知っている者達であり依頼も必然的に魔法関連なものが殆どだ、そのため魔法の情報が悪戯に漏洩しないように秘密裏という形を取っている。

しかしごく稀に一般人の生活圏内での依頼も入ってくる、そうなる
と魔法を使えない以上常人としての範囲で依頼をこなさなければならぬ。

しかし魔法が世界中に認知されればこちらの世界でも遊撃士達は表立って動けるようになり、常人では救えない者も魔法を使えば救えるようになる、もしかしたら今現在世界で起こっている紛争や内乱を鎮めることだって出来るかも知れない。

そう考えると超の計画は間違っではないんじゃないか?認められる気がする。

その考えが頭の中に出てくるが、それでも超に賛同しきれないのはやはり前述した世界中の混乱が懸念されるからだ。

「・・・・・・・・。」

「それに、魔法が認知されるということ八、それに準ずる魔族も認知されるといふことネ。」

「な・・・に!？」

「それは君自身、そして君の大切な人を護ることはならない力ネ?」

「それは……。」

魔族が認知されるってことは、少なからず魔族と人間のハーフだって認知されるってことだ、もしそれによってハーフが魔族、人間の両方に認められるなんてことになれば……。

「……少し……考える時間をくれ……。」

「フフ、麻帆良祭中に答えを出してくれば構わぬネ。」

そして今に至る。

超の言葉に揺さぶられ、その場答えを出すことが出来なかった俺がしたことは先送りであった。

確かに考える時間は欲しかったし、頭の中を整理する必要もあった、しかしそれでも答えは出なかった。

魔法をバラすべきだという意見と隠すべきだという意見、どちらも正しいが故に間違っているとも言える、それに魔族の話もある、俺なんかはいいが刹那は少なからずハーフであることについてコンプレックスを抱いている、神楽坂さんやネギ先生、それに木乃香様に打ち明け、認められたから随分マシになったみたいだが根本的な部分はそう簡単に払拭できるものじゃない、そこで魔族が認められるようになればコンプレックスを気にしなくてもよくなるんじゃないかという考えが頭の中にある、だから答えが出せずに時間が過ぎていった。

そんな時俺の携帯電話の着信音が部屋に鳴り響く、携帯を手に取り、通話ボタンをおした、

「もしもし、兄さん？」

携帯電話の向こうから聞こえてきた声の主は、よく知る女の子だった。

「ああ、桜花か。」

漆川 桜花、名前の通り俺の一つ下の妹だ、血は繋がってないが。

「明日から麻帆良祭でしょ？私明日行くからね。」

「おう、今年も来るのか。」

桜花は去年も一昨年も麻帆良祭の俺のクラスに来る、来てくれる分には嬉しいし構わないんだがクラスの奴らが茶化してくるんだよなあ。

「うん、・・・兄さん？」

「ん、なんだ？」

「なにか悩み事でもあるの？」

電話越しの声の調子で判断したのだろうか、桜花は俺の現状を言い当てた、少し怖くなる、

「お前は相変わらずそういつとこに鋭いな、ちよっとな・・・。」

「仕事のこと？」

「・・・まあな。」

「あのね、兄さんが私を助けてくれたのは今思うととっても感謝してるんだよ?」

桜花は俺が仕事中发现つけて保護した身よりの見つからない子だった、その時の桜花は何があったのか誰とも口はきかなかったが、保護したからか俺から離れようとしなかった(そんな俺でも必要以上の事は話してくれなかった)。

そこで気を使ってくれた詠春さんが手を回して桜花を俺の家族というようにして迎えてくれた。

その後段々周りの人とも会話するようになり、性格も明るくなっていった(ただ、それに比例するかのように俺への懐き具合も上がっていった)。

「あの時兄さんは打算で私を助けたの?」

「んなわけねえだろ。」

「でしょ、なら悩んだ時は・・・兄さんのやりたいことをやればいいと思うよ。」

桜花のその一言を聞いた瞬間何か胸のつかえが取れたかのように頭の中がクリアになった。

俺のやりたいこと・・・か、ならば俺のやることは決まっている。

「そうか・・・そうだな、桜花。」

「ん、何?」

「ありがとうな、あと特別に明日は麻帆良祭一緒に回るつか。」

今までクラスの出し物の仕事が忙しくて桜花と一緒に回ったことがなかった、今回のパーラーならある程度仕込みを終えれば時間も取れるだろう、アドバイスしてくれた我が妹へささやかなお礼をしてやろう、

「え、本当!？」

「ああ。」

はしゃぐ桜花をよそに決意を固める、

俺のやりたいこと、そうだ、やりたいことをやればいい……。

第14話 く計画と葛藤とく (後書き)

最近寒くなってきましたね。

先日私の部屋にある温度計見たら室温8℃になってました。

家の中の温度じゃねえ！()()。()。()。()。()

寒くて寒くて勉強しないで布団にくるまってましたwww

第15話 く麻帆良祭・一日目・? (前書き)

宣言より少し早い更新になりました。

第15話 〱麻帆良祭・一日目・？〱

一夜明け、ついに麻帆良祭開催日となった。

麻帆良祭は麻帆良学園全体を使って行われる催しで近所では割と有名なイベントだ、学園の生徒の家族、友人は勿論、他校の生徒や一般人まで色々な人まで来る一大イベントだ。

クラスや部活、同好会などの出し物で得た利益の何割かは生徒の手元に入ってくる、なので生徒は出し物に対して気合を入れる（勿論ただ行事が好きだからなど色々な人がいるだろうが）。

活気は活気呼び、結果、この一大イベントを起こす原動力となる。勿論俺のクラスも気合十二分に今日まで準備を進めてきた、さらにクラス出し物であるパーラーは食べ物という需要が100%見込める出し物は利益を得るチャンスと言うことで多分に気合を入れていた。

かく言う俺も料理の仕込みを家でギリギリまでやっていたため珍しく登校時間ギリギリの登校だった、昨日桜花と麻帆良祭を回ると約束したので仕事を抜ける分は多めに用意しなければならなかったからだ。

学校に着き、教室の扉に手を掛けるが教室内の様子がおかしいことに気付く、静かすぎる。

学園祭が始まる朝は一日目の中夜祭の次にテンションが高いのがお決まりであるが、今教室内からは五月蠅いぐらい騒ぐ声どころか物音さえ聞こえない。

入らないという選択肢がない以上、開ける時間が早いか遅いかの違いだけなので普通に扉を開ける、すると

「・・・黒だよ、真っ黒・・・」

教室内は思わずそう呟いてしまうほど沈みきった雰囲気だった、教

室中を見回してもただ一人を除いて皆うなだれていた。唯一の生き残り、カズが俺が入ってきたのに気付くとこちらに近づいてきた、

「来たか義。」

「どうしたんだこれ？」

「ああ、それがな・・・」

カズの話によると初めからこんな雰囲気ではなかったらしく、最初は皆テンションが高かったらしいが、ある生徒が言った

「そついえばパーラーってさ超包子とジャンル被らねえ？」

この一言が引き金に一気にこんな雰囲気になったらしい、確かに耳を澄ましてみると

「料理研究会がやってる超包子にかなうわけねえよ・・・」
などと皆小声でそんなことを呟っていた。

「えっ、そんなこと気付いてたんじゃないのか？」

「俺も最初からそのつもりでやってるものだと思っていたんだがな、素で気付いていなかったみたいだ。」

皆に聞こえないように小声でしゃべる。

俺とカズ以外からすればキン肉マンもビックリな上がってるところからの落っことしだろう。

しかしまあなんと間抜けなことか、対抗勢力なんて一番最初に気付くことだろうに。

「なんとかしてくれ、正直この雰囲気は耐えられん。」

「え〜!?!」

などと言ってみたが確かにこの雰囲気の中には長く居たくないし、なによりこのままでは麻帆良祭にも響く、ってか我がクラスが機能しなくなる、それは困る、

「はあ、しかたねえ。」

一つ溜め息を吐くと教卓まで歩いていくと空気を吸い込み、教卓を思い切り叩いた、

「おい、お前ら何へこたれてやがる!!」

教卓を叩く音と大声によりうなだれていたクラスメイト達がこちらを向く、

「何ってお前、俺達みたいなのがちょっとパーラーやったところで超包子にかなうわけないぜ。」

言葉を返せるだけダメージが少ない奴がそう言った、

「だからって鼻から諦めんのか、これまでの準備全て無駄にするつもりか?」

皆の目に微かに光が灯ってきたが、まだうなだれてる奴もいる、

「だって超包子には・・・」

「それがどうした！よそはよそ、うちはうちだ、なぜベストを尽くさないのか！絶望するのは客が来なかった後でもいいはずだ！！」

「・・・！？」

だいぶ顔に精気が戻ってきたあと一押しだ、

「それに超包子を超える料理の一つや二つ、俺が作ってやるよ！！」

「・・・そうだ、俺達には義切がいる、それにここまで準備したんだ、やるっきゃねえよな・・・」

「諦めるには・・・まだ早いか・・・」

よし、とどめの一撃だ、

「奇跡を見せてやろうじゃないか、野郎共！」

「！！オオオオー！！！！」

クラスの皆の心が一つになった瞬間であった。

その後先生が入ってきた時には異常に気合の入ったクラスメイトを見て軽く引いていた。

俺の説得？のおかげでなんとか気合を取り戻したクラスメイト達が客引きを熱心にやってくれていることにより、お客は入ってきていた、まだまだ始まったばかりだから数は多くないがしょうがないことだ、後は勝負時の昼頃までにどれだけ良い評判を流せられるかが鍵だ、最悪今日呼び込めなくても明日、明後日入ってくれる可能性がある。

俺が一番早い時間にシフトを入れてもらった、昼前には終わってしまうが桜花と麻帆良祭を回る約束なのでしょうがない、次のシフトの人に頑張ってもらおう。

「じゃあ俺はちよっくら用事あるから。」

シフトが終わって、次の人に細かく指示を出した後、失礼させてもらっ、

「義切居なくなるのか、昼頃は辛いなあ。」

次のシフトの担当が呟いている、

「悪いなこの用事は外せないんだ。」

「なんだ、デートかあ？」

「・・・まあ、そんなところだ。」

桜花とは校門前で待ち合わせているので向かうと、校門に寄りかかる桜花を見つける。

桜花はこちらを見つけると満面の笑みで手を振る、

「兄さん!!!」

大声で呼ぶから周りの人がこちらを向く、恥ずかしいからやめて欲しいんだが。

「おいおい、あんまり大声あげるな、恥ずかしいだろ。」

「だって兄さんと会うの久しぶりで楽しみだったから・・・」

そう言っつて少し残念そうな顔をする桜花。

俺は普段、麻帆良に居て夏休み等は遊撃士の仕事があるため色んなところに出張するため、京都に帰れることは稀だ、その間桜花は基本的に一人（向こうの学校の友達は勿論いるらしいが）なので、気が向いた時に電話してはいるが、やはり寂しいというのもあるのだろう、たまの我が儘くらい聞いてやるのが兄の甲斐性というやつだろうか、

「そうか、・・・まあそれはいい、折角遠いところを来たんだ、回りたいところとかあるか？」

「うん、待つてる間に全部決めておいた!」

そう言っつと途端にパァツと笑顔になりはしゃぎ始めた。
まったく元気な妹様だ。

その後二人で色んなところを回った。

途中昼食時に桜花がアーンを強要してきたり、同じクラスの奴から

隠れたり大変だったが、たまにはこうゆうのも悪くない。

「ちょっと待っていてくれ、トイレ行ってくる。」

「うん、わかった。」

一通り桜花が行きたがっていた出し物を回りちょっとトイレへ行くことにする、

「オ？義切クンネ。」

「超 鈴音……。」

「

第15話 く麻帆良祭・一日目・? (後書き)

ここまでくるとなんかもう一気に書きちゃおうかな、と思うことがありますが、なかなか時間って取れないですね。

第16話 く麻帆良祭・一日目・? (前書き)

大体二週間に一話のペースが習慣付いてきました。

楽しみにしていただいていたければ幸いです。

第16話 く麻帆良祭・一日目・？く

「おかえり、兄さん。」

「悪い、待たせたな。」

少し待たせて帰ってきた俺を嫌な顔一つせず迎えてくれる桜花、ちよつとトイレ行くつもりが予想外に時間が掛かった。

色々と見て回ったので時間は5時過ぎ、空も少し暗くなっている。

「桜花、あと行きたい場所とかあるか？」

この時間になると大体の出し物は閉め始めているが、出しているところはまだまだある。

「ん〜、特に無いかな。」

「なら、俺の行きたいところ位っていいか？」

「うん、兄さんが行きたいところならどこでもいいよ。」

桜花の了承を得て、目的の場所へと向かう、途中他愛のない話をしながらバスに乗り、着いたのは龍宮神社だ。そこでは麻帆良武道大会の予選が開催されていた。

「まさか兄さん、これに出場するの？」

「まあ、そう思ってるんだが・・・」

桜花がキョトンとした顔で聞いてくる、流石に女の子はこんなのは興味ないか、しくじったか？

「すごい兄さん！兄さんなら優勝確定だね！」

予想外に大満足のご様子、まあ喜んでくれる分には問題無いからいいか。

「なんだ義じゃないか。」

「ん？カズ！」

「あ、こんばんは、カズさん。」

「おお、今年も来てたのか。」

声ができる方を振り返るとカズがいた、桜花が元気よく挨拶する、

「ところで、お前も武道大会に出るのか？」

「もってことはカズ、お前出るのか？」

「まあちよつと腕試しにな。」

この大会はスポンサーが超 鈴音に変わってから賞金の額も出場選手の質も驚くほど上がっている、だからカズは腕試しと言っただろっつ、

「まあ俺もそんなところだな。」

カズや桜花にはそう言ったが、勿論腕試ししたいという気持ちはあったが、本当の目的は他にある。

「オ？義切クンネ」

「超 鈴音……。」

さつき桜花を待たせてトイレに行こうとして、その途中に超と鉢合わせした、相手の顔と言葉からも超にとっても予想外の出来事なのだと推測できる、丁度よかった話がしたかったんだ、

「丁度いいところで会ったな、話があったんだ。」

「フム、昨日の続きカネ？」

超が目を細めて少し口の端を吊り上げる、恐らく俺の答えは判っているのだろう、他人の思惑通りに動くってのは良い気持ちはしないがしかたない、俺自身が決めたことだ、

「そうだ、俺は……お前の計画に協力しよう。」

「ソレはとても助かるネ！ヨカタヨカタ。」

俺の答えを聞いた超は破顔したが、すぐに話を切り出してきた、

「デハ、早速協力して欲しいことがあるのだが、いいカネ？」

「何だ、できる範囲なら協力しよう。」

そこで俺は武道大会のことを知らされた、いや武道大会自体は知っていたが、

「武道大会？あのシヨボイ大会のことか？」

「ウム、その武道大会をワタシが買収して規模を大きくしたネ。」

「武道大会に出るのは構わないが、それと計画のどう関係してるんだ？」

「規模を大きくしたことによって色々な達人が出てくるネ、そして魔法も無詠唱魔法までは許可するヨ。」

「なる程、計画の下準備って訳か。」

超の計画は魔法を世界中にバラすこと、武道大会において達人などの人間離れた闘いや魔法を見せられれば大半の人は、『こんな人は実在するかも』『魔法ってあるかも』と思いつく、そうすれば強制認識魔法が発動された時、その人々は無理なく自然に魔法を信じるだろう。

さらに大会について不思議に思った人はすぐにネットで調べる、そこに少し情報を流してやれば一目散に食いつくはず、人は不思議や未知な物に敏感だからな、そうすれば放っておいても噂は広がっていくだろう、

「義切君は本当に話が早くて助かるネ。」

少し驚いたような顔をしながら感心する超、計画に協力するのに加えて色々な奴と闘えるっていうのは悪くない、

「わかった、武道大会に出よう。」

「助かるネ、なにか特別なことはしなくてもいいネ、ただ大会の雰囲気盛り上げて欲しいヨ。」

「りょくかい。」

なんてやり取りがあった。

勿論桜花はおろか刹那や木乃香様、カズにさえも俺が超に協力していることは教えていない。

「義切！」

またしても背後から誰かに呼ばれる、今日はよく名前を呼ばれる日だ、声で誰だかわかるがな、「よっ、刹那。」

振り向き、声を掛けてきた刹那に軽く手を上げて挨拶する、その後ろには木乃香様や神楽坂さん、さらにネギ先生までいた。

「まさか、義切も武道大会にでるのか？」

「そのつもりだが・・・」

「刹那さん、木乃香さん、お久しぶりです！」

いきなり俺の影から桜花が飛び出して刹那と木乃香様に挨拶した、

「あ、ああ。」

「桜花ちゃん久しぶりやな。」

刹那はいきなり桜花が出てきたのに面食らってるが、木乃香様は別段驚く様子もなく、普通に挨拶を返している、流石だ。さらにその後ろからネギ先生と神楽坂さんが続く、

「義切さん、こんばんは。」

「こんばんは。」

「こんばんは、ネギ先生、神楽坂さん。」

すると桜花は次にネギ先生に目を付けた、

「誰この可愛い子？」

「噂の子供先生、ネギ・スプリングフィールド先生だよ。」

「へえ、本当に10歳なんだ、偉いね。」

「あ、ありがとうございます……。」

桜花はネギ先生に近づくと頭を撫で始めた、ネギ先生は顔を赤くして照れているのがわかる。

あ、神楽坂さんが少し面白くなさそうな顔してる！早く引き離さなければ！

「桜花、そろそろ……。」

「うーん、ちっちゃくて可愛いけど、兄さんの魅力には負けるかなあ。」

「桜花！」

人様のいる前でなんてことを言い出すんだこの娘は、早く引き離そうと語気を少し強くすると渋谷ネギ先生から離れた。

「ん、兄さんって？」

桜花がさっき言った一言に神楽坂さんが反応する、まあ説明しようと思っていたところだし、ちようどいい、

「あゝ、俺の妹です。」

「漆川 桜花です、はじめまして！」

「義切さんって妹いたんですね。」

「ええ、まあ……」

「神楽坂 明日菜よ、よろしく、桜花ちゃん。」

『まもなく麻帆良武道大会の参加締め切り時間です、参加なされる方は窓口へお越しください。繰り返します……』

色々話しているうちに時間がたったのか備え付けられたスピーカーから受付嬢らしき人の声が響く、ヤバい早くエントリーしなければ、

「時間になっちまう、早く申し込み行こうぜ。」

「ああ、そうだな。」

「アスナさん私たちも行きましょう。」

「そうね刹那さん。」

「いくで、ネギ！」

「うん、」
「タロー君！」

第16話 く麻帆良祭・一日目・? (後書き)

本編もそうですが学園祭は1日が長いですね、1日4〜5話くらいになりそうです。

第17話 く麻帆良祭・一日目・? (前書き)

遅くなりました、中々勉強が忙しいもので書く時間が取れません、どうかご容赦を。

第17話 く麻帆良祭・一日目・？

『それでは参加者及び見学者は境内にお入り下さい!』

その声と共に神社の門が開かれる、門前に群がっている恐らく参加者であろう人々とその一つ後ろの見学者達が大きな波となって境内に流れこむ、俺もその一部として前に進む。

境内に入るとそこには今俺たちが立っているところより一段高い大體30m四方の、この中で予選を行うのであるう、舞台が4つ用意されていた。

『これより出場者にクジを引いていただいて、引いたクジのアルファベット順に20人ずつ舞台の上で最後の2人になるまで闘ってもらいます!』

マイク片手にそう叫ぶのは3-Aの朝倉さんだ、あの人も超に協力していたのか、

20人ずつの予選だが只今出場者は200人いる、最後の2人と言っていたので本戦に進めるのは20人、するとトーナメントの性質上どこかでシードがあるだろう、そうなると200てのは随分半端な数だな、160か240ならシードなしできれいなトーナメントになるんだが・・・、まさか俺が出場することになったから急遽人数増やしたとか?

そんなことを考えてる内に自分がクジを引く番になったので引いてみるとクジには「と書かれていた。

気になるのは誰と一緒になるかだな、知り合いが結構いるので誰かしら一緒になる気がする。

「義、どうだった？」

クジを引き終わったカズが聞いてくる、カズも誰と一緒に気になるんだろう。

「ん、俺は・・・」だったぞ。」

「・・・俺も」なんだが。」

「マジかよ・・・」

よりもよってカズと一緒にとは、ここにもう一人でも加われれば予選からとんでもない戦いになるな。

『それではクジにより20名そろった組から順次試合開始してください！』

その声と共にちらほらと舞台上の人に人が集まっていく、「はまだまだ集まっていない、今やっているのはA B C Dらしい、よく見ると刹那や神楽坂さん、広域指導にして魔法先生の高畑先生やエヴァさんの姿まで見える。」

「高畑先生に闇の福音までいるのか・・・」

「あの二人とは当たりたくねえな。」

「ああ、全くだ。」

刹那達はもちろん予選を通過した、というか武術や格闘技などを身につけているとはいえ普通の人間が魔法先生、魔法生徒に付け入る

隙などない。

この予選、ある意味出来レースに近い感じがする、勿論魔法先生、魔法生徒が3人以上同じブロックで予選を行う場合は激戦になりそうだが、今までそんなケースはない、それがより出来レースっぽい雰囲気がある。

「義、始まるっばいぞ。」

他の予選が終わり、舞台から人が降りた後、再び人が集まり始める、よく見るとカズの言うとうり「ブロックの予選が始まる」としてようだ、

「そんなじゃ、行こうか。」

「兄さん、頑張つてね！」

桜花の声援に軽く手を挙げて応えてカズと共に舞台へ上がる、周りにいる他の出場者達は皆ガタイが良い、なる程普通の武道大会ならば誰が予選突破するか正直わからないだろう、しかし彼等の不幸はこの大会は「普通」の武道大会ではなかったことだ。彼等の中の一人が俺の肩を掴んできた、

「兄ちゃん、運がなかったなあ、最初の脱落者になつてもらつぜ！」
髭を生やした巨漢であった、まあ普通の中学生だったら投げられるであろう、

「あんだ、その台詞・・・」

「ぐお、じ、じつじー！」

肩に置かれたその手をつかみ返し、足を払って相手の体が一瞬浮いたところに相手の体の下に体の重心を持ってきて、搦んだ腕を思いっ切りひっぱる！

「ぬおおお！」

「負けフラグだぜ？」

所謂背負い投げによって叫びながら吹っ飛んだ巨漢は舞台の外に落ちた、まああの巨体だ、大した怪我はないだろう。

「・・・・・・・・」

「フ。」

「キヤー、兄さん！」

他の出場者は啞然としていて、カズは笑っている、場外からは桜花を含む見学者達の歓声が聞こえる、

「さて、残り17人、ちゃちゃつと片付けますか！」

それからはカズと二人で迫り来る連中を千切っては投げ、千切っては投げの大乱闘（かなり一方的であったが）だった、無論予選を通り過ぎたのは俺とカズだ、

「お疲れ様、兄さん。」

「ひたすらに他の出場者が可哀相だな。」

「まあ仕方ないさ、運が悪かったってことだ。」

カズと一緒に舞台から降りる、隣の舞台はまだ予選が行われているらしく、人が集中していた、

「……ん？おい、義！」

「なんだ？」

ふとそちらを向いたカズが何かに気付いたらしく俺の肩を叩いてきたので俺も同じく隣の舞台の方を見た、

「……あいつ！？」

隣の舞台ではエブロックの予選が行われていたがそこに見知った顔を見つけた、

「ゆ、優人……。」

舞台の上には俺をライバル視している木刀を持っている優人の姿があった、只今戦闘真っ最中だ、優人にのされたのか周りには気絶した出場者達が伸びていた、

「弱いな……、まあ普通の人間に俺と張り合う位の強さを求める方が酷か。」

舞台には優人の他に一人しか立っていないのでちょうど予選が終わったところなのだろう、優人は息一つ切らしておらず余裕の表情だった。

優人があんなに強いとは予想外だった、確かに運動神経がよくても回るがせいぜいそこらへんの不良より強い程度だろうと思っていたが、実際は予想より大分強いみたいだ、

「おいおい、あいつも出るのかよ。」

「ご愁傷様だな。」

カズが笑いながら啞然としている俺の肩に手を置く、優人は絶対に俺を狙ってくるだろう、また苦勞の種が増えたと思うと鬱になる。まあ俺の役割は大会を盛り上げることだ、盛り上げる材料が増えたと思えば少しは気が楽か。

『皆様お疲れ様です、本戦出場者20名が決定しました！』

最後のブロックが終了して、予選を突破20人が進行役の朝倉さんの下に集まる、

『本戦は明朝8時より、龍宮神社、特別会場にて行われます！』

出場者を見渡す、普通の人も混じってるが、殆どが魔法先生、生徒だ、これは面白くなりそうだな。

「・・・ん？」

その中の一人に目が留まった、ローブを被ったその人に他の人には無い確かな違和感を感じる、ただならぬ雰囲気から魔法使いであるだろうことはわかるがそれ以外にも何かある、はっきり何かとは言えないが強いて言うならば存在が曖昧とでも言おうか、一体・・・

『それではトーナメント表を発表しましょう!』

その声を聞いて我に返る、考えても判らない事は考えるだけ無駄だな、今は目の前のことに集中しよう。

はてさて、一体誰と戦うことになるのやら・・・

『こちらです!』

その声と共にトーナメント表が発表される。

「マジかよ・・・。」

俺の対戦相手は風原 一騎、今隣にいる親友の名前が書かれていた、しかも一番右上にかかれているので一回戦目だ。

「フフ、面白そうじゃないか。」

一方のカズはやる気満々だ、確かに面白そうではあるが初っぱなから重い相手だ、その後シードで準々決勝に行くことと、優人が違うブロックにいるってことが救いか。

後めばしい所は、刹那は神楽坂さんと、ネギ先生は高畑先生とか大変だな、俺がさっき気になっていたクウネル・サウンダースって人は普通の人とか・・・、やはり対峙してみなければ謎は解けなさそうだ。

『これを持ちまして麻帆良武道大会、予選は終了とさせていただきます、出場希望者及び見学者の皆様、ありがとうございました!』

その言葉を合図に本戦出場者と見学者はその場を離れていった、気付くとクウネル・サウンダースの姿は無かった。

周りをキョロキョロしている俺に桜花とカズが声を掛けてきた、

「どうしたの兄さん？」

「これから中夜祭があるんだ早く行くぞ。」

「ん、ああ、俺はちょっと用事があるから先に行つててくれ。」

「用事？」

俺の言葉を聞いて怪訝そうな顔をするカズ、

「ちょっと超について偵察してくる。」

と耳打ちすると頷いて桜花を連れて行った、

「すぐ来いよ。」

「待つてるからね。」

二人に手を降つて見送る、

「・・・カズ、悪いな。」

周りの人の目に付かないように境内の奥に入っていく、

「ん？ここは・・・」

暫く進むとパソコンが多数置いてある部屋に着いた、電気も付いているしパソコンも一台電源が入っているので誰か居た筈だが・・・

「ヤッ。」

「うわっ!」

ビビッたあ、いきなり後ろから声を掛けられたので飛び上がりそうになった、急いで振り返り、声の主と顔を合わせる、

「ビックリさせるなよ、超。」

「アハハ、悪かったネ。」

一応、謝ってはいるが悪びれた様子は無い、まったく質が悪いな、

「ところで義切クン、どうしてここに来たのカナ？」

さっきので超の雰囲気飲まれたが、向こうが聞いてきたのでこちらから聞きやすくなった。

しかしやはり超 鈴音、こいつはただものじゃないな、さっきも只の悪戯に見せかけて完全に勢いを自分中心にしている。

「ああ、そうだな聞きたいことがあるんだ、教えてくれないか、君の正体を、なんでこんな事を考えるのか。」

「フフフ、私の正体力、それは・・・」

「それは？」

「未来の火星から来た火星人ネ!」

「・・・・・・は？」

今なんと言った？

未来からきた・・・火星人？

「だから未来の火星から・・・」

「いやいやいや、それは今聞いたよ、ふざけてないでちゃんとした
答えをだな・・・」

「ふざけてないヨ。」

そう語る超の眼は嘘はついていないようだ。

「そんなら、それはどうゆう意味なんだ？」

「それはそのうち判るネ。」

それならそれでもいいだろう、しかしもう一つの方はハッキリさせておかないといけない、

「じゃあもう一つの方、何故こんなことを考える？」

「何故力・・・」

超は俺の横をすり抜けた、それを追うように振り向き、超の背中を見る形になる、

「義切クンには変えたい過去はあるカナ？」

「な・・・に・・・？」

超が振り向く、その顔は悲しみとも虚しさともつかない表情をしていた。

「もし嫌な過去を変えることが出来るとしたら・・・君はどうするかナ？」

第17話 く麻帆良祭・一日目・？く（後書き）

麻帆良祭もまだ一日目すら終わってないですね。

長くなりそうです。

そろそろ本格的にセンター試験対策の時期になっているので次回の更新はかなり先になる恐れがあります、ご了承ください。

第18話 く麻帆良祭・一日目・? (前書き)

まさかのゲリラ更新WWW

第18話 く麻帆良祭・一日目・？く

「もし嫌な過去を変えられるとしたら・・・君はどうするかな？」

「・・・なんだと？」

いきなりの言葉に頭が対処しきれていない。

過去を変える？

確かに、人間生きていれば嫌なことや苦しいことの一つや二つ経験するだろう。

変えたいと思うことだってあるだろう、

「なんていうか、嫌な過去があるから人は成長する、嫌なことを繰り返さない為に、過去を変えられるとして、おいそれと変えるべきではない・・・と思う。」

「フッフ、そう言うと思ったヨ、まるで模範解答ネ、しかしその出来事が多くの人々の命を奪い、その後もずっと人々を蝕むとしたら？」

超は顔では笑っているが眼が本気だ、何の話をしているのかは判らないがふざけてなどいない、本気で遊撃士・漆川 義切に語りかけてきている。

俺を試している・・・

「そ、それは・・・。」

答えがだせない、過去は変るべきではない。

しかし、もし、一つの過去を変えることで多くの人命が救えるのな

らば、遊撃士としては変えるべきなのかもしれない。

「ソウ、それが正解ヨ、君の言うことは正論ダガ、過去を変えて救える命があるなら・・・それもまた正義ネ。」

超の言うとおりだ、どちらにも正義がある、だから否定しきれない。しかし超の話には一つ気掛かりなことがあった、それは手段だ、過去を変えると言うのなら過去に戻る方法がなくてはならない。しかしタイムトラベルなんて今の魔法では無理だ。

先ほどの超の発言、未来から来た火星入というのをそのまま解釈すれば未来から来たと言うことか？

ならば過去に遡る手段を持っているということだろうか。

「しかし、こんな話をしたって過去に戻る方法がないんならなんにも・・・」

「ならば戻ってみるカネ？過去に。」

「手段があるのか？」

「アレコレ説明するより実際に体験した方が早いネ。」

超は懐から一つの懐中時計を取り出した、

「それは？」

「これが過去へ遡る為の装置、カシオペア航時機ネ。」

カシオペア航時機と呼ばれたそれは外見は只の懐中時計だったが、言い知れぬ気配が漂っていた。

「ササ、手を触って欲しいネ。」

「え、なっ?」

「航時機は使用者と接触してる者に効果があるネ。」

「あ、ああ、そういうことか。」

いきなり手に触れてくれと言われて一瞬何かと思ったがそういうことか。

さっそく超の手を取る、超はもう片方の手で航空機に魔力を送り、操作する。

すると航時機が光り出し、時計の針が高速で回りだす。

俺と超の二人は光に包まれる。

「うおっ!」

眩しくて目をつむむ。

しばらくして眩しさを感じなくなり目を開けるとそこは跳ぶ前と同じパソコンルームだった。

「ん、ここは・・・え?」

しかし違うことが一つあった、外が明るい。

「なんだと!?!」

『これより麻帆良祭を開催します!』

外を見ると開催式典の小型飛行機が飛び回っていた。

「本当に・・・時間を遡ったのか？」

俺が啞然としていると後ろから超が声を掛けてくる、

「フフフ、驚いたカネ？」

「マジかよ・・・。」

携帯を見るが、時間は夜の7時を指していた。

「それでは、再び今日を楽しむとイイネ。」

そういうと超はで本殿の奥へ消えていった。

「あ、おい!」

追おうとした時にはもう超の姿はもう見えなかった。

「なんだよ・・・、どうすっかなあ。」

とりあえず何をしようかと考えて最初に思いついたのがクラスの出し物の手伝이었다。

しかし俺は昼頃までのシフトだ、やはりこういう場合は自分に出っ
てはいけないんだろうなあ、

「しゃーない、昼頃まで適当に回って時間潰すかあ。」

とりあえず神社から出るか。

早朝なので正門が開いてないので屋根づたいに境内から出る、誰かに見られたら絶対に変人扱いされるよこれ。

しばらく歩いて人気のある場所に出る、周りの様子から本当に一日目の朝に戻ってきたらしいな、信じていなかった訳ではないが、やはり自分で確かめてみると実感する。

しかしどうしようか、だいたい場所は一回目の一日目で桜花と回ってしまったからなあ。

とりあえず出ていた露店でオレンジジュースを買った。

飲みながら歩くつてのはあまり行儀がよろしくないが、ま、今日くらいはいいだろう。

桜花と大体回ったと思っていたのだが正直麻帆良祭の規模をなめていた、驚くほど出し物が沢山ある、これじゃあ三日あっても回りきるの難しいだろう。

特に大学のサークルの出し物は流石と言うべきか、出来が良い。

機械系のサークルは遊園地のアトラクションの様な本格的な物をやっている辺り熱の入りようが伺える。

「結構面白かったな。」

一つ試しに入ってみたが遊園地顔負けのクオリティだった、結構人も入っているから人気があるんだろう。もうそろそろ一回目の俺のシフトが終わる頃だから、少し休憩してから行こうとした時だった、

「ぶっ!!!」

口に含んだジュースを盛大に吹き出してしまった、幸いに掛かった人は居なかったので良かった。

俺が吹き出したその理由は・・・

「あ、義切さん。」

「な、義切!？」

「せ、刹那・・・」

ばったり会ったのは刹那とネギ先生とカモつちだった、しかしただ刹那を見ただけなら吹き出したりなんかしない、そんな要素が無いし何より失礼だろう。

しかし吹き出したのだからその要素があるという証拠でもある、

「お前・・・その格好、ぷっ・・・なんだ？」

「!？」

そう、その要素とは刹那の格好にあった。

麻帆良祭中はイベントの一環として仮装用衣装が貸し出され、どんな人でも借りることができる、恐らくそこで借りてきたのである。一緒にいたネギ先生はウサギの着ぐるみだ、顔が出るタイプでこちららはまあ可愛いと言える。

一方の刹那もウサギののだが着ぐるみとかではなくウサギの耳を模したカチューシャを被り、毛皮で出来た柔らかさそうだが露出の多い服装だ、そしてトドメのヘソ出しルック。

もう一度言おう、トドメのヘソ出しルック。

大事な事なので二回言いました。

こちらでも可愛いし、似合っていないということはない。

なかったのだが、いつものギャップによる破壊力がその気持ちを遥かに凌駕していた。

顔を背けてなんとか笑いの衝動を抑えようと奮闘するが、どうしてもチラチラ見てしまい、遂に限界を超える、

「も、もう駄目、ククク・・・ハハハハ！」

声を出して笑ってしまう、刹那は恥ずかしいの顔が赤くなっていく、

「わ、笑うなっ！！！」

「義切さん、どうしたんですか？」

「まあ、いつもの姉さん知ってる人からしたら面白いわな。」

その後、笑いつぱなしだったのがなんとか会話できるまで落ち着くまでしばらく掛かった。

「で、いくら麻帆良祭だからって何でそんな格好してるんだ？・・・ブツ。」

落ち着いたといっても改めて見ると笑いが込み上げてくる、刹那が睨んでくるのでなんとか抑え込む、

「それは・・・」

刹那が言葉を濁す、何か言いにくいことなのだろうか、ネギ先生とカモっちと相談し始めた、

「話しても大丈夫でしょうかカモさん？」

「義切のアニキなら大丈夫じゃねえか？魔法生徒だしな。」

「僕も大丈夫だと思いますよ。」

なにやら少し離れて三人でコソコソ話をし始めた。
ちよっとして話が決まったらしい、

「実は・・・」

刹那達の話によると昨日に学園長が魔法先生、生徒を集めた時にト
ラブルが起こり、そこで故あつて超を救い、そのお礼に懐中時計を
貰い、実は貰った時計がタイムマシンで、色々あつてそれが作動し
て、今日の朝に戻ってきたらしい。
それで航時機について問いたただす為、超を探しているらしい。

「タイムマシンねえ・・・」

すぐにそれが航時機カシオペアだと判ったが、あえて黙って知らない振りをし
た、

「信じられないかも知れませんが、本当なんです。」

「まあ確かに、にわかには信じがたい話ではありますが、三人が言
うのだから本当のことなんでしょう。」

「信じてくれるのか？」

「お前がこんな面白い嘘つけるはずないし、俺に嘘をつく理由がな
いだろ。」

「なんか軽く馬鹿にされた気がするが・・・、ありがとう。」

そう言う刹那は少しムツとしていた。

「ま、俺は超がどこにいるかはわからないし、これからクラスの出し物を手伝わなきゃいけないからそっちは手伝えないが、二人とも根が生真面目で日頃は遊んだりはしてないんだろうから探すついでに色んな所回って楽しんだらいいんじゃないか？」

居場所を知らないのは本当のことだし、この二人はお堅いから良い羽伸ばしになるだろう。

烏族だけに羽伸ばし、上手いことを考えた俺。

「ああ、そうだな。」

「ハイ、そうします。」

「んじゃあな。」

軽く手を振り、挨拶をして刹那達と別れる。

しかし数歩歩いてあることを思い出し、懐からあるものを取り出し振り向いて声を掛ける。

「あ、そうだ刹那。」

「ん、なんだ？」

声を掛けられたが刹那振り向く、今だ！

カシャ

携帯電話のカメラ音が鳴り響く、

「・・・・・・・・」

「うしっ！ナイスショット！」

撮った画像を見て、余りに撮れ方が良かったので思わずガッツポーズをする。

一方の刹那は俯き、肩が震えている、キッと顔をあげるとその顔は真っ赤で怒りの表情をしていた。

「義切！！」

「ハハハ、こいつは記念に取っておくぜ、今度こそじゃあな！」

「消してくれー！」

そんな悲痛な刹那の叫びを背に、走ってその場を去る。

こんな面白い物消せるかよ。

その後、クラスに帰るとクラスメイトに用事はいいのか？と聞かれたがもう終わったと言って手伝っていた。

客入りは上々で、俺が予想していたよりも多かつたくらいだ。

この調子なら明日俺とカズがいなくても大丈夫だろう。

武道大会の予選が始まる少し前に上がり、予選が行われている最中はまた麻帆良祭を見て回り、予選が終わったくらいの時間に中夜祭の会場に向かった。

「義！？」

「あれ、兄さん？」

「おうカズ、桜花も、案外遅かったな。」

会場に来たカズと桜花が驚いた顔している、まあ後から来る筈の人間が先に来ていたらそりゃビックリするよな。

「偵察はどうしたんだ？」

「全然だ、めぼしいことは何も無かったから、すぐに引き上げて急いで来たからどっかで追い越したのかもな。」

「そうか。」

「ま、また明日調べりゃあいさ、それより中夜祭始まるから行くうぜ。」

「それもそうだな。」

「兄さん、早く早く！」

桜花に促され、俺とカズは会場に入る。

中一の時の麻帆良祭に来てから桜花が中夜祭に参加するのが当たり前みたいになっていた、クラスが誰も反対しないし、桜花も明るい性格なので皆から好かれている。

クラスメイトと下らない話をしながら中夜祭を楽しんでいると進行役がどこから取ってきたのかマイク片手に喋りだした。

『さあ皆！中夜祭は楽しんでるかー！！』

その声に反応するように叫び声があがる。こいつら素面なのに酒が入ったみたいだなテンションだなぁ・・・

『ここで重大発表があるぞ！』

ざわ…ざわ…

会場がざわつき始め、顎と鼻が伸びてるやつもいる、芸が細かい奴らだ。

しかしなんか嫌な予感がしなくてもない、こういつ時の感ってよく当たるんだよなぁ・・・

『なんと今年の麻帆良武道大会に我がクラスから義切と一騎が出場することになったぞ！！』

うわぁ、やっぱりだよ。

まあ別に隠してるつもりも無かったし、皆知る分にはいいんだがおおっぴらに発表するのは止めて欲しかった。

しかし会場は大盛り上がり、一斉に俺達に群がってきて、質問責めにあつた。

「ふう、えらい目にあつた。」

「まっただくだ。」

俺とカズの二人は質問責めの地獄から抜け出し、会場の外に出た。始まってから結構経つというのに中夜祭の勢いは止まることを知らない。

桜花まで一緒になって騒いでるよ・・・
あの調子だと死人まで出てきそうな勢いだ。

「なあ義、明日の事だが。」

「なんだ？」

不意にカズが声を掛けてくる、カズは少し真剣な顔をした後、表情を緩めた、

「フ・・・、本気でやれよ。」

「・・・・・・・・八、当たり前だろ。」

カズが拳を突き出し、俺がそれに自分の拳を軽く打ちつけ本気で試合することを誓い合っただった。

第18話 く麻帆良祭・一日目・? (後書き)

本当は書いてる場合ではないんですがWWW

次の更新は2月中旬以降になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8793r/>

魔法先生ネギま！～不死鳥の遊撃士～

2012年1月4日23時51分発行